

第5章

交友の広がり



空 手 道 部

河野 陽一

創 立

千葉大学医学部空手道部は、昭和33年福士（昭和37卒）によって空手道同好会として発足し、その後小林ら（昭和39卒）の尽力により昭和37年に正式に空手道部として設立された。初代部長には、当時解剖学教室の野中教授が務められた。しかしその後部員数の減少により、昭和44年の東日本医科学生体育大会への参加を最後に部員がゼロとなり、活動休止を余儀なくされた。空手道部に限らず部の盛衰は文字通り新入部員数によるが、本稿をまとめている河野（昭和48卒）も当時の部員の一人であり、年ごとに部員数が減り休部に追い込まれたことは誠に残念だった。これらの経緯は、木内政寛前法医学教授が記述された千葉大学医学部百周年記念誌（昭和53年発行）の中の「空手道部」に詳しいので参照されたい。

新たな空手道部の発足

その後、昭和50年4月になり医学部3年であった渡辺（昭和54卒）の並々ならぬ熱意により空手道部は再建され、昭和51年に部として正式に認められ初代主将は渡辺自身が務めた。なお、新しい空手道部の部長には、渡辺の学年主任であった第三解剖学教室の大谷克己教授の紹介により、第二生理学教室の本田良行教授が引き受けてくださり、顧問には法医

学教室の木内政寛助教授が就任した。

当時は古い木造の武道場があり、その中に畳敷きの柔道場と板敷きの剣道場があった。空手道部は、剣道部の練習のない日を選んで週3回の練習を始め、渡辺たちの真摯な練習態度に惹かれて参加者は徐々に増えていった。空手道部の指導には伝統流派の教えが必要だが、前述の休部前に指導をいただいていた玄制流との関係は途絶えていて指導者を探すのが当時の大きな課題であった。この問題は、空手道部員だった長島（昭和55卒）が東金市で和道流空手道の誠武会（金坂喜治総師、今井良臣師範）の練習に参加していた関係から、玄制流とは異なる和道流の誠武会が医学部空手道部の指導をしてくださることになった。医学部道場には、戸村要之助師範、遠藤正行師範、高宮喜一師範が来られて実際の指導にあたった。戸村師範は武道の道を説きながら主に和道流空手の考え方と形を部員に教えてくださり、遠藤師範と高宮師範からはエネルギッシュな実践的な組み手を指導された。三人の師範のご指導により空手道部員は、空手道の歴史と奥深さを知るとともに、相手との実践的な駆け引きの面白さを経験することができた。これらはその後空手道部員が医師として医療・社会活動する上でこの上ない人生経験になったことは想像に難くない。さらに誠武会のご好意により千葉大学医学部の空手道部においても和道流空手道の昇級、昇段試験の実施が可能となった。これより部員一同は、昇段の大きな目標を掲げて空



1993年東日本医科学生体育大会(東医体)優勝時の写真

第5章 交友の広がり

手道のなお一層の鍛錬に励んだ。

昭和63年からは和道流誠武会の師範が仲介され、藤田幸雄先生（千葉大学教育学部助教授：現教授）が初めて医学部空手道部の合宿へ指導に来られた。藤田先生の指導はいわゆる型どおりの空手ではなく、体育学的な見地から科学的理論に裏付けられたものであった。その指導の実際はリズムカルなアップに始まり、ストレッチ、またさらにリズムを使ったステップ練習、組み手と音楽をかけ続けての止まるところのほとんどない新しい練習方法だった。部員は今までと違う空手の練習に戸惑うことしきりであったが、実際の空手道大会はポイント制によるスポーツ空手であったから、このような練習法も勝利を得るためには重要な手段であり、国体の空手道部門で優秀な成績を上げられた藤田先生の指導法は大変説得力があった。

最近の活動

当初、空手道部の活動は男子部員が中心だったが、その後亥鼻キャンパス内に併設されている看護学校生や看護学部生も徐々に参加するようになった。女子であっても空手の魅力は男子と同じであり、その数も年毎に増えて女子部もついに誕生し、部活動もにぎやかさを増していった。関東医歯薬リーグ、東日本医科大学体育大会（以下、東医体）等の対外活動にも参加するようになり、女子の競技部も設けられたことも相まって自らの腕試しと愛校心から部活動は大変な盛り上がりを見せた。

具体的な戦績としては、空手道部の活動再開後には東医体個人戦で渡辺（昭和54卒）が優勝、長島通（昭和55卒）が準優勝の戦績をあげることができ、大いに士気が上がった。その後も個人戦や団体戦で戦績を重ね、特に近年では平成5年には千葉大学主管により東医体が開催され、空手は政木主将（平成8卒）の下で西千葉の千葉大学体育館で大会が行わ

れた。そして史上初めて千葉大学医学部空手道部が見事に東医体団体戦初優勝を遂げることができた。その後も多くの優秀な成績を積み重ね現在に至っている。

さて、空手道部の部長は、昭和51年から本田良行教授（第2生理学）が長く務められ、平成4年より木内政寛教授（法医学）、平成14年より河野陽一（小児病態学）に引き継がれている。空手道部員にとっても、実際に道場で空手道の鍛錬を経験された先生が本学の教官となられ、部長の大任を務められていることには誠に心強いと言える。

現在空手道部が指導を受けている和道流空手術は、大塚博紀先生を創始者とする伝統空手道である。初代大塚博紀先生は、明治25年茨城県下館市に生まれ、6歳の頃より旧土浦藩武術師範江橋長次郎の指導を受け、明治38年神道揚心流柔術第3世中山辰三郎師範の門下となり、大正9年に29歳で同流免許皆伝、神道揚心流柔術第4世を継がれた。その神道揚心流柔術に空手そして剣術の理合を根本から見直し、その技術体系にそれら武術の理を取り入れ再構築して創設されたのが現在の和道流空手道連盟（<http://www.wado-ryu.jp/wado/wado.htm>）である。和道流空手道連盟の総本部は東京都練馬区にあるが、千葉大医学部空手道部は千葉県東金市にある和道流誠武会の指導を受けて日々精進している。

このように千葉大学医学部空手道部には、多くの先生方のご指導のもとに築いてきた長年の伝統と歴史がある。現在部員は10名を数え日々精進を重ねており、戦績にも目を見張るものがある。また、千葉大学医学部OBにも100名を優に越える空手道部員がいて横のつながりも密に日々の診療活動を行っている。

稿を終えるにあたり医学部空手道部に関わられた皆様方のご指導・ご協力に心より感謝申し上げます。

（この よういち）

弓 道 部

高橋 和久

弓道部創設から昭和52年までの出来事については、大塚嘉則先生が「千葉大学医学部百周年記念誌(昭和53年1月10日発行)」に「弓道部」として記載されている。このため、本誌には大塚先生の文章の要約を述べ、主として昭和53年から平成21年までの32年間について記すこととする。参考とした資料は、千葉大学医学部弓道部発行の「道場設立60周年記念一如(昭和63年12月20日発行)」、「道場設立70周年記念一如(平成10年2月発行)」および「一如堂設立80周年記念誌一如(平成20年7月発行)」である。

大塚嘉則先生著 千葉大学医学部百周年記念誌 「弓道部」の要約(一部高橋変更加筆)

千葉大学医学部弓道部の歴史は古く、明治の頃まで遡るようであるが、現在はその記録が残っていないためその源は不明である。また、部の歴史には千葉医専から千葉医科大学に昇格した移行期と第二次大戦末期から戦後しばらくの間の2回にわたる中断がある。

(1) 弓道場設立以前(医専時代)

この時代は大正9年卒の益子民和先生にまで遡ることができるに過ぎない。部長は法医学の高田義一郎教授であり、師範は塚本直清師であった。射場は現在の弓道場の上、七天王塚の椎の木の下にあり、後に師範となられた大木賢三範士は塚本師範の門弟であり、しばしば道場を訪れていた。高田部長の後任は眼科学の伊藤弥恵治教授であった。

(2) 新弓道場設立より終戦まで(医科大学時代)

大正13年に千葉医科大学第2期生として入学した森義雄先生は大学に剣道と柔道を合わせた武道部を設立し、その後弓道部を含めた武道部とした。初代部長には病理学の石橋松蔵教授にご就任いただき、新たな師範として大平射佛範士を迎えた。しかし、大学には弓道場がなかったため、大平師範が門弟であった名古屋の大日本陶器社長の広瀬一如範士に相談され、広瀬範士が千葉医科大学に弓道場をご寄附下さることとなった。これらの経過をまとめるにあたり、学生部長の松村泰教授が大いに力を尽くされた。かくして現在の地に

間口六間の本格的な弓道場が完成し、昭和2年9月23日盛大な落成式が行われた。新しい弓道場は広瀬一如範士を記念して「一如堂」と呼ばれることとなった。大平射佛師範は道場の額に今も残る「大尖光」「五神五到」などの壮大な弓道感を指導された(写真1, 2)。戦前の弓道部は昭和12年頃に全盛時代をむかえたが、昭和17年9月には太平洋戦争の激化による運動部解散のため弓道部もその後自然に消滅していった。昭和18年、松村部長は大使館付参事官として南京へ行かれたため、小児科の詫摩武人教授が弓道部長となられた。昭和20年の終戦直前には、軍の部隊使用に弓道場も当てられ、塙は炊事場と化したまま終戦を迎えた。



写真1,2 大平射佛範士の筆による「大尖光」「五神五到」の額

(3) 戦後の弓道部(千葉大学医学部弓道部)

新制千葉大学において昭和32年5月、千葉大学弓道部が稲毛の教養課程に誕生した。顧問は国文学の緒方惟精教授で、この年の12月に大木賢三教士を師範に迎えた。昭和33年、大塚嘉則先生は医学進学課程に入学し弓道部に加わり、翌34年には部長を務め、千葉大学弓道部発展の基礎を築いた。昭和35年、大塚先生は亥鼻地区の専門課程に進み、医学部弓道同好会を設立した。このような折に生理学の福田篤郎教授が戦前の弓道部員であったことを知り、ご相談に伺い、弓道部の復興、弓道場の再建のため、大きなご尽力を頂いた。昭和36年、弓道同好会は福田篤郎教授を部長

にお願いし、正式に医学部弓道部に昇格した。師範は引き続いて全学とともに大木賢三先生を迎えることとなった。昭和36年4月25日、時の谷川久治医学部長は弓道場および柔剣道場の一括復興を決定された。修復工事には千葉市の三和工務店があたったが、医学部のほか薬学部および全学の弓道部員が矢道の整備などに力を尽した。昭和37年6月7日、第1回関東医科学生弓道大会が、復興なった一如堂において行われた。昭和38年9月8日、大木賢三先生範士昇格記念射会が一如堂にて行われた。昭和42年10月15日には道場設立40周年記念射会が開かれた。昭和43年11月には慈恵戦が復活し、翌44年9月には三医大戦（千葉、信州、群馬）が始まり、昭和45年10月には福島医大が加わり四医大戦となった。昭和45年11月、第1回三医大戦（千葉大、慈恵の戦前の三医大戦の復活）が行われた。昭和46年9月10日、病氣療養中であった大木師範は及川勝己千葉県弓道連盟理事を次の師範に推挙された。昭和47年11月19日、第3回関東看護学生弓道大会（看学戦）が千葉、慶應、群馬、東大の4校で行われた。昭和48年、高橋は主将に就任したが、各大会での成績はあまり振るわなかった記憶がある。松村名誉教授は昭和48年6月9日、逝去された。道場玄関の「一如堂」と揮毫された木の額が遺筆となった。同年7月22日、松村名誉教授追悼射会が行われ、これを機に「松村杯」が設けられた。この年の12月には福田部長がご病気のため退官されることとなり、後任部長を整形外科学の井上駿一教授にお願いし快諾を得た。昭和49年9月、部誌発行の企画が出され、翌昭和50年9月1日、部誌「一如」創刊号が刊行され、特集は「戦前の弓道部」とされた。この年の7月、千葉大学看護学部が開学している。8月4日、大木賢三範士が逝去された。この年の9月11日、吉田英生先生（現小児外科学教授）が新主将に就任している。昭和52年7月24日には道場設立50周年記念射会兼第5回松村杯が行われた。

昭和53年から平成9年までの弓道部

今回、「千葉大学医学部135周年記念誌」の「弓道部」の項を依頼された際、いささか困惑を覚えた。昭和51年の卒業以来、2年間の市中病院勤務と留学期間を除き、ほぼこの亥鼻に生活した身ではあるが、弓道部との関わりは学生諸君との交流に限られており、その歩みを詳細に知っているわけではな

い。正確を欠く記載や重要事項の欠落など不十分な点もあると思うが、現在弓道部部长を拝命している立場もあり、記載させて頂いた。

幸いなことに、前述のごとく千葉大学医学部弓道部発行の資料があり、これらを参考にさせて頂いた。特に事項の記載は「道場設立70周年記念一如」の岩田剛和先生、水流京子先生による「弓道部及び弓道場の歴史」および「一如堂設立80周年記念誌一如」の宮下直也先生、石川賢太郎先生、松村琢磨先生、菊池賢先生による「過去十年間の弓道部史」から抜粋、加筆させて頂いた。

昭和53年、及川勝己範士のご健康がすぐれないため、及川先生から山崎新蔵先生をご紹介いただき師範となって頂いた。この年の5月27日から、毎月例会が開かれることとなった。この頃、弓道部の成績は良好に推移している。11月5日の第34回関東大会では団体2位に入賞した。また、11月12日の第9回三医大戦では団体優勝をしている。昭和54年11月3日の第36回関東大会では団体2位、11月11日の三医大戦では団体優勝している。昭和55年4月27日の第12回五医大戦では男子、女子ともに団体優勝をたしている。昭和55年7月26-29日、千葉大学が主管で第23回東医体が天台弓道場にて行われた。11月9日の第11回三医大戦では団体優勝をしている。昭和56年5月31日の第39回関東大会では団体2位となった。また、8月1-3日に、東京医科歯科大学の主管にて明治神宮至誠館にて行われた、第24回東医体では120射63中という成績で団体戦3位となった。

昭和57年頃から看護学校の部員も増え、「医学部弓道部看学主将」ということが意識されはじめた。昭和58年2月道場の床と屋根の張り替えが行われる。昭和59年7月3日、着色した道着が完成し、公式には黄色の道着、個人用には希望により桃色の道着が作成された。昭和60年5月、水色の道着が製作された。昭和60年10月10日、第10回もみじ会（医学部女子の試合）が開催され、17年ぶりに医学部女子部員として入部した2名が参加した。昭和61年4月21日、戦後の初代部長、福田篤郎名誉教授がご逝去された。昭和62年8月30日、道場設立60周年記念射会・祝賀会が開催された。9月21日、弓道部部长井上駿一教授が肝細胞癌のため、57歳でお亡くなりになられた。翌25日には通夜、26日には告別式が行われた。11月7日、井上教授追悼射会（第1回井上杯）が、故井上教授夫人幸子様のご出席のもとに行われた。井上教授の後任として昭和63年5月21日、守屋秀繁先生が整形外科教授となられ、新しい弓道

部部長にご就任頂いた。12月20日、「道場設立60周年記念一如」が完成した。

昭和64年1月7日、昭和天皇が崩御し、1月8日、平成元年と改元された。平成元年3月31日、第1回看学杯が行われた。6月4日、千葉大学主管にて第55回関東大会が天台弓道場にて行われた。この大会で初めて林初男先生がお出でになった(写真3)。その後、山崎新蔵師範の健康がすぐれず、一如堂に来られなくなり、代わって林先生がご指導下さるようになった。平成4年には看護学部2年生が7人入部した。看護学部生は昭和60年卒の遠藤(旧姓酒井)康江さんを筆頭にその後も多くが入部している。平成6年3月1日、紫の道着が完成した。3月27日、11年ぶりに一如会総会が行われ、菊地紀夫先生が新会長に就任した。平成6年4月から、医学部を含む千葉大学全体の教育制度改革が起こり、この年の入学者から医進課程の廃止、教養の講義の実質1年への短縮、夏休み時期の変更などが行われたため、練習開始時刻など部活動および運営上の問題が生じた。この頃、看護部員は看護学校中心であった時代から、全員看護学部部員となった。平成7年6月4日第67回関東大会にて団体戦2位となった。7月29-31日、第38回東医体団体6位に入賞、10月22日、第68回関東大会団体2位、また10月29日の第26回三医大戦では160射106中の成績で団体優勝を達成した。平成8年6月2日、第69回関東大会では団体戦3位に入賞した。9月25日、記録的な大雨のた



写真3. 現在の師範、林初男先生のお写真

め、連絡道路の野球場側で土砂崩れがあり、道場も倒木により軒が破損した。平成9年8月30日、一如堂設立70周年記念射会および祝賀会が行われた。

平成10年から平成21年までの弓道部

平成10年8月5-7日、千葉大学が主管で第41回東医体を東京武道館にて開催した。11月1日、第74回関東大会にて団体戦2位となった。平成11年6月13日、第75回関東大会に白道着に腕章をつけて臨み団体戦に優勝した。平成12年10月1日、三医大戦の団体戦において優勝した。11月5日、第78回関東大会において団体戦2位となった。平成13年5月13日、第79回関東大会にて団体戦3位となった。10月7日、三医大戦の団体戦にて優勝した。10月28日、第80回関東大会の団体戦で2位となった。平成15年7月30-8月1日、第46回東医体にて団体戦6位となった。10月26日、千葉大学が主管となり、第84回関東大会を明治神宮で開催した。平成16年10月24日、三医大戦の団体戦で優勝した。平成17年10月23日、三医大戦の団体戦にて優勝した。平成18年5月21日、第89回関東大会にて団体戦5位となったが、この時、白道着にて試合に臨んだ。10月21日、三医大戦の団体戦において優勝した。12月4-20日、道場の床、壁、雨戸などが修復された(写真4)。



写真4. 現在の一如堂

平成19年2月1日、19年間弓道部長をおつとめ頂いた守屋秀繁教授が退職されることとなり、最終講義をされた。この最終講義には弓道部員全員が出席し、先生の講義を拝聴した。5月15日、整形外科学准教授である高橋和久が第五代の弓道部長となった。7月1日、高橋は第四代の整形外科学教授に就任した。8月7-9日、千葉大学が主管し、第50回東医体を東京武道館にて開催した。9月17日、一如堂設立80周年記念式典が行われた。10月21日、三医大戦の団体戦にて優勝した。平成20年1月20日、高橋和久および平成19年10月16日に小児外科教授に就任した吉田英生先生の祝賀会が開かれた。8月3-

第5章 交友の広がり

5日、第51回東医体にて、27年ぶりの団体戦入賞となる3位となった。8月24日に、金沢大学の主管にて石川県立武道館にて行われた第42回全日本医科学学生体育大会王座決定戦では第4位となった。平成21年6月7日、第95回関東大会にて団体戦3位となり、15大会ぶりの入賞を果たした。11月14日、第34回紅葉会が千葉大学が主管となり東京武道館にて開催された。(写真5)は平成21年に在籍する弓道部員である。

おわりに

千葉大学医学部弓道部の歴史は「一如堂」とともに歩んだ歴史と言っても過言ではない。「一如堂」をご寄附頂いた広瀬一如範士、部発展のために、数々のご指導を賜った大平射佛範士をはじめとする歴代の師範、歴代の弓道部長、戦後多くの困難を乗り越えて弓道部を再興された大塚嘉則先生、および部の運営にたずさわった全ての方々に感謝を込めて稿をとじる。

(たかはし かずひさ)



写真5.平成21年在籍の弓道部員

左から、4列目:早川優香・渡辺知香・能川琴子・高田いつ奈・松井慎一郎・木下翔太郎・鈴木陽大・堀川貴史
山内陽介・田中貴大
3列目:鈴木里実・平野瑤子・小谷野友里・小池瑞穂・田頭良介・柴田裕貴・石川絢一・佐久間崇文
荒川博明
2列目:早坂知美・大内麻愉・室井歩・伊藤海青・浦崎智恵・八島聡美・高田純子・仲村千鶴
1列目:山本雅・荒川さやか・石川賢太郎・宮下直也・鹿野幸平・畑敦・菊池賢・塚田喜子・川合祥子

剣 道 部

長尾 啓一

平成21年5月23日（土）、24日（日）の2日間、千葉ポートアリーナにて第48回全日本医師剣道大会を千葉県がお世話をさせていただいた。千葉での開催は2回目である。

大会長は元千葉大学医学部放射線科に奉職され医学部剣道部がご指導いただいた遠山富也先生ということで、千葉大学医学部剣道部OBが中心となって準備から大会運営、そして全試合を記録したDVD作成まで担当させていただいた。実行委員長兼副大会長はS44年卒の西島浩先生（千葉社会保険病院長）、渉外にはS48年卒の広瀬彰先生（千葉市立海浜病院長）とS50年卒の小出義雄先生（鎗田病院副院長）、事務局としてS61年卒の新藤寛先生（新藤医院院長）とS47卒の長尾啓一（筆者、千葉大学総合安全衛生管理機構）があたり、全日本剣道連盟、千葉県剣道連盟との繋ぎ役にはS50年卒の佐々木健先生（稲毛整形リハビリテーションクリニック院長、全日本剣道連盟顧問医師）が、そしてS43年卒の鈴木秀先生（前千葉労災病院副院長）、S61年卒の川島辰男先生（東邦佐倉病院）にも随所でご尽力いただいた。もちろん剣の繋がりで県内の慈恵医大出身、霜禮次郎先生・守正英先生にも多大なご指導、ご助力を賜った。

大会当日には、当然現役部員諸氏の協力もいただ



写真1.奥が旧道場。桜が美しかった。

き、大成功と相成った。終了後、記録のみならず記憶にも残る素晴らしい大会であったと遠山会長宛に多くの参加者からお褒めの言葉を頂戴した。さもありなん、千葉大学医学部剣道部に連綿と繋がる伝統、秘めたる力の賜物である。

さて、35年前の剣道部を想起してみよう。昭和49年である。野球グラウンドの西北側の法面（のりめん）、連絡道路と弓道場の間に焼却炉の高い煙突が残り、その横に頑強な平屋の建物があった（写真1）。建物中央、野球場側に玄関口があり、右が柔道場、そして左が剣道場であった。玄関前には桜の古木があった。玄関を入ると突き当たりに旧病院と繋がるスチームが引かれた浴場があった。一時教場または寮として使われたとも聞く。トイレはいつ汲み取りが来たのか分からないほど排泄物が貯まっており、前使用者の健康状態が容易に分かるという代物であった。しかし、道場の両窓側には1畳幅で畳が敷かれた上がりがあり、使い勝手はすこぶる良かった（写真2）。昭和42年までは縦230cm横150cmの姿見があったが筆者の同級生の突進で一挙に破壊され、以降そこに鏡の取り付けはなくなった。

件の昭和49年3月、当時の剣道部顧問の第一外科教授綿貫重雄先生が退官された。昭和12年千葉医科大学卒業の剣道部大先輩であり、眼光鋭くいかにも



写真2.旧道場での稽古風景。順番待ちの上りは畳敷き。

第5章 交友の広がり

剣士風であった。まったく飾らない方で、往時のナンバー外科教授という当時話題の「白い巨塔」を想像したがその対極にあるような先生であった。しかし、その存在感はすごく、稀に道場に來られると緊張感が漲った。先生は昭和59年に剣道範士の称号を授与され、翌60年に千葉で初めて開催された全日本医師剣道大会の会長を務められた。綿貫先生ご退官後の剣道部顧問は眼科教授の石川清先生であった。石川先生は昭和19年千葉医科大学卒業のこれまた剣道部の大先輩。温厚で洒脱な先生であった。ここからが過去35年の始まりである。この時期、筆者はすでに卒業していたが後輩達はその後およそ10年間、われわれと同じようにこの道場（以下旧道場）で青春を謳歌した。

剣道部の年間行事は新入部員勧誘から始まる。当時は医学部事務に行って学生の個人調書を拝見し（今ではとんでもない行為である）、剣道経験者をリストアップ。そして入学手続きに來た学生を捕まえるというものであった。時には「医学部剣道部って強いんですか？」などと聞く失礼な輩もいたが、多くは剣道という一語でシンパシーを示してくれた。

その後、4月に新入部員歓迎コンパ。当時は高校卒業＝社会人と見なされたので新入生は飲みようが飲みまいがアルコールの洗礼を受けた（これも今ではとんでもないことである）。5～6月には関東医歯薬獣剣道大会新人戦と個人戦があり、昭和58年には新人戦で優勝という快挙、そして以降も個人戦では常にだれかが入賞していた。

続いては6月に金沢大学、新潟大学との持ち回り三大学対抗戦があった。東日本の旧6医科大学中3校での親睦試合であったが、剣道試合の後の懇親会がこれまた凄かった。金沢、新潟は酒処である故か、懇親会では千葉の苦戦が続いた。しかし、おかげで今でも人脈は保たれており、医学・医療面でも交流がある。

7月の学科試験が終わると直ちに夏合宿となり、旧道場に布団をレンタルして泊まり込みの稽古となった。蚊やブヨが多いのは時代と土地のせいである。寝る前には寝所である道場を閉め切って殺虫剤のバルサンを焚く。疲れて死んだようになって寝ても朝6時には「起きろー」の声で起床。朝のトレーニングが終わると朝食。稽古の前には雑巾を使って四つん這いになっての道場床ふきである。午前の稽古、昼食、午睡、午後の稽古。稽古後の夏の水風呂は心地よかった。締めくくりの夕飯も学食で。まさに同じ釜の飯を喰らったわけである。

合宿が明けると東日本医学生体育大会であった。昭和63年には団体戦で準優勝を果たしている。個人戦では昭和50年卒の佐々木健先生の個人戦優勝をはじめ、入賞はしばしばあった。また、遠征は楽しく、大会後の旅行はすべてから開放されて至福の時間であった。

秋には11月に関東医歯薬獣剣道大会があり、公式戦はこれで終了。そうこうしているうちに12月となり、納会と卒業生の追い出しを兼ねたコンパとなる。ここで主将、主務等役職交代となり剣道部の年間行事が終わる。

石川先生が顧問をなさっていた最後の年は剣道部にとってたいへん大きな出来事があった。剣道場の移設である。旧道場は老朽化のため取り壊しとなり、新たに体育館を兼ねた新道場が建てられた。場所は旧肺癌研究施設の跡地で旧精神科棟の前である。近くに七天王塚をお祀りした巨木がある。昭和58年5月7日、新入部員歓迎を兼ねて新道場で大先輩のお名前に因んだ数馬杯争奪戦を行い、終わって旧道場にて別れの杯を傾けた。古く大きな額に飾られた「剣学一如」の書、壁のあちこちにある竹刀で突かれて空いた穴、足底のママからの浸出液もしみこんでいるだろう黒光りした道場の床、部室として使われた小部屋の気の利いた落書き、何をしても闕けなかった風呂場の石風呂、何もかもが思い出である。これにより旧道場は建設以来実に51年になる歴史の幕を閉じた。翌59年4月に石川教授は定年退官され、顧問は寄生虫学教授で剣道部OBの小島莊明先生に引き継がれた。小島先生は戦後医学部剣道部が復活した初代の主将であり、同先生は前記した全日本医師剣道大会を盛会裡に運営された。しかし、平成元年に東京大学医科学研究所に教授としてご栄転され千葉を去られた。

引き継いで顧問になられたのは旧第一外科助教授の更科廣實先生であった。更科先生は豪放磊落なようできて大変な人情家であった。吉川英治著の宮本武蔵から「剣は心なり、心正しからざれば、剣また正しからず」の一節を引用し剣の精神を部員に浸透させ後輩から大いに慕われた。まさに、剣を交え、語り合い、酒を酌み交わし、涙するという顧問・OB・現役部員の結束大固い時代であった。この時期、団体戦ではいいところまで行くもの入賞には届かなかった。しかし、平成5年卒の安藤拓志先生の2年連続東医体個人優勝という快挙は特筆するに値した。またこの頃から新道場での寒稽古が始めら

れ、土曜日の打ち上げでは餅つき大会が行われるようになった。

平成7年に更科先生は千葉市立病院（現在病院長）に転出され、引き続き肺癌研究施設病理教授の大和田英美先生が顧問になられた。大和田教授はお嬢さんが剣道をされていたことと、当時、病理で昭和56年卒業の笠松紀雄先生が研究をしていたという縁で引き受けて下さった。剣道部の先輩が医学部内にいないという危機であったが、大和田先生の顧問受諾は剣道部一同にとり涙が出るほどありがたかった。そして、事実剣道部員もさまざまな相談を持ちかけそれに親身に対応して下さいました。その大和田先生も平成15年にご退官となり、剣道部に関係がある医学部教授が不在という状況に陥ろうとしていた。そんな中、大和田先生は医学研究院遺伝子生化学（旧第一生化学）教授の瀧口正樹先生に剣道部顧問をお願いして下さいました。奇しくも瀧口先生は筆者の全学剣道部同期部員（工学部）の弟さんに当たる。

平成10年代前半は大学生の一气飲み、ついでアルハラが大きな問題となった時期である。特に運動部の若者は何をするにも全開の状態エネルギーを発散する傾向が強く、昔を知るOBは後輩の気持ちも分かりすぎてしまう。瀧口先生は顧問としてハラハラし通しであったと思われるが、場が愉快かつ学生が処分を受けたりしない様に度々直言して下さいました。おかげで今でも新入生歓迎会、卒業生送別会などの宴席にはOBも心地よく出席させて頂いており、縁の繋がりに感謝している。平成21年5月から

は昭和63年卒剣道部OBで糖尿病・代謝・内分泌内科の教授に就任された横手幸太郎先生が顧問を引き継いだ。また新たな医学部剣道部のエポックが始まった。

今一度この35年間を振り返ってみよう。老朽化したとのことで取り壊された旧道場であったが、その床の艶の見事さは今でも覚えている（写真3）。平屋の高い屋根は古くなったとはいえ頑丈な瓦で覆われ、大概の雨では雨漏りの心配はなかった。そのお陰で真夏でも室温が異常に高くなるということもなかった。そして夏合宿の夜も睡眠を妨げるほどの暑さはなかった。旧道場の跡地は更地になっているが道場入り口にあった桜の木はそのままである（写真4）。数年以内には医薬系の新館が建つ予定である。新道場と言われた現在の体育館内の道場もすでに築後26年となった（写真5）。道場の手入れは良いがシャワー室などの老朽化で修繕を繰り返す現在である。部室は旧精神科病棟の建物内にあり、清潔感に乏しいのは昔の剣道部のままである。

宴席を伴う行事も変わった。35年前は歓迎会、歓送会はいずれも医学部キャンパス西門に隣接した医学部同窓会館であった。今では倒壊寸前であるが何とも使い勝手の良い施設であった。その後、宴席は医学部正門前の中島ホテルの宴会場に移り、最近では院内町の割烹が使用されている。二次会も昔は「ごみとり」が定番であったが、その後中華料理店、鳥料理専門店へとグレードアップされた。豊かになった故であろうが本当に変わった。



写真3.旧道場での練習試合。床の艶は見事。



写真4.旧剣道場の跡地。桜の木は残っている。

医学部剣道部OBの活躍ぶりは目覚ましい。千葉市内の公的病院の内、3つの病院長が剣道部OBである。昭和46年卒の保坂善昭教授は昭和大学形成外科にて、昭和53年卒の吉原俊雄教授は東京女子医科大学の耳鼻科にて医学研究・教育業務に就いている。また、共に旧道場で汗を流した多くのOBが診

療所、病院の第一線医療で活躍しているが、最後に文筆家として大活躍の2人のOBを紹介する。

奇しくも2人ともミステリー小説を著して大賞を受賞されている。まず、昭和42年卒、剣道部OBの結城五郎（ペンネーム）氏。平成9年度第15回サントリーミステリー大賞をデビュー作品「心室細動」で受賞され毎年新刊を世に出されてきた。

もう一人は昭和63年卒、剣道部OBの海堂尊（ペンネーム）氏。平成17年度第4回「このミステリーがすごい」大賞受賞。デビュー作品は後に映画化もされた「チーム・バチスタの栄光」であった。この番外編として著された「光の剣」には同氏の大学時代の剣道部経験が余すところなく活かされていた。

こう綴ってくると、剣道部での連綿と続く人の繋がりはまさに「交剣知愛」の実が具現されているように感じる。先輩達から受けた恩はそのまま後輩達に引き継いで行くというまさに輪廻転生である。剣道部員、OB諸氏には剣道で鍛錬した智・徳・体を遺憾無く医療・医学のために駆使し、今後も一層発展をされることを祈念する次第である。

（ながおけいいち）



写真5.新道場での集合写真。昭和58年、関東医歯薬獣剣道大会新人戦優勝の賞状を持って。後ろに旧道場から移した「剣学一如」の額が見える。

ゴルフ部

澤 真太郎

千葉大学医学部135周年記念誌のご発刊、誠にありがとうございます。

このような場で、学生である私たちが筆をとらせていただくことは誠に恐縮ではございますが、謹んで千葉大学医学部ゴルフ部の創設時や、現在の活動についてしたためさせていただきたいと思えます。

私たちの所属する千葉大学医学部ゴルフ部は、1983年（昭和58年）に創設され、今年で26年目を迎えます。保元明彦先生（昭和60年卒）や古口徳雄先生（昭和60年卒）らが中心となってくださり、当時の第二外科教授であられた佐藤博先生（故）を部長としてお迎えし、発足しました。

この記念誌の原稿を書くにあたり、当時の部誌を資料として拝見いたしました。大会や合宿などにおける様子を垣間見たり、部活動という団体を運営する悩みや苦勞などが書かれているのを読んだり、私たちとあまり変わらない当時の先生方を知ることができ、更なる親近感を抱くことができました。また、歴代の部長や顧問の先生方、部員だった先生方が「同好会ではなく、学生の部活動としてのゴルフ部のあるべき姿」について語っておられることに感銘をうけ、「打ったら走る」「キャディバッグは担ぐ」「キャディバイトをしてラウンドをさせてもらう」などを、現在でも部活動全体の指針として維持できていることを誇りに思っております。

現在、ゴルフ部は総勢65名となり、四代目部長であられる織田成人救急集中治療部教授のもと、全日本医科大学ゴルフ連盟春季・秋季大会リーグ戦と東日本医科学生総合体育大会の3大会に加え、医科歯科杯や五校戦などの交流戦で他大学と競い合い、交流し合い、仲良く楽しくかつ真剣に活動に励んでいます。その他にも、東医体打ち上げ旅行での部内コンペや卒業生との追い出しコンペなどのほかにも自主的に小規模コンペを行い、また春・秋のOBコンペではOB・OGの先生方とも交流を重ねております。

普段の活動と致しましては週2回の正規練習のほか、土日のキャディバイト後の練習ラウンド、そして二代目部長であられた山口豊肺外科教授（故）の御助力で練習場として使用できるようになった弓道部道場の隣にある敷地に、三代目部長であられた

平澤博之救急集中治療医学名誉教授がネットや打席等を整備してくださったアプローチ練習場で各人がアプローチ練習を行っております。

歴代部長の先生方や、これまでの先輩の先生方が整えてくださった環境における日々の努力が実を結び、近年では、全日本医科大学ゴルフ連盟春季・秋季大会リーグ戦において男子部がAリーグ昇格・維持（2007、2008年）、東日本医科学生総合体育大会において女子部が優勝（2007年）と、華々しい成績を修めることができました。

ここで、活動報告として上に述べたAリーグ昇格・維持や東医体について少し振り返らせていただきたいと思えます。

まずは、男子部が果たした全日本医科大学ゴルフ連盟春季・秋季大会リーグ戦Aリーグ昇格・維持に関してのエピソードですが、その前に医学部ゴルフ部の大会やリーグ戦の仕組みを簡単にご紹介します。

医学部ゴルフ部の大会は、大きく分けて東日本医科学生総合体育大会と全日本医科大学ゴルフ連盟春季・秋季大会リーグ戦（関東・信州）の二つがあります。これらの中で、全日本医科大学ゴルフ連盟春季・秋季大会リーグ戦の男子部のみ、通年の成績で各大学の順位を競う仕組みになっています。

リーグ戦は上位からAリーグ（7校）、Bリーグ（8校）、Cリーグ（6校）と分かれていて、十数年前からつい二年前まで、千葉大学はBリーグに属しておりました。しかも、その頃は現在に比べて部員数も遥かに少なく、再びAリーグへ昇格することはなかなか難しいと考えられていたそうです。

しかしながら、ここ数年で部員数が急速に増えたことも重なり、当時の6年生を筆頭に皆で一丸となって練習に打ち込む中で力をつけ、2007年春リーグにおいて、同年の秋リーグにおけるAリーグ昇格を賭けた入れ替え戦を視野に入れることのできる好成績を修めることができました。春リーグ後は、秋リーグでの入れ替え戦を目標に更なる練習に励み、どの学年もバランスよく実力をつけていきました。特に、当時の6年生の先輩方は勉強の時間以外ほとんどゴルフに裂いていたと言っても過言ではないくらい全力で練習していたために非常に強く、この

第5章 交友の広がり

機会を逃しては、しばらくAリーグには昇格できるチャンスはないのではないかと思われるほど完成されたメンバーで秋リーグに参戦し、念願のAリーグ昇格を賭けた入れ替え戦に臨むことができました。

入れ替え戦には当時の2年生から6年生までの5人の選手が出場し、危うく棄権になりそうな選手がでるなどのトラブルを越えて、悲願のAリーグ昇格を果たしました。

Aリーグ昇格が決まってすぐ、試合会場の外で円陣を組んで行ったミーティングでは、選手や卒業学年の先輩方が各々、これまでの想いやこれからについての考えを語りましたが、特に6年生の先輩方は、数年にわたり部活全体を背負って頑張ってきただけに感慨もひとしおだったようで、涙をこらえられないほど嬉しい様子でした。

さて、それから一年後。前年に千葉大学をAリーグに昇格させた立役者である先輩方が卒業され、さらに今度は強豪校のひしめくAリーグであるが故に、2008年春リーグにおいてはAリーグ内で最下位という結果になってしまいました。危機に瀕し、更なる練習に励んだものの、秋リーグの結果だけでは順位を変えることができずにBリーグ上位2校との入れ替え戦に引っかかることとなってしまいました。

状況は芳しくありませんでした。選手たちの調子はあまり良くなく、このままでは先輩方が全力を尽くし、悲願のAリーグ昇格を果たしてわずか一年でBリーグに落ちてしまうのではないかという不安が皆に募る中、入れ替え戦に臨みました。

選手各々が午前中の戦いを終え、試合の半分が過ぎた休憩時間のことです。部内トップの実力を持つ当時の主将がイスに座っているのが見かけられましたが、かなり沈んでいる様子でした。あとで聞いた話によると、そのときあまり良くないスコアで前半を折り返してきた主将は「一番いいスコアを出さなくてはいけない自分が、こんなスコアを出しているわけにはいかない。このままではBリーグに落ちてしまう。後半はとにかく挽回しなければ。」といったことを考え、焦っていたそうです。言い換えれば「一人で戦っていた」といってもいいかもしれません。

ゴルフの団体戦というのは、5人の選手がそれぞれ別の組でラウンドをし、最終的に全員の合計スコアを大学ごとに競うという仕組みになっています。選手のうち一人が良くても他の人が悪ければ戦うことが難しく、逆を言えば突出した人がいなくても全員がそれなりにまとまっていれば勝負できるという

面白い一面を持っています。

そんな中、一人で焦っている主将に、選手の一人が「みんなで」後半も頑張っ、Aリーグに残留しましょう！」と声をかけたそうです。その一言に主将は、自分が絶対に良いスコアを出さなければBリーグに落ちてしまうという猛烈なプレッシャーから開放され、「もし全力を尽くした結果として自分のスコアが悪くても、他の選手がいいスコアをだしてくれば大丈夫だ。」と思うことができ、リラックスして戦えたという後半は、とても良いスコアで帰ってきました。

結果として、主将はもちろんのこと、その他の選手も普段より良いスコアでまわってくる事が出来、無事Aリーグ残留を果たしました。

ここで特筆すべきは他の選手への「信頼」です。「ゴルフは個人競技だ」とよく言われますし、実際に試合中はとても孤独です。同じ大学のキャディーが付いてくれているので二人で試合に臨みますが、他の競技と違い、試合中に選手同士声を掛け合うことや、選手以外の部員からの声援を得ることができないのは辛いところがあります。しかし、「一人で戦っているのではなく、皆で頑張っているのだ」、「だからこそ自分自身が今のコンディションで最高のプレーができれば、それで大丈夫なはずだ。」と選手同士だけでなく部員一人一人が信頼しあうことで各々の気持ちの負担が軽くなり、良いコンディションで自分のベストを尽くすことが勝利につながっていくのだと思います。

また、このような男子部の活躍に負けじと女子部も練習に励み、2007年東日本医科学学生総合体育大会においては、強豪校である慶応大学や聖マリアンナ医科大学を抑えての優勝、2009年新人戦においては現在2年生である木下が個人優勝を果たすなど、種々の成績を修めております。

現在は、再びAリーグ残留をかけた秋リーグを控え、正規練習のほかに合宿や自主練習なども加えて練習に励んでおります。

部員数が増加し、成績も残せるようになった現在ではありますが、それを維持し更に発展を遂げるためには「運動部として、強くあること」と「部員同士の結束力があること」が必要不可欠です。そしてこれらは相関し合って成り立つものであり、その成立のためには、責任を負う仕事をしたり、時には自分の時間や労力を犠牲にしたりという努力や我慢といったものを各々が積み重ねていかなければならず、また、部活動とは社会生活に必要なそれらの事

柄を学ぶべき場であると考えております。

今こうした成績を修めることができ、楽しく部員との絆を感じながら活動することができるのも、ゴルフ部と言う部活を作り、維持し、支えてきてくだ

さった先生方や先輩方のおかげです。私たちもそれを受け継ぎ、これからのゴルフ部が更に発展するよう尽力することを誓って結びの言葉とさせていただきます。乱文失礼いたしました。

(さわ しんたろう)

自動車部

宍倉 正胤, 佐藤 恒信, 太田 詔, 岡山 大, 諫田 朋佳

現在の自動車部は正式には2代目である。

初代の自動車部以前に同好会的組織があり、ラリー競技を主催していた。

1953年卒の越田穆先輩、1962年卒の勝田貞夫君等を中心として演劇部の部員達がオフィシャルで何回かのラリー競技が開催された。

1962年12月、日独薬品後援でJCEラリー（詳細不明）が大学の山中寮を起点として籠坂峠、須走、その周辺で開催された。1963年6月には第1回房総ドクターラリーと称して房総半島を巡るコースで行なわれ、以後毎年開催され1967年6月の第5回迄行なわれた記録がある。また、当時NDC（日本ダットサンクラブ）の主催で房総サファリーラリー、海外で有名だったアフリカサファリーラリーに因んでのラリーで、徹夜で鹿野山周辺、マザー牧場周辺の未舗装の荒れた道（当時日本では舗装された道は少なかった）をかなりの指定速度で走らされたことも何回かあった。

当時の日本の4輪のモータースポーツはラリー競技が主であった。日本で最初の本格的サーキットとして1962年に鈴鹿サーキットが完成し、1963年5月に同サーキットで第1回日本グランプリが開催された。1965年には船橋に船橋サーキットができ、越田先輩、勝田君、小生宍倉がここでいわゆるA級ライセンスを取得した。

初代の自動車部は1967年卒の鈴木一郎君、高田功君等が中心になって1963年頃に創られ、正式な部として認められた。この活動の詳細は不明だが、大型免許を取得するのが目的で京成バス（勿論ボンネットバスで5万円で払い下げてもらったと聞いていた）を現在看護学部の校舎のあるグラウンドに駐車させ部屋としても使っていた。当時法医学の宮内教授の旧制水戸高校時代の友人が京成電鉄の社長の川崎さんだったのでその伝で購入できた。ただこのバスで練習して大型免許を取ったという話は聞かなかった。その後初代の自動車部がどうなったか詳らかでない。

（ししくら まさたね）

現在の自動車部は、1980年入学（卒業年はばらばらであるが）の井上雅裕、須賀喜一、森永達夫、結城

崇夫の諸先輩らが、当時第二解剖学の助手であった1979年卒の龍岡穂積先輩の賛同を得て、1983年に再興された。初代顧問は龍岡先輩にお願いした。その後1988年卒の柿澤公孝、佐藤恒信、志村仁史、杉浦敏之、徳山竜彦君が入部し、競技会を主催できるまでに成長した。

東医体にはモータースポーツ部門がなく、代わりに東京近辺の医学部・歯学部・薬学部の自動車部が集まって関東医歯薬連盟を結成し、各大学持ち回りで年5・6回のダートトライアルの競技会を開いていた。

千葉大もこの連盟に所属し、連盟戦競技会の一戦として、1984年から86年まで、「CMRT（Chiba University Medical Department Racing Team）ダートトライアル」競技会を主催した。モータースポーツ誌「プレイドライブ」に掲載要項を掲載し、近辺のショップやディーラー、製薬会社にも協賛してもらい、参加者100人を超える競技会を3年連続で開催することができた。また、廃車となった2台のスターレット（KP61）の使える所を組み合わせで1台の車にしたてて正式に車検を取り、部員で共有して練習を行った他、部員個人の車を競技用に改装し、おのおの誘い合って未舗装の林道や河川敷、サーキット（筑波）で練習に励んだ。那須方面での合宿も行われた。

競技参加は、医歯薬連盟戦のみならずJAF公認競技への参戦も行われ、各々連盟戦優勝や公認競技入賞の戦績を残した。

（さとう つねのぶ）

この頃、部員、OBのJAF競技ライセンス所持者が10名を越え、1987年JAF公認チーム準加盟クラブ“イノハナレーシングチーム（INOHANA RT）”を設立し、責任者には初代自動車部との関連も深い1962年卒の宍倉正胤先輩にお願いした。無くなっていた部車も導入（S54年式TE71スプリンターGT）され、車を持たない部員の練習に役立っていた。イノハナレーシングチームとしての活動は、現役部員の減少に伴いライセンス所有者が減り、残念ながら3年間で休止せざるを得なくなったが、1989、90年には、再び医歯薬連盟の一戦としてジムカーナ競技会



「CMRTチャレンジ・ザ・ジムカーナ」を主催した。この際はプレイドライブ誌に加え、オートメカニック誌、カーグラフィック誌に開催概要を掲載し、かなり広い範囲の参加者を募ることができた。部活動もダートトライアル、ジムカーナに加え、レーシングカートを行う部員もあり、多様化していた。引き続き医歯薬連盟戦、JAF公認競技への参戦も行われ、入賞や、表彰台の一角へ食い込むこともあった。

ここで、部室の変遷、車の整備に関することに触れる。

1983年、部の発足当時には部室はなかった。当時は構内の駐車場に余裕があり、構内の一角を使用していたが、夜間の整備や近隣への配慮から、現在の場所に部室を設けていただいた。少しずつジャッキやウマなどの工具を買いそろえたが、地面は未舗装の土のまま、雨が降るとぬかるみ、ウマが沈み込んでしまい快適な整備環境ではなかった。その中でもエンジンを交換できるように鉄パイプを組んだタワーを自作したりして、より高度な整備に対応できるように整えていった。整備内容としては、JAF公認戦出場を目指し、公道も走行するため、車検に通る範囲での改造と破損箇所の修復が中心だったが、安全装備や足回りはできるだけきちんと整備するようにしていた。ダート練習中の車両転倒などは少なからずあったが、誰一人怪我することなく活動できたのは、決して幸運ただけではなく、日ごろの整備の賜物と思う。

(おおた しょう)

その後、亥鼻地区の駐車場整備の都合で、自動車部占有面積は大幅に減少されたものの、アスファルト舗装された敷地となり、車2台の入るガレージもでき、整備環境もかなりよくなった。この過程では

大変な出来事があった。当時未舗装の自動車部敷地には、放置自動車（歴代の部員の遺物？）が多数あり、雑草も伸び放題で荒れていたため、活動をしていないと見られ、自動車部敷地がすべて大学の駐車場にされそうになった。そこで校内に反対抗議のプラを貼って、自治会とともに抗議および話し合いを繰り返し行った結果、現在の形に落ち着いたのである。この話し合いの過程で、疎になってしまっていたOBとのつながりや、現役部員内の意識の向上がなされ、部としての体質強化につながったのは思わぬ副産物であったといえよう。

また、ガレージができたおかげで、整備が夜間や雨天でも可能となり、長時間整備を何日かにわたって行えるようにもなった。

(おかやま だい)

現在の自動車部

2004年より顧問を法医学教室の岩瀬博太郎教授にお願いしている。

旧型のロードスター（NB8）が部車として存在し、部員の練習台として活躍している。最近の話題としては、2009年9月、大学からも非常に近い袖ヶ浦に新しくオープンした「袖ヶ浦フォレストレースウェイ」で2010年8月に開催されたECO耐久レースに、OB現役混成部隊が出場し、最高燃費賞を獲得した。

現役学生部員は18名（医6…小柳・高・金子・菅原・加藤・田中、医5…諫田（部長）・白根・橋本・池内・川合・仲野・白石、医3…今本、医2…湯本・ペエ、看3…田近、看2…西村）で、主に袖ヶ浦サーキットで運転技術を磨き、ガレージにて自車や部車の整備に取り組んでいる。

歴代部長

1986卒	井上雅裕
1988卒	須賀喜一
1987卒	森永達夫
1988卒	志村仁史
1989卒	皆川真規
1993卒	太田詔
1993卒	藤本義英
1994卒	宮本佳明
1995卒	大島忠
2000卒	木納賢
2002卒	中島正之
2004卒	岡山大



ガレージにて部車を囲む。(写真上段左より今本,小柳,湯本)
(下段左より白根,池内,白石,高,諫田,田近,加藤,田中,菅原,川合,仲野)

2006卒 多羅尾 健太郎
2007卒 石橋 亮一
2008卒 岩佐 景一郎

2011卒 小柳 剛
現役 今本 拓郎 (前部長)
現役 諫田 朋佳 (現部長)
(かんだ ともよし)

柔 道 部

坂田 早苗, 佐藤 展将

千葉大学医学部柔道部について (初期)

昭和31年坂田・石川・太田・紅露らが千葉大学医学部・柔道同好会を立ち上げた。

昭和33年千葉大学医学部・柔道部として活動をはじめた。

部 長 川喜田愛朗 細菌学教授 (柔道2段)

師 範 山口宏 千葉大学柔道師範兼千葉県警察
柔道師範

齋藤新一郎 医学部教務課・事務係長

キャプテン 坂田早苗

部 員 太田幸吉, 紅露恒男, 三橋稔, 河野信夫,
戸井道夫, 大川治夫, 岡田信道, 吉野明昭,
長尾孝一, 外間孝雄ら

その後34入学の畔田, 中田が入部し, 35入学の深尾, 鈴木 (守), 重松, 万本, 山口, 貝田が入部した。36入学組は中村雅一, 一人だけであった。キャプテンは第一代坂田, 二代太田, 三代戸井, 四代外間, 五代中田が就任してリーダーとなり活動した。

その後, 深尾, 中村, 鎗田, 志村, 吉野, 佐藤 (展) らがキャプテンを務めた。上記の何人かは全学の千葉大学柔道部のレギュラーとして活躍しております。

旧制度では千葉医科大学柔道部として対校リーグ戦をしていたようです。そして忘れてはならない猛者として市川平三郎・放射線科助教授 (後に築地がんセンター院長) 鈴木隆之・解剖学助教授 (鈴木整形外科院長), 井出源四郎学長 (第二代柔道部長) 岡田藤助・千葉結核療養所院長, 会沢太沖・千葉東病院院長, 漢方薬の藤平健院長, 六本木の羽鳥弘院長, 宇都宮の水沼外科水沼三郎院長らをあげることができる。

新制の柔道部は“医学部柔道部だから, 勉学をすべし”と勉強第一をモットーにし, 柔道の練習で体をぶつけあいながら“粘りのド根性や柔道魂・体力”を養いました。

そのためか, 大川筑波大学小児外科教授, 長尾帝京大学病理学教授, 中田富山医科薬科大学泌尿器科教授, 深尾筑波大学外科教授, 重松信州大学病理学教授, 鈴木群馬大学寄生虫学教授 (後に群馬大学学

長), 田邊政裕千葉大学卒後生涯医学臨床研修所教授, 若いところでは丸山浩自治医科大学教授が誕生しております。

変わったところでは, 昭和39年入学の唐沢祥人が東京都医師会長になって活躍し, 更にその後に日本医師会長となり, 柔道で会得をした“粘りや寝技”で政治家とわたりあっております。

まだ, 私が知らないところで活躍している後輩も枚挙に暇がないぐらい沢山おられるようです。

平成21年現在, 柔道部は低迷しているが, 昭和40年前後には東医体・柔道部門で連続優勝をし, 全医体でも優勝し日本一となった記憶はなつかしい思い出である。

佐藤展将先生をはじめ後輩各位が時々, 柔道場に足を運び現役部員の指導をされたり, また, 精神的にも, 経済的にも現役部員を励まし, 協力をされている後輩が沢山おられるように聞いております。

(さかた さなえ)

昭和45年入学の部員からそうそうたる有段者, 経験者がそろい, 学四吉野, 44年入学の志村, 田沢に加えて轟, 渡辺, 西林, 鈴木が昭和41年に東医体四連覇中の岩手医大に挑戦し, 東京オリンピック候補選手であった荒選手以下の強敵を決勝戦で破り, 外間, 深尾をはじめとする諸先輩の悲願であった東医体優勝を果たし, その後三連覇し全盛期と呼ばれました。(写真1)

昭和42年の秋に西医体柔道部門優勝校の京都府立医大を相手に東西対抗戦がはじめて行われ京都に遠征し, 東京医大, 金沢大学を加えての総当たり戦に勝ち抜き, 初優勝を勝ち取りました。(写真2)

伝統的な行事として, 西医体の有力校金沢大学との定期戦が隔年の春に千葉と金沢で交互に行われ, 親睦を深めて来ました。(写真3)

さらに千葉大, 東大, 医歯大, 横浜市大との四大学戦も年二回定期的に交流戦を回り持ちで行い, 技の研鑽と親睦を深めてきました。(写真4)

千葉大の全盛期を担った学年が卒業後は, 残念ながら大会のたびに優勝カップを返還するのが後輩の役目でした。(写真5)は昭和47年の岩手医大主管



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

の東医体に出場した選手達ですが、厳しさが感じられません。

昭和57年福島医大主催の東医体において強豪群馬大、東海大を破り決勝では慈恵医大に勝ち久々に千葉が優勝。メンバーは百武衆一、竹本大直、木下弘壽、石島秀紀、和田研の精鋭でした。

平成になってからは、入部者が減少し毎年数人という状態が続いています。

東医体柔道部門に5人選手を揃えるのも難しく、普段の稽古日も参加者が数人とかつての勢いはありませんが、毎年有段者は入学しており道場も学生寮前に立派に新築されましたので、これからも現役学生と先輩OBが一体となって再び柔道部の伝統を盛り上げたいと思います。

(さとう のぶまさ)

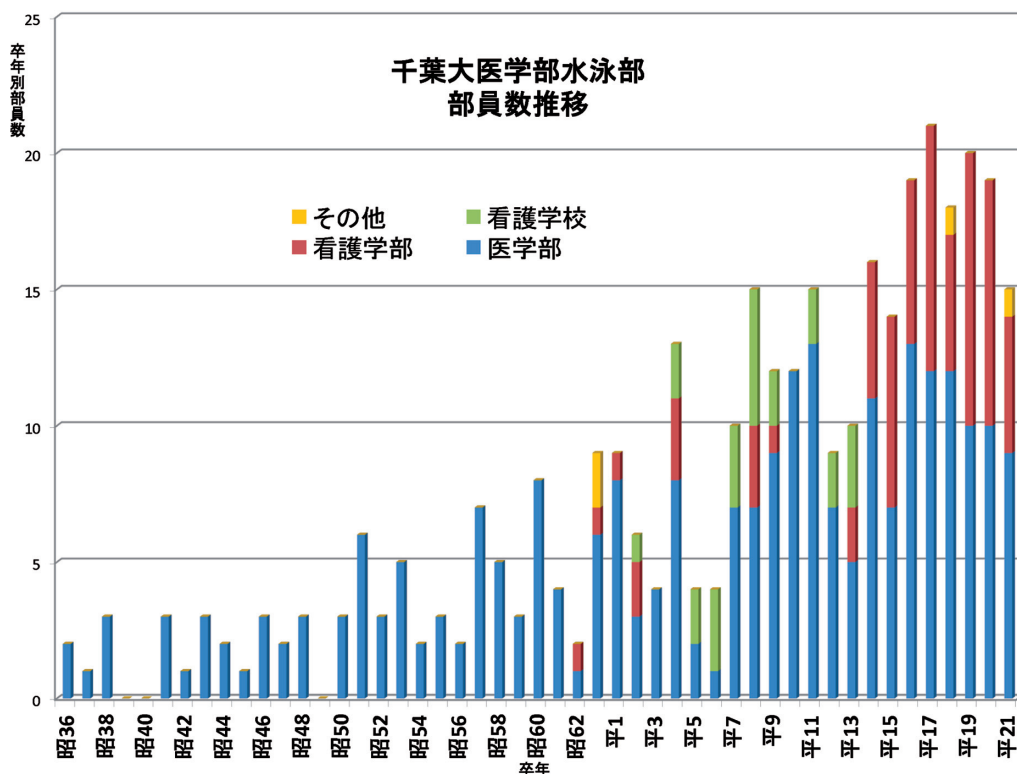
水 泳 部

白澤 浩

千葉大学医学部水泳部は、昭和34年に第2回東日本医科学生総合体育大会（以下、東医体）に参加した時に発足した¹⁾。草創期より昭和50年代までの詳細については、千葉大学医学部百周年記念誌²⁾に譲るが、発足後、昭和40年代までは10数名前後の小さなサークルであったが、昭和50年代には数十名のサークルとなった。昭和60年代以降、看護学部および他学部学生の参加により部員数は増加し続け、部活動も活発となっていった（図）。

現在では、医学部屈指のサークルに成長し、平成15年、16年と東医体において二連覇を成し遂げるまでに至った³⁾。平成21年には、創部以来のメンバーが集い、創部50周年を記念して盛大なる祝賀会が開催された⁴⁾（写真）。この間、昭和37年、昭和55年、平成19年に、それぞれ第5回、23回、50回（四大学共同開催）東医体の主管を行っている。

亥鼻キャンパスにはプールがないため、西千葉プールを全学水泳部と共に利用しているが、その他



に千葉市コミュニティーセンターのプール等を利用した時期もあった。近年部員が増えてからは、西千葉プールに加えて千葉県国際総合水泳場を利用して練習に励んでいる。現在では、東医体に加えて、ウィンターカップ水泳競技会、筑波・千葉対抗戦、東日本医歯薬看護学生水泳競技会、杏林・千葉対抗戦、全学医水対抗戦、日本看護学生水泳競技会、千葉五大戦（旧四校戦）等に参加している。

また、近年は新年会、スキー旅行、ラーメンツアー、新歓旅行、クリスマスパーティー等の行事も行われ、部員間の親睦も盛んである。このような隆盛と部員数との間には相関のあることが見て取れ、

同じ亥鼻キャンパスの看護学校、看護学部学生の参加が大いに貢献したと思われる。

現時点の部員数は、医学部86名、看護学部32名、計118名と医学部最大の部活となっている。平成18年からは、不定期に開かれていたOB会も定例で開催されるようになった。現在のOB数は、医学部338名、看護学部70名、看護学校25名、理学部2名、助産婦学校1名、薬学部1名、総勢437名である。

歴代の部長には、百瀬剛一教授、高見澤裕吉教授、橘正道教授、伊藤晴夫教授、落合武徳教授にお務め頂き、現在の部長は生水真紀夫教授である。



千葉大学医学部水泳部創部50周年記念祝賀会(平成21年9月5日,SKY WINDOWS 東天紅)

【引用文献】

1. 青木謹, 「水泳部よ永遠なれ」 千葉県みのはな会会誌 Vol. 9 (2009)
2. 青木謹, 「水泳部」 千葉大学医学部百周年記念誌 (1978)
3. 「水泳部東医体連覇祝賀会」 みのはな同窓会報, 第138号 (2005)
4. 「千葉大学医学部水泳部 創部50周年記念祝賀会開催」 みのはな同窓会報, 第154号 (2010)
(しらさわ ひろし)

ス キ ー 部

宍倉 正胤, 松原 久裕, 田中 尚武, 丹羽 佑輔

スキー部創成期

スキー部の創立は1959年だから今年（2010年）は創立51年目ということになる。昨年（2009年）、創立50周年記念の盛大な祝賀会が催された。その歴史を振り返ってみると、東日本医科学生総合体育大会（以下東医体と記す）の冬季部門としての第1回スキー大会を雪の無い千葉県の千葉大学が主管し、その大会での活躍にも目を見張るものがあったこと、さらにその後の大会でも多数の入賞者を出していることなど、その活動面では輝かしいものがある。1956年入学・1962年卒の我々のクラスに黒岩、福士というスキーの達人がいた。黒岩は親が万座温泉の奥万座で旅館を経営していたり、福士は青森の出身であったり、二人とも幼年時からスキーに親しみかかなりの腕前で、オーストリーから来日したルディーマットの指導を直接受ける等して技術を研いでいた。この二人を中心に我々の学年、一級下、二級下のかかなりの人数が、冬休み、春休みに万座温泉に集まりスキーを楽しんでいた。

1958年夏、第1回東医体が開かれた。冬季にスキー大会をと声はあったようだが、実際に猫の首に鈴をつける者はなかった。1959年夏、第2回東医体が終わった頃、黒岩、福士が音頭取りになって東医体の冬季部門としてのスキー大会を千葉大が主管して開こうということになった。それには先ずスキー部を創らなくてはならないということで、万座に集まっていた、単なるゲレンデスキーに物足りなさを感じていた連中が中心になって、この年の11月にスキー部が創られた。部長には当時第一生理学教室教授の本間三郎先生にお願いした。ついでにということで、千葉県には無かったスキー連盟も創っちゃおうということで、我々は「千葉県スキー連盟」の創設にも参画した。従って千葉県スキー連盟の創立も1959年ということになる。翌1960年には、黒岩、福士は千葉県代表として国体に出場した。

1960年1月、千葉大学主管で第2回東医体冬季部門としての第1回スキー大会を万座温泉スキー場で開催した。参加大学は9大学（岩手、群馬、順天、昭和、東京、東医、東邦、日医、千葉）で、種目は回転、大回転、滑降の三種目のみだった。千葉大の

成績は福士、黒岩の活躍があり、総合成績は昭和医大、岩手医大について第3位だった。

この大会を開くにあたりスキー部部員の活動はもとより多くの人々の協力を頂き、特に当時東医体の評議員だった庄司謹（現青木謹）先輩にはこの大会が東医体の冬季部門として公式に認められるようにご尽力頂いた。又、第1回スキー大会を主管したのが、北海道でもなく、東北でもなく、新潟、長野、群馬でもなく、千葉だったのが今でも語り草になっており、我がスキー部の誇りになっている。

スキー部発足当時のメンバー

学部2年（4年）

黒岩璋光、宍倉正胤、嶋田晃一郎

須藤（現岩倉）弘毅、福士和夫、森豊

学部1年（3年）

大木勲、加藤友衛、玉置哲也、原紀道

三木亮

医進2年（2年）

大森忠昭、栗林士郎、河野守正、渋谷光柱

塚田正男、深尾立、山下武弘

医進1年（1年）

関谷宗英、野口眞利、宮腰達郎、柳澤貫一
吉川広和

第2回医科学生スキー大会は1961年1月、東京医大の主管で志賀高原法坂スキー場（現サンパレースキー場）にて開催され、北海道、東北の参加もあり、競技種目に距離競技が加えられた。千葉から須藤弘毅、嶋田晃一郎、栗林士郎の3名が出場し悪戦苦闘の末見事全員完走した。

創成期より揺籃期のスキー部の詳細については千葉大学医学部百周年記念誌スキー部の記事に記してあるが、女子部門の追加についてはここにも記さなくてはならない。女子部門の新設は1965年のスキー大会からである。1964年の東医体の夏季大会の成績で千葉が慶応に0.5点で負けており、冬季大会の結果で2年連続の総合優勝が決まるという状況であった。予想では千葉も慶応も参加点以上の点が取れる見込みがなかった。女子の参加点で1点が貰えるので、慶応が女子のエントリーをしないのを確かめ

第5章 交友の広がり

て、エントリー締め切りぎりぎりまで伏せておいて、締め切り間際に女子の選手登録を行った。1966年卒の永山（現鈴木）弓君、1968年卒の野間（現高岡）邦子君に出場してもらい、女子の参加が貴重な1点となり、逆に0.5点差で1964年度の東医体の総合優勝に貢献できた。



創部学年(1962年卒)向かって左から森豊, 嶋田晃一郎, 黒岩璋光, 福士和夫, 宍倉正胤, 須藤(現岩倉)弘毅

(ししくら まさたね)

昭和50年代のスキー部

私がスキー部に入部したのは昭和53年春でした。当時中学・高校と競技スキー部に在籍していたこともあって、医学部に競技スキー部があることを知り早速入部しました。入部当時の雰囲気は全くat homeで新入生歓迎会は五味鳥の2階で、部長の本間先生、宍倉先生、岩倉先生、神田先生（第一生理学教室）を含め現役OBを含めせいぜい10名強の参加だったような記憶があります。中高と競技スキーの経験があると話したところ、期待のホープ?とからかわれているのに、いい気になっていた気もします。

夏場の陸上トレーニングは必ずしも厳しいものではなく、多くの部員はスポーツ系クラブとの兼部等によって冬場に備えているといった感じでした。初めての冬合宿は野澤温泉であったことは印象深く覚えております。朝からランニングといった厳しいトレーニングを覚悟していたのですが、朝もゆっくり起きだし、あまり体育会系とは思えぬ、ぬくぬくとしたのりの合宿だったと記憶しています。ただ、ここでわかったことは、やはり大学生の滑りのレベルは高く、ゲレンデでもコブ斜面ではおいていかれている場面が多く、期待のホープの面子は全くつぶされました。しかしながら、合宿、大会（7大戦、東医体）で先輩方との付き合いが深まるにつれ、スキー部にはまってゆく自分を感じておりました。医進2年時には高田博之主将（S56年卒）のもと、木

島平スキー場にて7大学対抗戦を主管した思い出はあるのですが、このときの自分の成績は全く記憶にありません。また、思い出深い試合は、1、2年の頃、確か6月頃に行われた、群馬大学主催のマチガ沢での記録会です。麓よりスキー板をかついで沢を登り、ポールをくぐって降りてくるだけの繰り返しでつらかった思い出が強いのですが、夜の宴会も大変盛り上がり、他大学の部員と仲良くなれた貴重な行事でした。学2でマネージャー、学3でキャプテンを務め、競技の成績では目立つことは全くできませんでした。すばらしい先輩、同級生、後輩に恵まれ、いつもどこか抜けている私を補佐いただき、何とか大過なく役職を終えることができました。また、当時の競技スキーブームもあって部員が大幅に増え、majorなクラブに成長しつつあることを次第に実感できました。また夏場の陸上トレーニング、いろいろなスキーキャンプへの参加も含めその活動は大変活発になっていったような気がします。

そして学3の東医体（石打丸山スキー場）において長らく活動を中止していたクロスカンントリー競技への復帰（リレー競技のみ）を果たしました。それまで全くはいたこともない、部室で埃を被っていた板や靴をひっぱりだし、にわか知識でwaxingを行って練習もそこそこに出場したことを覚えております。案の定、waxは合わず半分下駄状態で、汗まみれになりながら何とか完走を果たすことができました。確か4人継走だったものと記憶しておりますが、順位はよく覚えておりません。これ以降、千葉大学医学部スキー部のクロスカンントリー競技が復活し、現在はアルペン競技と同様に力を入れて取り組んでいると伺い、我々の参加が少しでも復活のきっかけになったのではと喜んでおります。

(たなか なおたけ)

現役部員の活動

2010年5月現在、現役部員は23名（男子16名、女子7名）。ほとんどの部員が入学前に競技スキーの経験はありません。千葉県内にはスキー場がなく、放課後スキーに行ける雪国とは違って厳しい環境ですが、向上心ある部員が多くコーチに恵まれていることもあり、6年間で東医体上位を狙えるまでに上達します。練習に対しては真面目で熱心ですが、人数が少なめのためか、それとも部員の性格からか、アットホームな雰囲気です。2009年には創立50周年を迎えました。

週1回の部活ではインラインスケートを始め、ス

スキーのイメージ作り，バランス感覚の向上，基礎的な体力作りを青葉の森公園で行っています。有志は5月から8月上旬までは週末や夏休みを利用し山形県の月山で小原コーチに教わって雪上ゲートトレーニングを行います。夏休み，他の部活の東医体が終わるころには部員みんなで旅行に行きます。

10月末に静岡県のイエティスキー場で新入生に基礎を教えた後は，いよいよシーズンイン。小原コーチの主宰する丸沼高原でのキャンプが最初の本格的な合宿です。この時期はポールを張れない分，基礎をしっかりと確認します。12月中旬ごろ，北海道に飛び小原コーチのキャンプで実戦的なゲートトレーニングを行います。北海道でクリスマスを迎えると，菅平高原に移動してシーズン最初の大会の十大戦（関東中部国公立十大学医学部対抗スキー大会）に臨みます。2010年は千葉大学が主管を務めました。年明け以降，米沢や菅平で行われるキャンプやOB・OGと一緒にスキーを楽しむOB戦，さらには個人的に練習に励む者もいて，多い部員では毎週のようにスキーをしています。また，信州大学などと一緒に合宿する機会も多く，大学を超えて仲良くなります。

大学のカリキュラムが年々厳しくなるなか，上級生もなんとか都合をつけて東医体に出ます。1年間の練習の成果を出せるように真剣勝負です。クロスカントリーは1年生中心に男子15km，女子5kmにチャレンジし，苦しみながらも全員完走しています。リレーは精鋭(?)のA戦，残りのメンバーで作ったちょっとおふざけのB戦に分かれ，それぞれ

楽しめます。アルペンでは年々力を付け，2009年度は5年生(05M)が大活躍し，それぞれが特別シートを獲得しました。東医体合宿は20日近くの長期なので，東医体が終わるころにはスキーをしない千葉の生活に違和感を覚えるようになります。

スキー場では一生懸命練習するスキー部ですが，合宿の帰りには温泉に寄ったり，その土地の名所をまわったり，ご当地グルメを食べたりといったことも楽しみの一つです。温暖化の影響からか，年々雪が少なくなって今後が心配ですが，スキー部が75周年，100周年と続いていくよう発展させていきたいです。

(にわ ゆうすけ)

千葉大学医学部スキー部 創部50周年記念祝賀会開催

千葉大学医学部スキー部創部50周年記念祝賀会は平成21年10月31日(土)京成ホテルミラマーレにて開催された。本間三郎初代部長(昭21)，青木謹元東医体評議員(昭36)，栗山喬之元部長(昭43)，小原務現コーチの4名の来賓，57名のOB，OGそして現役部員17名が集い盛大に行われた。

岩倉弘毅OB・OG会長(昭37)の開会の挨拶に続き，本間名誉教授，栗山名誉教授から御祝辞をいただき，現部長の松原久裕(昭59)が挨拶をして，宍倉正胤先生(昭37)の乾杯にて祝宴が開始された。(写真)東医体で初めてのスキー競技を主管したのが北海道，東北，上信越の大学ではなく我が千葉大



第5章 交友の広がり

学であったことなど創部当時の懐かしい話を伺い、ご活躍された黒岩璋光先生（昭37）、福士和夫先生（昭37）が当時の様子をお話しされた。青木先生が写真を大切に保管されていたため、現役部員がスキー部50周年のあゆみとして編集し、短編映画風に仕立て大好評を得た。さらに現役部員の清水規弘君が作詞・作曲した千葉大学医学部スキー部50周年記念曲が披露され、盛会のうちお開きとなった。この

記録はスキー部50周年記念誌に掲載された。祝賀会は岩倉先生、宍倉先生を中心に山川久美先生（昭53）、田中尚武先生（昭59）、谷合厚先生（平7）をはじめとするOBと現役部員が協力して準備を行った。盛大なすばらしい会であり、有志は魚民に準備された二次会にて今後の発展を祈念し、さらに杯を重ね語り合った。

（まつばら ひさひろ、たなか なおたけ）

硬式庭球(テニス)部

里村 洋一

ゐるのはなのキャンパスは、スポーツ施設に恵まれている。中でも、連絡道路の両側に位置する野球場、サッカー場、テニスコートは、回廊の桜が満開の時は言うに及ばず、春夏秋冬、学生のみならず訪れる人々に「ここも大学の一隅」かと心に感動を与えている。ここで育ち修練を積んだ学生たちの多くが、その後の社会での活動の、大切な心のよりどころとしてきた。

硬式テニス部もこの恵まれた環境に育まれて、およそ90年に近い歴史を歩んできた。その歴史を振り返り正確な記録を残すのは、今に生きる我々の務めであろう。本書の発刊に際して、その役割の一端を担うことになったのを光栄に思い、粗相なく役目を果たしたいと思う。すでに、医学部100周年記念事業に際して、高見澤裕吉(教授 産婦人科 昭和27年卒)が精力的に資料を集め、足を運んで、当時健在であった昭和初期の先輩たちを訪ねて話を伺い、大正末期から昭和52年までをまとめ上げた力作がある。そこで、今回は、その百年誌の記事の概略を紹介した上で、昭和50年代以後の歴史を付け加える形で述べたい。幸い、後で紹介するように、硬式テニス部には「蒼庭」と題する年誌があり、昭和39年の第1号以来今日まで、学園紛争時の1年を除いて毎年、現役部員と先輩をつなぐ太い糸をより合わせてきた。昭和50年以後の出来事や戦績をたどるにはこれが何よりの頼りである。

テニス部の歴史は、大正末期にさかのぼる

初代のテニス部長は小児科の小山武雄(教授)であったという。就任が何年であったのか定かではないが、大正14年に退任されて、杉山文祐(教授 産婦人科)が二代目となったと、岩津俊衛(産婦人科教授 第三代部長)が「蒼庭」1号で述べている。どうやら、当時の主流は軟式であったらしく、職員、学生の区別なく、また、テニスコートも固定の場所がなく構内の空き地を転々としていたという。

硬式テニスが定着したのは、丸山吉夫(昭和3年卒)らの熱意ある活動によってである。丸山は新潟高校のナンバーワン選手で、本学入学後に同輩や先輩の技術指導に当たり、部としての体制も整えた。

硬式テニス部の事実上の創始者とされている。

昭和3年に赤松茂(教授 医化学)が第四代部長に就任すると、その活動のおかげで、昭和5年に大学の施設として現在のテニスコートのある場所(凡秋谷)にネットフェンスと部室も設備された5面が造成された。コート開きには、テ杯日本代表の清水善造氏(世界的な名プレイヤーとして知られる)らを招いた。これを機会に、優秀な人材が次々と集まり、岡田長豊(昭和8年卒)、佐藤幸雄(昭和9年卒)、らが四高(金沢)の出身者であったことから、昭和6年から金沢医大との定期戦が始まった。千葉医大のテニス設備とその環境は当時としては国内でも出色のものであって、関東一円の大学やクラブとの交流も行われるようになった。また、昭和12年から東北大との定期戦が開始された。当時の千葉医大は、野球やサッカー、ボート、柔道、剣道などのさまざまなスポーツクラブも隆盛で、百花繚乱の感があったという。

しかし、世界情勢は不穏で、この年に日華事変が起これ、次第に戦線が拡大、それに伴ってテニス部の活動も制約を受けるようになった。昭和16年について太平洋戦争へと突入すると、野球やテニスは敵性のものだと見られるようになり、物資も不足してボールも手に入らなくなった。そんな中、17年5月には仙台に遠征し、東北大との定期戦が行われた。これを最後にテニス部の活動は事実上不可能になった。ネットフェンスの鉄材は兵器製造の資材として供出された。昭和20年には千葉市が空襲で焼け野原となり、コートは放置されて、あちこちに防空壕が掘られ、ついには食糧難に耐えるための芋畑へと変わった。また、多くの若い先輩たちが戦場に散って行った。

テニスコートの再建からテニスブームの時代へ

終戦の翌年、昭和21年2月に学生自治会が開催され、運動部の再編が論議された。本間三郎(昭和21年卒 後に教授 生理学)、清水健三、田中実(昭和22年卒)らが、テニス部復活を提案、部員募集をおこなった。これに呼応した伊藤力(昭和23年卒)ら5人が加わって、芋畑を掘りなおしにかかり、面

第5章 交友の広がり

なおし、ローラーがけ、計測を自分たちで行い。テニスコート2面を再生した。慈恵医大のチームを招いてコート復活を祝った。この年、小林龍男（教授薬理学 昭和7年卒）が部長に就任した。

22年には関東学生連盟が発足、二部に登録された千葉医大は慈恵医大、明大、東京工大と対戦することとなった。24年には関東学生リーグとは別に医大リーグが創設され東大、慈恵医大、順天堂大、東京医大、東京医科歯科大、千葉医大の6大学でリーグ戦が始まった。千葉医大は24、25年と連覇を果たした。26年、大学の協力を得て、コートの整備が行われ、学生と大学職員の共同作業でネットフェンス付きの2面を完成させた。この年には、東北大学との定期戦も復活、さらに27年には、対金沢医大定期戦も復活し戦前の隆盛期の形が再現できるまでになった。翌28年には、第一回の関東医科学生総合体育大会が新潟大主催で開かれている。当時の医科学生のテニスのレベルは相対的に高いものがあり、高見沢裕吉（昭和27年卒）、大原一夫（昭和29年卒）組は、関東学生新進トーナメントで優勝するなど、医学生範囲を超えて活躍している。こうして、戦後のテニス部の基盤が固められるとともに、環境も整えられたので、新しく入部するものも多くなった。コートが2面では不足してきたので、さらに南側に2面の増設が行われた。世の中は戦後の復興が進み、ようやく食糧難が解消されてきていたが、住宅事情はなお劣悪で、コートサイドに建てられていた小屋には、下宿代わりに住み込む部員もあった。前記の清水健三、田中実もそのひとりであり、そのあとを、井上正士（23年卒）、河合正計（26年卒）、高見沢裕吉（27年卒）、大原一夫（29年卒）らが引き継ぎ、その後も、昭和40年に部室の改造が行われるまで、部員の誰かが住みこんでおり、これもテニス部の伝統的活動の一つとなっていた。

昭和30年代に入ると、それまで稲毛の文理学部キャンパスで活動していた医学進学課程の学生もものはなのコートでプレイするものが多くなり、部員数が増えてきた。

折から、明仁親王（今上天皇）と美智子さまのご成婚（昭和34年）がテニスにまつわるものだったことで、世の中には一気にテニスブームが巻き起こった。筆者の入部はそのご成婚の翌年のことであり、80人の新入生のうち、なんと15人もが部員として登録された。

ご成婚の一年前の33年には、医学部1学年に5～6人しかいない女子学生からも入部者があった。奥野（永山）恵美子、田中（富岡）容子（昭和39年

卒）の二人である。3年おいて、青木（関）美千代、山田（林）益子（昭和42年卒）の名選手が、さらに古池（萩巢）敏子、藤原（吉井）田美子（昭和44年卒）の強力なペアが続いた。1963年から68年の6年間で関東医科歯科リーグと東日本医科学生の大会で合計6回の優勝、3回の準優勝という好成績をあげて、女子部のスタートはそのまま黄金期の到来となった。

一方、男子は、他大学のレベルが向上して苦戦を強いられていた。当時、隆盛期を迎えて、不敗を誇った順天堂大学や名選手の輩出した慶応大、日本医大などに押されて、関東医科歯科リーグ（以下、リーグ戦）の中堅は確保してはいたものの、矢野柁多（昭和34年卒）、大森忠昭（昭和39年卒）、小野田昌一（昭和40年卒）のような名選手を擁してもなお優勝のチャンスには恵まれなかった。そのような中で、昭和38年の東日本医科学生（以下、東医体）での準優勝は久々の快挙であった。

このころ、千葉県内には、硬式テニスでチームを編成できる団体が極めて少なく、千葉大学の他には、津田沼のエバークグリーンクラブ、県庁クラブ、佐倉の白井クラブ、川崎製鉄テニスクラブの四つを数えるのみであった。医科学生以外の選手と対戦する機会の少なかった部員達には、これらの社会人プレーヤーとの接触は貴重な機会であった。特に川崎製鉄には、我々のレベルを超えたスケールの大きな選手が何人もおり、彼らとの親善試合はテニスの世界の広さを実感できるよい機会であった。エバークリーンの鳥井利夫氏は千葉県テニス協会設立の立役者で、県内のテニス興隆に熱意をもって取り組んでいた。昭和25年ころから、毎年秋に千葉オープントーナメントを開催しており、県内だけでなく東京や神奈川からも参加者が多かった。当テニス部も県協会からの要請で、トーナメントの運用に部員を派遣して協力した。アルバイトとしての収入はわずかではあったが、日本のトップ選手たちのプレイを目の前に見る機会は貴重なものであった。一時は、千葉オープンの運用をほとんど任された状態となっていたが、昭和40年代になって、医学生間の行事に重点が置かれるようになり、県協会との関係は次第に希薄になっていった。

しかし、その後しばらくして、卒業生たちが社会人として協会の活動に参加するようになり、平成に入って重要な役割を担いはじめた。高見沢裕吉は、早くから副会長の席にあったが、平成5年に千葉県テニス協会の五代目会長に就任して以来、現在まで協会のトップとして活躍している。また、里村洋一

は平成元年から16年にわたって副理事長を務めた。

蒼庭会の成立と会誌発行

話は遡るが、昭和29年に群馬県で開業していた田島一彦（昭和17年卒）の世話で、群馬県四万温泉で4日間の夏期合宿が行われるようになった。暑い下界の千葉を離れての合宿は快適で、また、先輩たちの参加もあり、千葉での厳しい練習とは違った和気あいあいの雰囲気満ちて、当時のテニス部員達には忘れえない思い出を残した。この年中行事は学園紛争の起こった昭和43年まで続いた。当時の夏休みには、公衆衛生学の実習が学部4年生に義務付けられており、グループを組んで約1週間地方の診療所や病院に滞在した。ほとんどが長野県で行われたが、テニス部員の多くは熊谷信夫（昭和28年卒）を頼って、須坂病院を選び、ここでも先輩たちと一緒にプレイを楽しんだ。

盛んになった現役部員とOBとの交流を一層密なものにする目的で、現役学生と卒業生からなる新しい組織を作ることとなり「蒼庭会」と命名された。昭和34年のことである。その後は、毎年春と秋の2回、蒼庭会の定例大会が行われ、先輩たちが母校のコートを訪れて現役部員とのプレイを楽しむこととなった。この伝統は、学園紛争のための一時中断はあったものの、今日まで50年にわたって連続と継承されている。

昭和39年に会誌「蒼庭」の第1号が発刊された。当時のキャプテン小野田昌一、中村泰久（昭和40年卒）らの努力によるもので、ガリ版刷りながら岩津俊衛名誉教授や小林龍男部長の写真が張り付けられた豪華版である。発刊に際して小林部長は「先輩と現役の意思疎通をはかるうえにも、部の記録を残すうえにもきわめて意義深いものと思われる」と述べている。その言葉のとおり、その後の45年間に44冊が発刊され、先輩・現役のそれぞれの想いや思い出が語られるとともに、毎年の戦績が詳しく掲載されて、立派な地誌の感を呈している。

昭和40年、築35年を経過し、長年にわたって部員の住居ともなっていた部室の小屋も老朽化し、雨漏りが激しくなったので、当時のキャプテン劉浩志（昭和42年卒）が中心となり、小林部長、福岡誠吾監督、高見沢裕吉講師らが相談して、先輩からの寄付金を募集した。現役学生のアルバイト収入を合わせて50万円を超える資金が集まり、見事な改修が行われた。物置同然の小屋から、男女別の更衣室に水洗トイレ、シャワー室まで備えた立派なクラブハウ

スが誕生した。これも当時の先輩と現役の強固なつながりの成果であった。残念なことに、昭和52年、生物活性研究所の建設に伴い、コート3面の造成とともに取り壊されることとなった。クラブハウスは10年余の短命に終わり、その後恒久的な建物は建てられていない。

第二、第三の黄金時代

昭和43年から44年は動乱の年であった。学園紛争のあらしが吹きわたり、東大では安田講堂を占拠した学生と警官隊との攻防が繰り広げられた。のびやかなキャンパスでも記念講堂に立てこもって1カ月にわたって籠城した学生グループがあった。学内は騒然として、蒼庭会の行事も会誌の発行も一年間は中止となった。しかし、テニス部への入部者は絶えることなく、紛争が一段落すると、一段と熱の入った練習が行われるようになった。この前後に入学したクラスが、大活躍をして、昭和20年代を第一の黄金期と数えれば、彼らが第二の黄金時代を築き上げた。木村秀樹、蛭名洋介（共に48年卒）、青柳博（49年卒）、野村文夫（50年卒）、中村千里（51年卒）、岩田次郎（52年卒）と、それぞれ当時の関東の医学部学生としてトップを争う名選手であった。昭和47年（1972）から昭和51年（1976）までの5年間で、東医体で3回の優勝、リーグで2回の準優勝を成し遂げている。彼らは、医学部だけではなく千葉大学の代表選手としてもトップを担っていたので、西千葉の学部にも所属する選手たちもしばしば医学部のコートでの練習に参加した。また、昭和50年に看護学部が開設されて、同学部の学生が医学部の練習に参加するようになり、以後は、両学部の硬式テニス部が一体となって活動している。その第一号の学生が渡辺泰秀（昭和54年卒）で、彼をはじめ、その後の看護学部学生たちが卒業後も蒼庭会の一員として毎年の行事に参加している。

この時期は、テニス部内の恋愛も華やかで、4年間に4組のカップルが誕生した。三浦部長は仲人としても多忙であった。岩田次郎と坂本裕子（共に昭和52年卒）の夫婦には、間もなく長男岩田曜（平成14年卒）が誕生し、長じて医学部のテニス部員となり平成11年のキャプテンを務めた。政治家の世襲が話題になるこの頃であるが、世代を超えてのこの継承は好意を持って迎えられた。ついでに親子二代のテニス部員を挙げておく、蛭名寿家夫（昭和16年卒）蛭名洋介（昭和48年卒）、柏戸（岩崎）正英（昭和33年卒）柏戸孝一（平成6年卒）。

第5章 交友の広がり

昭和52年以後4～5年間のやや後退した時期を過ぎて三度目の黄金期を迎える。三浦義彰部長が退官し高見沢裕吉部長が就任した翌57年、朝長毅（昭和59年卒）キャプテンの率いるチームが、リーグで優勝、東医体で準優勝を飾った。このチームでは、島田英昭、下田司（昭和59年卒）、橘川嘉夫（昭和60年卒）のほか、後述の鬼頭、菊池らが活躍した。さらに翌年はリーグ戦準優勝、東医体優勝、翌59年は両大会準優勝、そして60年には二宮栄一郎キャプテンの下に両方に優勝と初めての快挙を成し遂げた。高見沢部長は自宅の庭を開放して祝賀会を催した。これ以後、千葉大学は東日本の医学部では常勝のチームとして評価されるようになった。昭和60年優勝時のレギュラーメンバーを以下に挙げる。太田岳洋、芹沢徹、菊池浩之、鬼頭浩之（昭和61年卒）一瀬雅典、二宮栄一郎、篠塚典弘（昭和62年卒）、池田義和（平成元年卒）。キャプテンの二宮は、翌年の蒼庭に、優勝は「こんな戦力で……」という意外な結果で、それをもたらしたのはチームの結束力と、部員たちの応援であったと書いている。その後も、常に上位を維持してリーグでは常に2位から3位、東医体では優勝か準優勝といった戦績が続き、この黄金期は平成4年のリーグ戦3位、東医体優勝（網代洋一（平成6年卒）キャプテン）まで10年間の長期にわたった。

この後、数年間、やや低調であったが、平成10年には、再びリーグと東医体の両方を制覇した。平成10年の優勝メンバーは、川村幸治、鈴木崇根、佐々木恒（平成11年卒）、田中宏明、国司俊一（平成13年卒）らである。

昭和40年代の活躍以来、男子の影に隠れて比較的地味な成績で推移していた女子部も、昭和63年の野崎（田口）奈津子キャプテンの頃から、次第にリーグ戦でも頭角を現し、63年に三部昇格、3年後の平成2年には二部へあがり、平成4年には一部昇格、同年、東医体準優勝と男子の成績に負けず劣らずの成績を上げるまでになった。この間に活躍した選手を挙げておく。野崎（田口）奈津子、正岡（浜野）ナナ子（平成元年卒）、渡辺（国府田）桂子（平成2年卒）、加藤絵里（平成4年卒）、市川（佐伯）美奈子（平成5年卒）、長谷川（笠川）規子、福田（清水）サラ（平成6年卒）、内倉（横山）暁子（平成7年卒）

昭和61年、第13回全日本医師テニス大会が高見沢裕吉を大会長として千葉県で開催された。全国から約200人の医師テニスプレーヤーが天台の県営庭球場に集まったが、雨天に見舞われ、当時のクレーの

みの16面ではスケジュールを完遂することができなかった。朝長毅（昭和59年卒）が一般シングルスで優勝している。

それから9年後の平成7年、第22回の同大会が、清水健三を大会長として東金のエストーレホテルアンドテニスを会場に開催された。いずれもテニス部学生の協力によって運営された。このときは、中村千里（昭和51年卒）が一般シングルスとダブルスの両方で優勝、里村洋一（昭和41年卒）が55歳以上クラスBシングルスで優勝した。ちなみに、第38回大会が平成22年に千葉県で開催されることが決定している。

不祥事を越えて

千葉大学の好成績が続いた関東の医科学生テニスの世界では、平成に入る頃から好ましくない風潮が起きていた。チームが好成績を上げるには、個々の選手の能力も大切だが、団体戦におけるチームの結束力とその表現としての周りの応援がキーとなる、との認識がいきなり、応援合戦がエスカレートした。リーグ戦や東医体のようなチームの威信をかけた大学間の対戦では、大勢の部員がコートを取り巻き、1ポイント1ポイントに激しい声援を送った。ポイントが決まるごとに、味方の選手をたたえるばかりでなく、相手の選手を揶揄する応援団がひとしきり騒いで、次のポイントが開始されるまでに時間がかかる。このため、1つの3セットマッチが数時間に及ぶことが常態となり、しばしば、予定された対戦を一日で消化できず、改めて対戦日を設定する必要があるようになった。聞くところによると、西日本の医科学生のテニスにも同様な傾向が見られたという。部員たちにも、行きすぎだという自覚はあったようだが、相手チームの応援に負けられないとの強迫に抗しきれなかったようである。

このような雰囲気の中で、決定的な事件が起こった。平成14年の2月のことである。未消化となっていたリーグ戦の対筑波大の試合が本学の凡秋谷コートで行われる予定の前夜、部員たちがひそかにコートに水撒きをした。出場予定の選手がそろわない状態での対戦を避けるための苦肉の策で、筑波大学には、降雨によるコート不良のためとして、スケジュールの延期を申し入れた。不審に思った筑波大学の抗議によって運営当番大学が調査したところ、この工作が露見して千葉が不正をしたとの追及を受けた。この事情を医学部教授会に報告するとともに、詳しい事情を調査したところ、部員たちが嘘の

降雨を裏付けるための更なる工作を他学部の教官に依頼した事実も判明し、将来の医師としてあるまじき行為を生んだテニス部活動（男子部に限る）はただちに中止すべしとの厳しい決定が下された。これを受けて、男子部は自主解散の形で活動を停止した。ここに硬式庭球部の80年の歴史が途絶えることとなったが、幸いなことに女子部がこの事件には関与していないとして存続が許され、伝統はかろうじて維持されることとなった。

この事件の責任をとって里村洋一部長は退任、女子部の部長として税所宏光（教授 第一内科 昭和40年卒）が就任した。蒼庭会も新たな体制を整える必要があるとの認識に立ち、規約を改定して会長をそれまでの硬式庭球部長から、会員互選によってOBから選ぶこと、幹事会を組織して重要事項を審議することなどを決めた。初代の会長には高見沢裕吉が選ばれた。

女子部は、それまで男子中心に運用されてきた活動のほとんどすべてを引き継ぎ、これまでどおり粛々と実行した。リーグ戦や東医体の他に、金沢大学や福島大学との定期戦、春秋二回の蒼庭会、夏期合宿、会誌「蒼庭」の発行などが滞りなく行われた。

平成18年、事件から4年を経過した時点で、事件以後の入学者には活動の機会を与えてもよいのではとの意見が大学当局に受け入れられて、男子部が新たにスタートを切ることとなった。それまで同好会の形で活動していた学生たちが、新生のテニス部に加入して正規の部活動を始めた。関東医科歯科リーグも再加入を認め、六部最下位からの出直しである

が、対校戦への出場が可能となった。それからの勢いには目を見張らせるものがある。初年の平成18年には六部優勝、五部昇格、翌年には四部に次の年には三部にと毎年昇格し、平成21年の春には三部でも優勝し来年の二部昇格がすでに決まっている。堰を切ったようなこの快進撃は、千葉大学のポテンシャルが如何に高いかを象徴している。新しく就任した島田英昭監督（昭和59年卒）は部員のマナーや倫理に厳しく目をやっており、不祥事を招いた背景が再現することのないよう指導している。

苦難の時期を支えた女子部は、その苦勞が報われたと言ってよいか、平成17年から目覚ましい戦果をあげるようになった。同年に東医体の準優勝、翌年にはリーグの三部優勝と東医体の優勝を重ね、平成19年にはリーグ一部に昇格、東医体優勝、20年にはリーグ一部準優勝、東医体は3年連続の優勝を飾り、これらが評価されて、千葉大学学長の表彰を受けた。まさに女子部の第3の黄金時代が到来している。

おわりに

大正末期から今日までの硬式テニス部史を略記した。時代は移り、人は変わり世相もテニスも変化した。この凡秋谷のコートで培われた大学生たちの心と体は、彼らの生涯の糧となってきた。挫折を乗り越えて再生した硬式テニス部は、これからも新しい人を生み、人を育てる役割を担い続けるものと思う。

（さとむら よういち）

女子バスケットボール部

金 美怜, 泉對 貴子

今回は千葉大学医学部135周年記念誌に女子バスケットボール部として一筆書かせていただけることを光栄に思います。そして、創部から今まで、女バスが部として存在してこられたのは周りの方々の支援があつてのことであり、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

私たちが入学した当初、千葉大学医学部には女子バスケットボールはありませんでした。

これだけのメジャースポーツにもかかわらず、男子部があつて女子部がないのはおかしいと思い創部を決意しました。と、書いてしまえばなんともあっさりとした話に聞こえますが、良い出会いがなければ、大学に入ったばかりの私たちに、部の設立なんて不可能だったと思います。

何の後ろ盾もなく部を作ることはできないので、初めは男バスのマネージャーとして入部させていただくことから始まりました。そのうちいなくなってしまう私達をかわいがってくださり、いろいろな面で女バスを支えてくださった男子部の方々には本当に感謝しています。

そして、どうにか部として成立した女子バスケット部ですが、初めはとても『部活』と呼べるレベルではなく、練習場所も人も思うように集まらず、苦しい時期が続きました。他大学の女子部は伝統もあり、人数も多く、部員が5名いるかどうかの部としては練習試合を申し込むこともままなりません。今思えば無茶な話ですが、男子部に練習試合をしてもらったのが初めての試合でした。

そんな状況でしたが、1学年上の先輩が入ってくださり、先輩らしいことを全然してあげられなかったにもかかわらず、後輩も入って来てくれました。手作り感あふれる部活でしたが、どこの部活よりも部員の仲が良く、笑いの耐えることが決してない場所でした。

毎年ある新歓の時期に、『女バスの先輩たちの雰囲気大好きで入部しました!!』と毎年言われるのが私の密かな自慢です。

卒業して半年。部活にはなかなか顔を出せず、後輩たちのことがふと心配になることもありますが、今日も亥鼻の体育館で大騒ぎしながらバスケットをしてあげたいと思います。

(きん みよりん)

この度、千葉大学医学部135周年記念誌に寄稿させて頂き感謝申し上げます。

女子バスケットボール部は今年で創部6年目となりました。現在、部員は12人です。人数が少ないという苦労もありますが、OGの方々や男子バスケット部のプレーヤーに練習を手伝って頂くなどと、様々な方の協力の下、とても楽しく春夏秋の大会を目標に週3で活動させて頂いております。

私が入学したときにはもう女子バスケットボール部が存在しており、部を作るという苦労もせずに入りたい部活に入り、やりたい事がやれる恵まれた環境でした。

たった6年目の部活ではありますが、創部に関わった先輩方や部活としての活動の形を作ってきた先輩方と、直接関わることが出来ました。それ故、創部当初のOGから現役の部員まで大きな絆もっています。そして、創部に当たっての苦労を聞き、その後もご支援をしてくださる先生方、OB、OGの方々との繋がりの大きさをひしひしと感じています。

今後10年、100年と女子バスケット部が続き、さらに大きな絆を作っていくよう精進していくつもりです。今後ともご指導のほどよろしくお願ひします。

(せんつい たかこ)

バドミントン部

一瀬 正治

60年の歩み

バドミントン部は、昭和24年に同好会として創立されたのに始まる。当時は、旧制の最後、いわゆる千葉医大の頃であった。当初は、屋内に専用の練習場はなく、バスケットコートで行っていた。昭和25年になって、現在、大学病院の立体駐車場となっている場所にあった大学会館内の講堂に、卓球部と隔日交代で、コート2面をやっと確保して活動していた。夏には合宿も行い千葉バドミントン協会にも加盟した。秋には国体の県予選を突破して、福島、中神、入枝、鈴木の名氏が県代表として名古屋での国体出場を果たしている。

昭和26年の春には、部に昇格し、病理学の石橋教授に部長をお願いし、また秋山氏が監督として新たな出発をした。昭和24年5月には、新制千葉大学となったが、旧制の最後の学生達（秋山、鈴木、中神、福島元之、福島通夫氏）と新制千葉大学となつてからの学生達（三橋、堀越、立岩、仙波、竹内、谷川、瀬田、中林、桧垣氏ら）が、他の大学からコーチを招き猛練習を積んで関東学生リーグの三部に参加した。その結果、優勝を果たし、二部に昇格

している。以後数年間は二部の3-4位を維持していた。また昭和26年頃からは、東大、一橋大、金沢大と定期戦を行い、地元的高等学校（千葉二高、木更津一、二高、長生二高）へはコーチとして出向くかたわら練習試合も行うなど、活発に活動していた。昭和29年には、関東甲信越国立大学体育会で団体戦3位、個人戦2位という成績を収めた。

昭和30年には整形外科学の鈴木次郎教授に部長をお願いし、昭和32年からは立岩氏が監督に就任。昭和31年頃から、他の学部の学生達も入部して医学部主導で歩んできた部も他学部の優秀な選手が育つにつれ、次第に活動の中心は他学部学生へと移っていくことになる。

東日本医科学学生体育大会へは第1回大会（昭和33年）から参加し、第5回大会（昭和37年）まで男子団体戦5連覇を果たすなど、めざましい成績を残している（村田、小林總介、小崎、中村、宮治誠、井上信、坂田、根岸、竹内明美、岡野照美、久満、信川ルミ、高野、小林伸行、石田、小野道子、小松忍、大沼、本多氏ら）。第6回大会以降も東日本医科学学生体育大会へは、医学部部員がチームを編成して参加していたが、札幌医大、新潟大学などに強力



昭和37年～昭和48年卒のOB



2010年 東医体

な選手が現れ、以前のような成績はあげられなかった（土田，中島，一瀬，渡辺，梅沢悦子，山岸厚子氏ら）。昭和43年1月に鈴木次郎教授が急逝され，その後，肺癌研究施設の香月秀雄教授に部長をお願いした。昭和45年頃には医学部部員は，4名にまで減少したにもかかわらず，彼らの頑張りでも東日本医科学生体育大会団体戦において3位の成績を残して

いる（牧野，旭，大橋，松前氏ら）。しかし，活動拠点が西千葉の体育館に移ったこともあり，その後，医学部部員は，一人もいなくなってしまい東日本医科学生体育大会で輝かしい成績を残してきた医学部学生の千葉大学バドミントン部は一旦，終止符を打つこととなった。

昭和49年になり再び医学部学生によりバドミントン部が作られることになり，第三解剖学の大谷教授に顧問教官をお願いし活動を開始した。部員は次第にふえて，再び東日本医科学生体育大会，秋期関東医科学生リーグにも出場できるようになった。次第に医学部のみならず看護学校，看護学部の学生も共に活動するようになり亥鼻キャンパスのクラブとして現在では医学部看護学部バドミントン部となった。大谷教授退官後は，顧問教官は，微生物学の清水文七教授，形成外科学の一瀬へと引き継がれた。平成20年4月からは耳鼻咽喉科学の岡本美孝教授に顧問教官をお願いして現在に至っている。現在，部員数は60名に達し，平成20年度後期は，団体戦のみの「関東秋リーグ」で，男女ともレギュラー優勝，さらに入れ替え戦でも勝利し，男子は三部へ，女子は一部に昇格した。また，個人戦のみの「新人戦」では，男子一部シングルス・ダブルス，女子一・二部シングルス・ダブルスでも優勝を飾っている。

（いちのせ まさはる）



2010年 追いコン

男子バレーボール部

本橋 新一郎

医学部男子バレーボール部

千葉大学医学部135周年記念誌発刊にあたり、いつの時代でも目標としていた東日本医科学生総合体育大会（東医体）の結果を中心に医学部男子バレーボール部の歴史を振り返ることとする。

昭和55年は主将・江石を中心として、主管校として駒沢体育館で行われた東医体に臨んだ。前年に高山を中心としたチームで東医体準優勝を果たし、ほぼ同じチーム構成のまま臨んだ大会であり、優勝を目指したチーム作りをしていた。しかしながら、準決勝で岩手医大に破れ、3位決定戦で新潟大に勝利し3位に終わる。金沢大学において開催された全医体に出場では決勝まで勝ち上がり、そこでも再度新潟大を退け優勝した。東医体に比べると、どのチームもいまひとつのでき上がりであったものの、とりあえず優勝を飾ることができ、チームとしては一定の満足を得た。

昭和56年は、主将・景山を軸に都内で行われた東医体に臨んだ。高山の卒業、江石の引退などもあったものの、景山、相川、井合ら5年生が充実し、戦力としては決して前年に大きく劣るものではなかったものの準々決勝で敗れた。

昭和57年は、当初坂口を軸にチーム作りに励んだが、諸般の事情により、当時一学年下だった藤原に学年途中で主将を交代した。藤原は強いリーダーシップを発揮し、当時6年生であった景山と相川を軸としたチームをまとめ上げた。仙台で開かれた東医体では、55年よりはチーム力は劣っていたものの、まとまりのよさで準決勝まで勝ち上がった。準決勝では筑波大に破れ、さらに3位決定戦で自治医大に破れ4位に終わった。最後は息切れした感もあったが、チーム力以上のものを発揮したという達成感があった。

昭和58年は、藤原の同学年の興村が主将を務めた。景山、相川が卒業し大幅なメンバーの入れ替えもあり、戦力は大きくダウンした。セッターの興村を軸に、滝澤、古関が主に攻撃するチームだったが、ミスも多く江東区で開かれた東医体では、準々決勝で敗れ去った。この時の打ち上げは随分荒れていたように記憶している。この年度をもって、永年

バレーボール部の顧問をして下さっていた故佐藤博元第二外科学教授が定年退職をされ、故山口豊肺外科元教授が、バレーボール部の顧問を快く引き受けて下さり、定年退職されるまで顧問として務めてくださった。

昭和59年は、古関が主将を務め、前年興村が作り上げたチームに、新入生であった佐藤悟郎、松本らを加えてチームを作った。選手層が厚くなった分、チーム力は充実したものの、やはり1年生を2名加えたため準備不足も否めず、神奈川大学体育館で開催された東医体では、準々決勝では本来のチーム力以上のものは発揮できず信州大学に敗れた。

昭和60年は、昭和56年入学の部員がいなかったこともあり、57年入学の池田智昭が一年前倒して主将を務めた。小松、佐藤、松本を軸に、6年生の古関を加えて、栃木県で開催された東医体に臨んだ。この大会は、日光に近い修学旅行宿のようなところに宿を取り、リラックスしたムードで大会を迎えた。試合の方は、決勝トーナメントの一試合目に横浜市大に敗れ、早々に試合会場を後にしたが、この試合には山口豊教授がたいへんなご多忙の中を駆けつけて下さり、ベンチに入っただけの応援を頂いた。顧問の先生の公式戦へのご臨席は初めてのことで選手一同、たいへん励まされたが、勝利という形で試合を終われなかったのが残念だった。この大会は、試合に勝つというよりは終始和気あいあいとした雰囲気だったのが印象的だった。

昭和61年には池田の同学年の小松に主将が交代となり、新たに池田雄次、藤田を加えて栃木で行われた東医体に臨んだ。残念ながら決勝リーグ1回戦にて信州大に敗戦した。

昭和62年は田中が主将を務め、新人に本橋を加えた。東海大学で開催された東医体では、レギュラーの一人であった市川千秋の予選での怪我があったものの、全員でその穴を埋め合う働きを見せ、準々決勝まで駒を進めたが、北海道大学に敗れベスト8に終わった。

昭和63年は小松、池田、伊野、市川智章、斉藤の5人が卒業したが、笠川、丸田、深見など5人の新人を加えた。主将を務めた佐藤や松本、小林ら5年生を軸としたまとまりのあるチームが出来、春の関

第5章 交友の広がり

東医科大会で優勝した。その勢いも駆って出場した筑波での東医体は、準々決勝で旭川医大に善戦したものの、僅差で敗れた。

平成元年は主将・市川のもと、田中、長村が卒業し、阿部を加えた。チームとしては主力が大きく入れ替わったこともあり、新潟大学で開催された東医体では旭川医大に敗れベスト16で終わった。

平成2年は池田が主将を務め、佐藤、松本、小林、永山が卒業し、赤松、石田を加えた。チームとしての総合力は良く、前年の秋の1部リーグで優勝、春の関東医科大会では準優勝し東医体への期待が高まっていったが、北海道で開催された東医体では、準々決勝で山梨医大に敗れ最終日に残れずベスト8で終わった。

平成3年は本橋が主将を務め、市川、三河、矢野が卒業し、安井を加えた。この年から春の合宿を他校と合同で行うようになり、互いに切磋琢磨すると同時に親交の和が広がった。神奈川で開催された東医体では、準々決勝で群馬大に勝利し、久しぶりに最終日に駒を進めた。準決勝で昭和大学に敗れたものの、後日昭和大学の不正による失格があり、3位のメダルを自分たちで作製した。また旭川で行われた全医体にも出場し、他校との交流に主眼を置く全医体の雰囲気を楽しむことができた。

平成4年は笠川主将のもと、長らくレギュラーセッターであった池田と藤田が卒業し、橋場を加えた。チームの中心であった池田、藤田の二人が抜けたことでチームの熟成が進まず、神奈川で開催された東医体では、決勝トーナメントの1試合目に敗れベスト16で終わった。

平成5年は阿部が主将を務めた。本橋が卒業し、小笠原、清水が新たに加わった。佐倉で行われた東医体では残念ながら予選リーグ敗退となった。

平成6年には赤松が主将を務めた。笠川、丸田の2名が卒業したが、新入生として秋元・小林豊・土地・中田・星野の5名が入部し、新たなチームの軸となる一歩目を踏み出した。札幌で開催された東医体では決勝トーナメント1回戦で山形大に敗れてベスト16となった。

平成7年には安井主将のもと、阿部・深見が卒業し、岩田が新たに加わった。深見の卒業によりセッターを安井へ変更し、赤松・中田・小林を中心とした攻撃力・守備力ともにバランスのとれたチームを作っていた。盛岡で行われた東医体では準決勝で慈恵医大と対戦中に主将・セッターの安井が相手チームの反則により負傷、セッター変更というアクシデントに見舞われて敗北したが、3位決定戦では

札幌医大と対戦し、安井が怪我を押しして出場し、見事3位となった。

平成8年には小笠原が主将を務めた。石田・赤松が卒業し、万代が新たに加わった。前年と比較し全体的なチーム力としては大きく変わらずにチームを作っていたが、東医体直前に主将小笠原がまさかの負傷で、急遽レフトの小林をセンターに、レフトには岩田が入れたが準備不足は否めず、準決勝で北海道大学に敗れ、3位決定戦では群馬大に敗北し4位となった。またこの年の春から女子バレー部が正式に発足し、それまでの同好会から部としての活動がスタートした。

平成9年には中田が主将を務めた。安井が卒業し、神谷・鈴木英一郎・塩浜・田村・土屋の5名が新たに加わった。昨年からはメンバー変更なくチームを組め、また主将中田の綿密な計画に基づき練習を重ね熟成されたチームが完成した。宇都宮で行われた東医体では、準決勝で王者信州大学と対戦しフルセットで敗北、3位決定戦では山形大に勝利し、3位という結果で終わった。この年山口豊肺外科教授が、定年退職されるにあたり、新たに齋藤康第二内科教授（当時、現千葉大学学長）が顧問を引き受けてくださった。

平成10年には、岩田が主将を務めた。卒業生はおらず、小泉・佐藤文紀・杉山・高橋・塚本の5名が新たに加わった。2年間で部員が倍以上になり、試合中ベンチ内に入れないものも出てくるようになり、チーム作りということだけでなく、バレー部として一回り大きな懐を要求されることとなった。川崎で行われた東医体では、準々決勝で慶応大と死闘を尽くし、フルセットで勝利し最終日へと駒を進めた。しかしその疲れもあって準決勝では群馬大に敗れてしまったものの、3位決定戦では山形大に勝利した。

平成11年には万代が主将を務めた。小笠原・清水・橋場が卒業し、石渡・西村・渡辺が新たに加わった。対戦前に敵のデータを徹底的に集計・分析し対策を練るデータ班が活躍し、レギュラー以外もベンチ内外から積極的に試合に参加する体制が出来上がった。駒沢で行われた東医体では、決勝戦で主管校であった慈恵医大と対戦した。まさにアウェイでの対戦のような不運な判定にも苦しみられて敗北し、2位という結果で終わった。

平成12年には田村が主将を務めた。石井、岡田・藤野・薛が新たに加わったが、チームの中心であった秋元・小林・土地・中田・星野が卒業したことで、これまでの「勝つためのバレー」ではな

く、「バレーを楽しみつつ勝つ」という方向へ大きく転換する年となる。秋田で行われた東医体では決勝トーナメント1回戦で旭川医大に敗北、ベスト16となったものの、優勝した旭川医大から最も点を取ったチームとして、大きな自信となった。

平成13年には佐藤文紀が主将を務めた。岩田が卒業し、鈴木悟志、鈴木広和が新たに加わった。レフトに杉山が加入した以外は同じメンバーでのチームとなった。レギュラー・ベンチ・応援席のそれぞれの力が相乗効果を生むことのできるチームを作り、「楽しみながら勝つ」という方向性の集大成を築きあげた。新潟で行われた東医体では、準決勝で慈恵医大に敗れ、3位決定戦で山形大に敗れ4位という結果となったが、選手・マネージャー・応援の全員が満足する素晴らしい試合ができた。

平成14年には西村が主将を務めた。万代が卒業し、木村、西宮、畑が新たに加わった。レギュラーの3人が変更するという大きな変化はあったが、翌年へ向けて着実に実力をつけていった。駒沢で行われた東医体では、準々決勝で札幌医大に敗北し、ベスト8という結果になった。

平成15年には藤野が主将を務めた。神谷、塩浜、鈴木英一郎、土屋が卒業し、芳賀、小林和史が新たに加わった。チームとしてメンバーは全く変えることなく昨年度のチームを熟成させることができた。川崎で行われた東医体では、準決勝で札幌医大に敗れ、3位決定戦では北海道大学に勝利し、3位となった。

最近6年間に関しては紙面の都合上（筆者の力不足のため）、東医体の成績のみを記載する。平成16年ベスト16、平成17年ベスト16、平成18年ベスト16、平成19年予選敗退、平成20年予選敗退、平成21年ベスト16。今後現役部員のより一層の奮起を願うばかりである。

現在の千葉大学医学部男子バレーボール部は、平成20年4月に齋藤康先生の千葉大学学長就任による部長勇退に伴い、細胞分子医学講座の岩間厚志教授が部長に就任されている。部員14名、マネージャー6名の計20名で安田主将のもと、月曜火曜に亥鼻体育館で、木曜に西千葉体育館で練習している。試合の最重点は昔と変わらず東医体で、その他の大会として、春季・秋季四校戦（日本医科大学、東京医科大学、日本大学医学部との交流戦）、春季・秋季関東医科リーグ、春季・秋季医歯薬リーグ、新人戦などがある。また、最近では3月には筑波大学医学部男子バレーボール部との2泊3日の合同合宿を行い、他校との交流を深めている。男女バレー部合同の新歓コンパ、納会、追コンなどの連絡が毎年届いている先生方も多いかと思うが、これを機会に現役部員の活躍ぶりを見に行かれてはいかがであろうか。

部員数はベンチに入りきれないほど多いときも、控えがベンチにほとんどいないほど少ないときもあったが、縦横のつながりは今も昔も変わらず良好であるということが、本原稿を記載しての実感である。バレーをすることだけにとどまらず、心から信頼し合える友ができる場として、これからも末永くバレー部の活動が継続されることを願ってやまない。

最後に、この原稿を作成するにあたり、昭和61年卒の古関先生、平成13年卒の岩田先生を初めとする多くの先輩後輩や現役部員に多大なご協力を頂いた。ここに深く感謝の意を表す。また今回は記載出来なかったが、いつの時代も部員を支えて下さった多くのマネージャーの方々にもこの場を借りて感謝申し上げます。

（もとはし しんいちろう）

硬式野球部

穴倉 正胤, 宮崎 勝

1978年に発刊された野球部誌によれば、1923年、千葉医学専門学校が千葉医科大学に昇格し、翌年の1924年に野球部が創設され初代の部長は当時皮膚科教授の佐藤邦雄氏とある。

当時、専用のグラウンドは無く、千葉師範学校（現千葉大学教育学部）のグラウンド（現千葉県文化会館の建っている所）、千葉中学校（現千葉高校）のグラウンド、省鉄（現JR）の機関庫のグラウンド（現千葉駅の建っている所）等を借りて練習をしていたようだ。勿論未だ医大リーグ等は無く、千葉中学（現千葉高校）、成田中学（現成田高校）、銚子商業、千葉師範（現千葉大学教育学部）、ヒゲタ醤油等と練習試合をしていたようだ。

1927年に現在のグラウンド（元は水田だった）が完成した。慶応大学医学部、東京大学（全学、医学部には現在も硬式野球部は無い）、大阪大学医学部、東京商船学校（現東京海洋大学）、京都大学（全学）、学習院大学、東京医専（現東京医大）、日本大学等とも試合を行い、なかにはある時期定期戦として戦ったものもあったようだ。

試合ではなかりの戦績をあげ、千葉大学医学部野球部の歴史上最強の時代だったと思われる。

1928年、部長は小池敬事氏。

1930年秋、慶応大学が挑戦してきたと小林金市大先輩の言にある。その部分をそのまま引用させて頂く。

「昭和5年の秋、慶応大学が挑戦して来た。現在と違って、プロ野球もノンプロ野球も無い時代で6大学の覇者が文字通り日本一の強いチームであった。腰本名監督に率いられる慶応の野球部は、その秋強敵早稲田をも一蹴して、名実共に日本一を誇っていたのである。宮武、水原、井川、上野、塚越、山下、楠見、牧野、小川、本郷、川瀬、町田、三谷、梶上等の名選手が揃っていて、後にはプロ野球の代表選手となった面々である。現在我が野球部のコーチを依頼している塚越さんも名投手として慶応のマウンドを守っていた。これが挑戦してきたのだから大変である。選手先輩を含めて何回か相談した結果、受けて立つことに決定した。早速合宿に入った。『学校に出るべからず。禁酒、禁煙、禁欲』をモットーにして、午前・午後にわたって、一心に練習に励んだのである。当時慶応のライバル早稲田の

名監督飛田穂州先生が豊田学生主事についで、コーチに来て下さった。先ず最初に『慶応に勝つようにコーチする。相当きつい練習をするが嫌になったらいつでもグラウンドを去れ』といわれた。まず一列に整列させられて、『グラウンドは道場である。こんな石ころのある道場では、練習は出来ない。』といわれ、端から端まで石拾いをさせられた。それからの練習は大変なものであった。我々は文字通り足腰が立たなくなるまで、真暗になるまで、鍛えに鍛えられた。当日はグラウンドに幕を張って有料試合としたのであるが多数の市民が押し掛けて、満員の盛況となったのである。試合は後半まで、終始我が軍が押し気味に進め、流石の慶応勢も、浮き足立って大分あわてだしたのである。結局4対4の9回裏2死後、4球で敬遠する筈の宮武にヒットを打たれて、惜敗したのである。後日文芸春秋の誌上にチームワークの尊さの一例として、このわれわれの試合が例証されていた。」とある。

その後も、6大学リーグで優勝し名投手若林（後に阪神タイガースで活躍）を擁する法政大学、明治大学等強力なチームを選んで対戦していたようだ。

1932年、部長は加賀谷勇之介氏。

1936年、東京近郊の官立大学で官立大学リーグを創ろうということで、東大は6大学加盟のため参加できず、東工大、文理大（現教育大）、千葉医大で官立3大リーグを結成し、1943年第二次世界大戦のため休部するまで続いたようだ。

1945年8月終戦を迎え、翌1946年9月に学内の運動部としては最初に部を再開し、同1946年10月、千葉、東医、日医、慶応が4医大トーナメントを行ったようだ。

1947年春には、日大、昭和を加えて関東医大リーグと改称し、春秋二期に総当り各二試合を行うことで発足し、1948年には慈恵が、1950年には東邦が参加し、8大学になった。

1953年には信大との定期戦が始まり、第一回は松本で戦われ敗戦。

1954年、第2回信大戦、2-0で勝利。

1955年からは、全国に先がけて医学部が一期校で6年制になり、医進からも入部できるようになった。1955年秋季リーグでは7戦全勝で医大リーグ初

優勝を飾った。第3回信大戦，敗戦。

1956年秋から防衛大学校との定期戦が始まった。

1957年には横浜市立大が，1958年には順天堂が加盟してきた。

1958年から東日本医科学学生総合体育大会（東医体）が夏期に開催されることになった。

1959年春には医大リーグで優勝しその余勢をかって夏の第2回東医体で初優勝をした。このときのことを1960年卒の阪信氏が回想録の中で次のように語っている。

「春季医大リーグに優勝した我々は今度こそその意気に燃えて猛練習を繰り返した。8月下旬の日大世田谷球場は連日37度以上の猛暑が続いていた。参加16チーム中3日間勝ち抜いて残ってきたのは我が千葉大医学部と岩手医大であった。私はライトを守

り，トップバッターであった。初回，アンダー・ハンド投手の球を三遊間にはね返し走者になった。次の栗原君とバンドエンドランを敢行し，三塁に進んで，4番穴倉の左前安打で生還し先取点をとった。投手－穴倉，捕手－各務，一塁－香西，二塁－山崎，三塁－栗原，遊撃－入枝，左翼－須藤，中堅－植松の布陣であったが，4日間連続のゲームで皆極度に疲労していた。最終回，岩手最後の攻撃は3－2と追いつけられ尚二死満塁でカウント2－3であった。最後の一球，カーンという音とともに白球は右中間を抜くような猛ライナーであった。万事休す，と思ったが私は死にもの狂いで背走した。振り返って手を伸ばすと，白球は我がグラブに『スポッ』と納まった。」

又，特筆しなければならない事は，先に小林金市



1959年8月30日，東医体優勝，於日本大学世田谷グラウンド。
前列左より，穴倉，各務，鴻忠義先輩，塚越保監督，入幸，植松，阪，安達
後列左より，香西，塚田，栗原，堀口，片倉，須藤（現岩倉），伊藤，（不詳），山崎
（当時東医体評議委員 青木謹先輩撮影，提供）

大先輩の言の中にあつた，慶応大学の第一期黄金時代の投手であつた塚越保氏にこの年の春季医大リーグ終了後から，監督として，以後長い間面倒を見てもらう事になった。

第7回信大戦，勝利。その後東医体では第6回，第20回でも優勝している。

1960年，部長は綿貫重雄氏。秋リーグ戦優勝。第8回信大戦，勝利。

1961年，第9回信大戦，勝利。

（ここまで文責 1962年卒 穴倉正胤）

1962年，第10回信大戦，敗戦。

1963年，決勝で信州大学を破り東医体優勝。第11

回信大戦，勝利。

1964年，決勝で信州大学を破り東医体優勝。

1966年，春，秋優勝で連覇。第14回信大戦，勝利。

1967年，春，武久投手を擁し古川捕手，瀧澤中堅手，宮原三塁手らのスラッガーで固めたチームが大活躍し医大リーグ初優勝で三連覇を成し遂げる。天神左翼手，長谷川右翼手といった同級メンバーの活躍が光った。第15回信大戦，勝利。

1968年，第16回信大戦，勝利。昭和45年卒のメンバーが抜け檜垣投手，向井一塁手を中心としたメンバーで信州大学戦には活躍するがメンバー数の減少で苦しい時代であった。このときのメンバーには江頭捕手，田沢二塁手らが在籍していた。

第5章 交友の広がり

1971年，第19回信大戦，勝利。

1972年，東洋医大（現聖マリアンナ）新加入。この年から秋のリーグは二手に分かれて予選リーグがあり，各々上位2位までの2チーム計4チームで決勝トーナメントを行い，優勝を決する事となった。第20回信大戦，勝利。（対戦成績10勝9敗1分）

1973年，7年振りの関東医科大学リーグ戦の優勝（秋）。第21回信大戦，勝利。当時の6年生には鈴木二塁手，弓削左翼手が在籍し久しぶりの優勝の味をかみしめる。この当時のメンバー5年生に宮崎遊撃手，西山中堅手がクリーンアップ。投手には宇高，堀部，沼田，捕手には小林といった若いメンバーの活躍が光った。なお他に岩井一塁手，蒔田三塁手，久保田，多田羅外野手等の活躍が見られた。

1974年，部長は松本胖氏。春，秋優勝で3連覇。第22回信大戦，勝利。野球部史上初の女子マネージャー（看護学生：石川真弓，内貴恵子）の誕生となる。

1975年，春，優勝で4連覇。秋，準優勝で5連覇ならず。第23回信大戦，勝利（13勝9敗1分）。

1976年，部長は高見沢裕吉氏。春，秋優勝で連覇。第24回信大戦，勝利（14勝9敗1分）。

1977年，春，優勝で3連覇。第20回東医体優勝—14年ぶり3回目。第25回信大戦，勝利。

1978年，第21回東医体優勝で連覇。第25回信大戦。

1979年

1980年

1981年

1982年，春，準優勝。信大戦，勝利。秋，準決勝敗退。

1983年，春，優勝。信大戦，敗退。秋，準決勝敗退。東医体1回戦敗退（塚越監督ご勇退）

同年11月27日 秋期納会席上塚越コーチに記念品贈呈（同窓会長 小林金市，部長 高橋英世）

1984年，春，準優勝。信大戦，勝利。秋，優勝。

1985年，春，優勝（連覇）。信大戦，敗退。東医体3位

1986年，信大戦，勝利。

1987年，信大戦，勝利。

1988年，信大戦，勝利（20勝13敗1分け）。東医体4位。

1990年，信大戦，敗退。

1991年，信大戦，勝利。

1992年，信大戦，敗退。

1993年，信大戦，勝利。

1994年，東医体1回戦敗退。秋，優勝。

1995年，東医体3位。

1996年

1997年，部長は安達元明氏。春優勝。信大戦，敗退。

1998年，春3位。信大戦，敗退。

1999年，春準優勝。東医体第3位。

2000年，秋，準優勝。

2001年，春第3位。信大戦，敗退。

2002年，部長は宮崎勝氏。

2003年

2004年

2005年，東医体4位。

2006年

2007年，春，優勝。信大戦，勝利。東医体1回戦敗退。

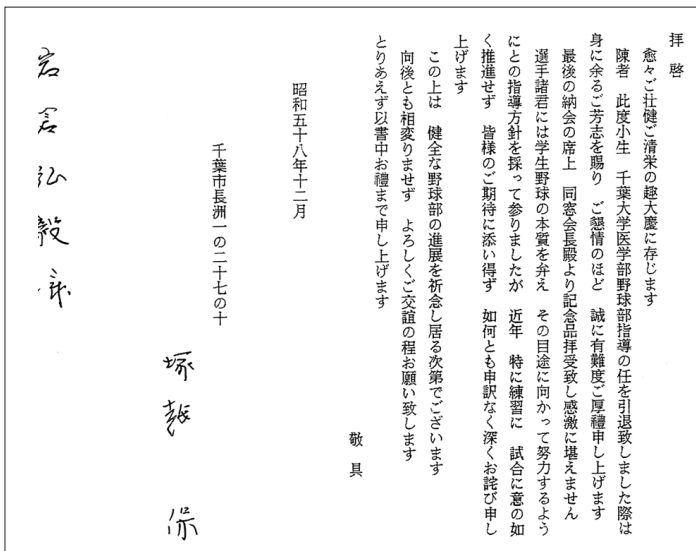
2008年，春，優勝。信大戦，勝利。東医体準優勝。

2009年，春，優勝。信大戦，勝利。東医体準優勝。

2010年，春，優勝。信大戦，引き分け。東医体準優勝。

近年は春季リーグ4連覇，東医体にて3連続準優勝の成績を残している。多くの野球部諸氏の歴史を振り返りながら新たな歴史を作りあげていきたいと考えている。

（ししくら まさたね，みやざき まさる）



塚越監督からの手紙

準硬式野球部

高林 克日己

135周年記念によせて

準硬式野球部は昭和37年卒の杉岡昌明、塚田悦男、森豊先生によって創設された、135年の歴史の千葉大学の中では比較的新しいクラブになる。とはいってもそれからちょうど50年が経過し、様々な歴史が作られてきた。

硬式野球部という伝統のある野球部に対して、より同好会的なクラブを作ろうというのが当初の発想であったと聞いているが、定員が100名足らずの医学部で2つの野球部があるということは、当然優秀な選手を多数集めるのは困難であり、野球部が1つの大学に比べると戦力が見劣りしてどうしても東医体などでの優勝はできず、未だ久保長生投手（現東京女子医大脳外科教授）を擁したチームが為し得たベスト4が最高位である。しかし最近硬式との練習試合や西千葉の準硬式の練習試合で勝利したり、西医体で常に上位の（西日本には準硬式しかない）金沢大との定期戦も、負けっ放しというわけでもない。さて準硬式野球部には当初は部長も存在せず、硬式野球部の高橋英世名誉教授が長い間部長代わりになってコンパになるとやってこられたものであるが、故渡辺昌平名誉教授（呼吸器内科）が初代部長となり、その後磯野可一元学長（第二外科）が引き継いだ。第三代の若新政史名誉教授（卒後研修部）以降はOBが務めていて、第四代落合武徳名誉教授（第二外科）のあと、現在は五代目として高林克日己教授（企画情報部）が部長を務めている。

そしてこのクラブは野球はともかく、多くの教授を輩出してきた。上記の先生方の他、崎尾秀影獨協

大教授、安田耕作獨協大教授、小俣政男東大教授、磯辺啓二郎千葉大教授、住田孝之筑波大教授、内山勝弘帝京大教授、杉田克生千葉大教授、杉原茂孝東京女子医大教授、橋本尚武東京女子医大教授、村上康二慶大教授と多数の教授を輩出している。とくに千葉大のみならず、現役の東大、慶大の臨床教授を擁するのは準硬式野球部の誇りである。そして多くの諸先輩が病院長として、あるいは第一線で大活躍されていて、その絆は強いものがある。今年（2010年）は伊江朝次沖縄県病院管理事業者、潮平芳樹豊



マリンスタージアムでのOB戦

見城中央病院が某医学雑誌の表紙を大きく飾ることとなった。この中の記事にも写真にも当クラブが登場するのは嬉しい限りである。昨今は看護学部を中心としたマネージャーが男子に負けず多く入部して、昔とはクラブの雰囲気が大きく変わったが、先輩が常に後輩に優しく面倒見のよいのが50年間変わらないこのクラブの伝統であろう。高根宏先生がロッテマリーンズの副応援団長ということもあり、マリーン球場でOB戦をすることも定期的になっている。（たかばやし かつひこ）



2010年のOB会(ミラマーレにて)

ヨ ッ ト 部

徳久 剛史

ヨット部の紹介

ヨット部の創成は、千葉医科大学水上部の関野康男（昭和25年卒）や石川芳光（昭和25年卒）らが山中寮所有のヨットを用いて山中湖で帆走を楽しんだことに始まる。昭和26年には「千葉医科大学ヨット部」が誕生し、鷗飼恒（昭和26年卒）、大濱博利（昭和26年卒）、町沢清太郎（昭和26年卒）らが山中寮や勝山寮を中心として練習を開始している。このころからヨット部員は医学部の山中寮や勝山寮の寮委員となり、練習ばかりでなく寮の宿泊客をヨットに乗せるサービスもするようになった。昭和27年には中野操一（昭和29年卒）が主将となり、千葉大学の他学部および看護学校生徒を加えて全学的な「千葉大学ヨット部」へと発展した。その後、昭和40年代には部員数も40名を超え、インカレ戦の1部校として大活躍していた。しかし昭和50年代になると医学部の教育カリキュラムが多岐膨大となり、医学部のヨット部員は他学部のヨット部員と同じ練習時間を取ることがきわめて困難な状況になった。そこで昭和60年代の初めに「医学部帆走部」という名称で医学部ヨット部が新たに併設された。ここでは千葉大学ヨット部創立60年に及ぶ歩みのなかから「千葉大学医学部百周年記念誌」に記載された内容以降の最近35年間の歩みと、この間に併設された医学部ヨット部の歩みをまとめる。

千葉大学ヨット部

昭和44年に、第四代部長の三輪清三教授（第一内科学）に替わって香月秀雄教授（肺癌研究施設）が第五代部長に就任した。この頃は部員数も増加の一途であり、新入部員が夏の合宿まで40名を超える時があった。しかし、インカレ戦では2部と3部を行ったりきたりしていた。昭和46年に齊藤威（園芸学部）が主将となり新艇の購入やセールスの更新などを積極的に行い、かつ激しい練習を重ねた結果、春期インカレ3部戦では総合1位で2部戦に進出した。さらに2部戦では総合2位となり、ヨット部創設以来始めてインカレ1部戦に駒を進めることが出来た。1部戦でも好調で、総合9位という成績をあ

げることが出来た。その後、常滑で行われた全日本インカレに初出場し、A級ディングーは6位入賞を果たした。昭和51年には香月秀雄教授が学長になられたため、本田良行教授（第二生理学）が第六代部長に就任した。創部25年が過ぎて、OBの数も200人を超し、昭和34年に発足した「ほたて会」（OB会）の結束が強くなってきたのもこの時期であった。昭和52年のインカレ戦では、加瀬川均（昭和53年卒）率いるチームが久しぶりに江ノ島で行なわれた全日本インカレに出場した。この他にも優秀な選手が多く育ち、部活動は安定期を迎えていた。昭和58年には本田良行教授に替わって藤村眞示教授（第一生化学）がヨット部OBとして初めて第七代部長に就任した。続く昭和60年代、平成初期は更に部員の数も安定し、女子部員の中には国体の千葉県代表や東京都代表になる選手も出てきた。ところが、平成8年以降は部員の確保がままならず、平成10年の春のインカレはついに欠場という状態になってしまった。平成11年には、藤村眞示教授が退職されたため、徳久剛史（分化制御学）が第八代部長に就任した。その後は、少人数ではあるが毎年インカレ戦に出場して頑張っている。平成15年には、ほたて会幹事長の大濱博利（昭和26年卒）が中心となって創部50周年の記念式典を幕張において盛大に挙行了した。

一方クルーザー部門では、昭和42年に「くろしおⅡ」（33フィート）が、大学とOB会の協力で進水した。しかし、進水間もない昭和43年7月に行なわれた鳥羽パールレースに於いて、折からの台風のため漏水、電気系統の不調に加えてラダートラブルにより遭難した。しかし、幸いにも艇長の好判断などで全員無事救出され、放棄された艇も回収され修理された。その後は、多くのレースで好成績を修めた。昭和55年には、「くろしおⅢ」（33フィート）が進水した。また、平成4年には「くろしおⅣ」（34フィート）が進水した。平成10年頃までは部員が多く、週末の練習ではメンバー全員が艇に泊まることが出来なくなってしまい合宿所を借りての活動となった。しかしクルーザー部門でも平成15年頃から部員が集まらなくなり、とうとう平成20年からは現役の部員だけでは帆走できなくなってしまった。そこで若手OBも参加して、積極的な部員集めがおこなわれ

た。その結果、平成21年には、新たに多くの新入部員を集めることが出来た。

千葉大学医学部ヨット部

千葉医科大学ヨット部が千葉大学ヨット部へと発展してから20数年間は医学部の部員が大多数を占めていた。しかし、昭和50年代になると医学部の教育カリキュラムが多岐膨大となり、医学部学生は長期間にわたる合宿練習などへの参加が難しくなり、医学部の部員は数年に1名程度と著しく減少してしまった。このような状況の中で、昭和50年代後半になり木元正史・菊野薫・津山嘉彦・門澤秀一（ヨット部員）ら昭和60年卒の医学部学生から当時ヨット部の部長であった藤村眞示（昭和35年卒）に、医学部学生でも参加可能なヨット部再建への強い要請があり、平嶋毅（昭和32年卒）と山浦晶（昭和40年卒）が中心となり全学のヨット部とは別に「医学部ヨット部」を併設すべく尽力された。同じ大学内にもう一つのヨット部を併設することのマイナス面や医学部学生でも参加可能なヨット部を再建することのポジティブ面を考慮した結果、昭和58年に「医学部帆走部」という名称で発足させることとなり、平嶋毅（第二外科学）が初代の部長を、木元正史（昭和60年卒）が初代主将を務めた。初代学生らは競技艇も無く、勝山寮でプレジャーボートを用以練習し翌年（昭和59年）に東京医大から借用した470で東医体に参加した。いずれのメンバーも470の経験なく戦績は望むべくも無かったが、全艇完走し470とそのレースのすばらしさに魅せられ、東京医大と交渉の末にこの中古艇を部員のカンパで購入し、後輩に託した。平成2年には、平嶋毅（昭和32年卒）の転出にともない山浦晶（脳神経外科学）が二代の部長に就任した。

平成6年には山浦晶教授に替わって徳久剛史（昭和48年卒）が三代部長に就任して現在に至っている。そして平成8年頃から、佐藤嘉治主将（平成10年卒）の下で徐々に新入部員も増加し、名称も「千葉大学医学部ヨット部」と改名した。艇の購入、練習の充実等で平成10年には部員数30数名を擁し、東日本医科学生総合体育大会（東医体）ヨット競技部

門を主管し、個人戦で優勝、団体戦で6位入賞となった。翌年の平成11年の東医体では、団体戦で優勝している。近年は部員数も25名前後で安定しており、稲毛ヨットハーバーで全学ヨット部との合同練習に励んでいる。その成果として、東医体の団体戦では毎年上位に入賞している。平成7年には、中島伸之教授（第一外科学）と山浦晶教授の二人のヨット部OBが中心となり、全学ヨット部の医学部OB達にも呼びかけて「OB会」も発足した。初代のOB会長は、相楽恒俊（昭和31年卒）が務めた。その後、平成11年からは中島伸之（昭和36年卒）が二代OB会長に就任し、さらに平成19年からは山浦晶（昭和40年卒）が三代OB会長に就任して現在に至っている。平成11年には「部報」第1号が発行され、その後年に2回刊行されOB達に配布されている。

東日本医科学生総合体育大会ヨット競技部門でのレース成績（入賞のみ記載）

団体戦	個人戦
平成9年度：6位	4位（佐藤・深谷） 6位（横井・山田）
平成10年度：6位	優勝（横井・篠崎）
平成11年度：優勝	2位（深谷・山崎） 5位（加藤・横山）
平成12年度：3位	5位（篠崎・山下）
平成13年度：準優勝	2位（横山・松村）
平成14年度：優勝	3位（吉田・山本 竹下） 6位（野口・牧，井口）
平成15年度：準優勝	4位（竹下・宮本） 5位（松村・長澤，李）
平成16年度：準優勝	2位（竹下・柴橋）
平成17年度：4位	
平成18年度：準優勝	5位（柴橋・宮本）
平成19年度：5位	
平成20年度：3位	4位（宮本・米田）
平成21年度：準優勝	3位（田仲・米田） 4位（松林・加藤） 5位（澤田・山内） （とくひさ たけし）

ラグビー部

得丸 幸夫, 柴田 涼平

千葉大学医学部ラグビー部の創部時代

(1) 創部のきっかけ

私が千葉大学医学部に入学した1972年（昭和47年）には、医学部にラグビー部はありませんでした。そこで西千葉の全学のラグビー部に入部しました。先輩に聞くと、2年先輩にも医学部の学生（現肺外科・由佐俊和先生）がいるが、学部授業が始まると亥鼻キャンパスに行ってしまうため練習に参加できなくなるという話でした。

当時、同級生の間ではスポーツをやりたい人たちが多く、一時廃部されていたバトミントン部やヨット部などを再開したりしていました。そこで、友人たちに声をかけるとラグビーもやってみようということになり、1年生の秋頃から西千葉キャンパスで少しずつ練習を開始しました。ボールを2つ購入し、私しかラグビーを知っている人はいなかったのので、私が指導して5～6人でのボール遊びが始まりました。

せっかくだからラグビー部を創ろうということになりました。同級の小沢卓夫君の父上が皮膚科の故岡本昭二教授と同級ということで部長をお願いしたところ、快く引き受けて下さいました。サッカー部のキャプテンにグラウンドの共同使用を無理にお願いし、我々の同級生の女子にマネージャーを頼んで部の申請をしました。「すぐつぶれそうだから、まず同好会でやれば」とか「人数を15人集めると、他の部の部員がその分減ることになるので困る」と反対の声も多かったのですが、同級生たちの応援もあって何とか認められ、どうせ続かないだろうという声を背に受けながら活動を開始しました。

(2) いきなりの公式戦

ちょうどラグビー部ができた時期に、たまたま運動部に特別な補助金が出ることになったらしく、部長の岡本教授から勧められてラグビーポール（ゴールポスト）の設置を申請したところすぐ承認され、あっという間に医学部グラウンドにポールが立ってしまいました（写真1）。これでは簡単にやめるわけにはいかないと、他の運動部に所属している同級生もかき集めて練習をしました。

無理にお願いし、マネージャー役を引き受けてくれた片桐洋子さん（彼女はテニス部で、ラグビー部のマネージャーとしては名簿に載っていませんが）も練習の度にジュースや手作りの食べ物を差し入れてくれました。練習ばかりでは励みにならないと、2年の秋に医歯薬リーグに参加する手続きを取ったところ、練習試合もしないうちに試合の日が来てしまいました。おまけに前日に大雨が降り、「明日は雨だから試合はないだろう。」と安心して朝まで酒盛をした者が何人かいて集合時間に集まらず、酔いも醒めない連中をたたき起こして連れていきました。相手は東邦医大でしたが、スクラムの中は酒臭く、グラウンドの外に出て吐いている者もいて、びっくりしたと思います。何点入れられたか忘れましたが、我々はワンチャンスをものにして記念の1トライを挙げました。本来野球部の岩井潤君が蹴ったボールを私が追いかけて、拾い上げてトライしました。このトライは今でも語り草で、試合は負けたのにみんなで乾杯しました。ラグビー部がいまでも続いているのは、このトライがあった賜物と思っております。



写真1: 創部当時の部員, 医学部新病院建設中である。

(3) 関東医歯薬リーグ戦

初期のラグビー部が戦ってきた相手チームにはいろいろな思い出があります。東京歯科大学と埼玉医科大学の2校は、特に記憶に残っています。

東京歯科大学は、我々が医歯薬リーグに参加した当時一部の強豪校でしたが、千葉にグラウンドがあったこともあり、初参加の千葉大学医学部に目をかけていただきました。特に額賀康之先生（当時OBだったと思います）は、合同練習に誘って

下さり、初心者の多い我々に練習方法や試合のやり方などを細かく教えて下さいました。

埼玉医科大学は、我々より2年早く医歯薬リーグに参加していましたが、私の地元の大学であり、当時われわれと同じ四部でしたが、日本のラグビーの有力大学出身のコーチの指導のもと、グングン強くなっていった思い出があります。現川越市総合保健センターのセンター長である岨（そ）康二先生は、同学年であり、医師会の会合でお会いするたびに昔話をしています。

平成15年8月に発行された「関東医歯薬大学ラグビーフットボール連盟 50周年記念誌」が手元にありましたので、この三校の戦績を調べてみました。

千葉大学医学部の初参加は、昭和50年度からとなっていますが、驚いたことに、前項に述べた初戦の東邦医大戦の記録はありませんでした。昭和50年度の千葉大の成績は、四部4位で、我々の



写真2: 昭和50年10月26日初勝利後の部員と応援団

順位	四部	東邦	埼玉	聖マ	千葉	帝京	勝敗
1	東邦	○	○	○	○	○	4-0
2	埼玉	●	○	○	○	○	3-1
3	聖マ	●	●	○	○	○	2-2
4	千葉	●	●	●	○	○	1-3
5	帝京	●	●	●	●	○	0-4

図1: 昭和50年度成績

順位	一部	自治	群馬	千葉	順天	防衛	東医歯	勝敗
1	自治	○	○	○	○	○	○	5-0
2	群馬	●	○	○	○	○	○	4-1
3	千葉	●	●	○	△	○	○	2-2-1
4	順天	●	●	●	○	○	○	2-3
5	防衛	●	●	△	●	○	○	1-3-1
6	東医歯	●	●	●	●	●	○	0-5

図2: 平成2年度成績

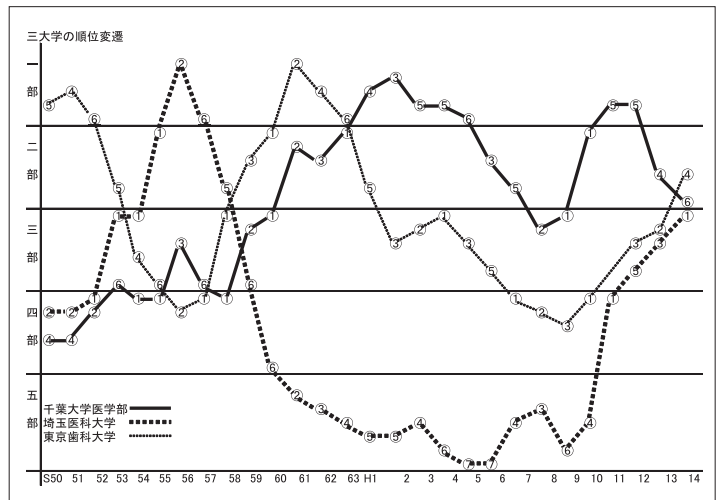


図3: 三大学の28年間の推移

公式戦初勝利である帝京大学戦（写真2，図1）の記録でした。私の記憶では上述の東邦医大戦は前年の試合であり、翌年から正式に登録されたのだと思います。

昭和50年から平成14年までの三校の戦績を見ると、夫々のチームに様々な波があることがわかります。

我が千葉大は、じわじわと実力をつけ、14年目の平成になって一部に昇格し平成2年には3位という輝かしい成績を上げました（図2）。創部当時のことを思うと隔世の感があります。

東京歯科大学は、10年以上の経過で大きな波があり、一部と四部の間を上下しています。

埼玉医科大学は、急速に実力をつけて一部に昇格した後に、長い低迷期が続きました。いずれの戦績を見ても、チーム力を長く維持することがいかに困難であるかがわかります。

平成14年には、千葉大は低下傾向、東京歯科大学、埼玉医科大学は上昇傾向を示し、共に二部あたりにいました（図3）。

最近の千葉大学医学部ラグビー部の経過については、他の筆者に譲りますが、ラグビー部がまだに活動していて、年度末のOB会で現役部員と交流できることは無上の喜びを感じます。今後のさらなる活躍を期待しています。

（とくまる ゆきお）

千葉大学医学部ラグビー部の現在

千葉大学医学部が135周年という輝かしい記念の年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。僭越ながら私の過ごした2002年から2007年の6年間のことを書かせていただき、ラグビー部の現在

第5章 交友の広がり

の状況を紹介したいと思います。

私が入部した2002年。ラグビー部が1年間をかけて準備をしていく一番大切な大会である関東医歯薬リーグを人数不足により棄権し、二部から三部に降格しました。あれだけ厳しかった当時の公平誠キャプテン率いる幹部が流した涙は今でも覚えています。

次の年の2003年からは新勸に今まで以上に力を注ぎました。あの年の幹部のためにも二度と棄権はしたくない、という強い思いのもと部員全員が心を込めて気迫で勧誘し、2004年に12人のプレーヤーと1人のマネージャーが入部したことを皮切りに部員は増え続けました。

また2003年から坂本宏文コーチが指導を始めて下さることになり、戦術や練習方法は言うまでもありませんが、本物のラグビーの哲学が医歯薬リーグを超えたラグビーの精神が部活に定着しました。周りの環境や人を当然のことと思わず感謝の念を忘れない、控えの選手やマネージャーを大切にする、ラグビーを通じて人間形成をする、などといったコーチの言葉は今となっては全部員の心に刻み込まれていることでしょう。

そして若いチームは徐々に力をつけ、私の代が幹部の2006年、東医体で史上最高位の3位となり二部復帰を果たすことができました。いつの間にかプレ

イヤー27人、マネージャー10人と大所帯の部活になっており、「人」の力の強さと大切さを実感しました。

そして私たちの学年が引退した2007年の関東医歯薬リーグ。入れ替え戦で東京医科歯科大を破り、7年ぶりにリーグ戦一部に昇格することができました。入れ替え戦には今までの歴代のOB、OGが駆けつけて下さり、苦しい時代を支えて下さり、自分たちを育てて下さった諸先輩方によく恩返しできた、という気持ちでいっぱいでした。

私たちが引退した後もラグビー部の躍進は続き、2008年に東医体優勝、関東医歯薬リーグ一部3位という輝かしい成績を納めています。

繰り返すようですが、ラグビー部がここまで成長できたのは、「人」を大切にする、「人」に感謝するという当たり前でとても難しいことが、きちんと実行できているからだとは私は信じています。それを教えて下さった坂本コーチ、ラグビー部の礎を築いて下さったOB、OGの方々、今もひたむきに努力を重ねる現役部員に心からの感謝しています。

私は人生最後の学生生活において、人生で一番大切なものを掴んだような気がします。この部活の一員になれたことを幸せに思いますし、一生の誇りでもあります。

one for all all for one.

(しばた りょうへい)

陸上競技部

船橋 伸禎

千葉大学医学部陸上部について

千葉大医学部陸上部は部の顧問に、初代は第一解剖教室の福山右門名誉教授、二代目に同嶋田裕名誉教授、三代目に陸上部OBの栗山喬之呼吸器内科名誉教授、一時期廃部になり、最近復活、現在は横須賀祝腫瘍内科学教授に勤めていただいております。私が学生時代は、その縁で福山右門先生ご夫妻、嶋田裕先生を囲む会を千葉パレスホテルで毎年行っておりました。(写真1, 2)

私、船橋伸禎は昭和58年に地元県立千葉高校を卒業し、千葉大学医学部に入学しました。高校時代は2年の夏に途中より陸上部の長距離部門に所属し、全国高校駅伝千葉県予選二区に出場しましたが、在籍が短期間であったため、大学入学後にも本格的に陸上を継続したく、当初は全学系の陸上部に入部いたしました。入部手続きに西千葉のグラウンドにいったところ、各部門で活躍されていたのが、長距離部門では3学年上の村田淳さん(医学部(以下同じ)昭和61年卒、現千葉大学附属病院リハビリテーション部部長)、1学年上の近藤寛之さん(昭和63年卒、現産業医科大学眼科学准教授)、中距離部門では1学年上の横田朗さん(昭和63年卒、現千葉市立青葉病院血液内科部長)、そして短距離では萩原雅司さん(昭和61年卒、現習志野第一病院、整形外科)と、全て医学部の先輩であり、当時大変驚いた

のが印象的でした。すでに卒業されている斉藤幸雄先生(昭和57年卒、現国立病院機構、千葉医療センター呼吸器外科)は当時千葉大全学記録の100m10.7秒という記録を持ち、諸先輩方は5月に開かれた全学系の最大の大会である関東インカレ2部でも揃って出場されました。なかでも萩原さんは、追い風2.0mという公認最大の好条件下にも助けられ生涯自己ベストタイの100m11秒3を出し、さらに横田さんは800mで予選、準決勝で自己ベストを更新し、1分54秒16という日本全体の年間50傑にはいる大記録で5位に入賞いたしました。横田さんは翌年の関東インカレでも陸上の花形の4×400mリレーの第3走で3分17秒49という大記録で走られており、医学部陸上部の先輩方は千葉大全体でも大活躍されておりました。

全学陸上部に入部したものは、医学部の陸上部に入部するのが慣例と聞き、医学部陸上部のコンパに呼ばれました。医学部バス停で先輩が待っていると言われ、行ってみますと、日焼けして長髪で、黒縁のめがねをかけた文学青年様で、眼光が鋭い人がタバコを吸いながら立っていました。タバコを吸う人が陸上部の人ではあるまいと思って無視していると、「船橋か?」といわれそのひとが伊佐真之さん(昭和62年卒、現沖縄県立北部病院小児科部長)でありました。伊佐さんは後に千葉県の囲碁チャンピオンになり、カラオケでも英語で歌う多彩多芸の方で、外見は冷たい感じのする方でありながら、非常



写真1. 福山右門教授夫妻を囲む陸上部OBの方々+当時の陸上部の現役員

第5章 交友の広がり

に面倒見の良く、部員に人望がある、医学部陸上部だけに所属する先輩でした。伊佐さんの専門は走り高跳びで、一年間練習をせず、ためにためたバネで、大会にて記録を出すという、全学の先輩とは異次元の先輩で、実際に医学部の大会で入賞もされたようです。伊佐さんに連れられて、旧サークル会館にいくと1学年上の大内聡さん（昭和63年卒、中村耳鼻咽喉科クリニック、旧千葉大学耳鼻科所属）がベッドで休んでおられました。大内さんは、同学年に横田さん、近藤さん、溝尾朗さん（昭和63年卒、現東京厚生年金病院・内科部長）といった医学部陸上部での金メダリストが揃っており、そのため競技ではあまり目立たなかったですが、部内ではムードメーカーとして無くてはならない必須な存在でした。強烈なエピソードとして槍投げの競技直前に、御自身の800mの準備運動でグラウンドの中央に一人で寝ておられ、あやうく槍の串刺しになるところ、アナウンサーに注意され、みんなで助けにいったことが思い出されます。部室では医学部陸上部の部長と名乗る野本靖史さん（昭和60年卒、現船橋市立医療センター、緩和ケア内科部長）がすごい勢いでいろいろしゃべられ、内容はあまり覚えていないのですが、ともかくすごい先輩という印象が残りました。野本先生は当時すでに足の怪我をされておりましたが、小生の入部前は短距離で活躍されたそうです。野本さんには同年スキー旅行でペアを組ませていただき、スキーの実技とともに人生の生き方について教えていただき、大変お世話になりました。そして医学部陸上部には野本さんの1学年上に小野崎郁史さん（昭和59年卒、現在世界保健機構（WHO）にて新型インフルエンザ対策等で大活躍）、佐久間哲也さん（同、千葉大呼吸器内科所属）、藤本肇さ

ん（同、沼津市立病院放射線科部長）という御三家と菊野薫さん（昭和60年卒、現千葉県循環器病センター内科）という綺麗な女性の先輩がいることがわかりました。小野崎さんは野本さんと同様に足を怪我されておりましたが、全盛期は当時医学部陸上部界、中長距離で無敵といわれた旭川大学の山本長史さんに唯一800mで勝ち、山本さんに800mを断念させ、長距離に追いやったすごい人らしいこと、藤本さんも長距離で活躍されていたが、それ以上に頭が良く、また酔うと特殊な芸をされることがわかりました。佐久間さんは6年生でも短距離において4×100mリレーで金メダル、100、200mで銅メダルと現役ばりばりで活躍されていました。佐久間さんは在学中、銀メダルのみ獲得できなかったというので、その年の全日本医歯薬獣で佐久間さんと私が二人で出場しました。その大会で佐久間さんは200mで見事銀メダル、小生は1500mで銅メダルをとり、その後なんでもごちそうしてくれるということで帰りにメロンカキ氷をご馳走になりました。またその他に医学部陸上部のみ所属されている先輩には榎本哲郎さん（昭和61年卒、現国府台病院治験管理室長）という俳優の暮目良のような彫の深い方が砲丸投げをされていること、江畑龍樹さん（昭和62年卒、現佐倉整形外科病院）が短距離をされていることを知りました。榎本さんは映画に造詣が深く、いっしょに鑑賞させていただき、またご実家がぶどう園をされており、毎年部員でお邪魔させていただきました。医学部陸上部の歓迎会のコンパでは部の顧問である第一解剖教室の嶋田裕教授の乾杯のもと、栗山喬之先生（昭和43年卒、現千葉大学呼吸器内科名誉教授）、古山信明先生（昭和43年卒、前千葉大附属病院手術部長・助教授）、南昌平先生（昭和48年



写真2. 福山右門教授夫妻を囲む陸上部OBの方々+当時の陸上部の現役部員

卒、現聖隷佐倉病院院長), 金沢正一郎先生(昭和49年卒, 元千葉大学第一内科, ビタミン研究室, 現蒲田総合病院健康管理センター), 横須賀收先生(昭和50年卒, 現千葉大学腫瘍内科学, 消化器内科教授), 徳重克彦先生(昭和53年卒, 現徳重整形外科院長), 今関文夫先生(昭和54年卒, 現千葉大学腫瘍内科学准教授)等多くの先生方に沢山出席いただきました。これらの先生方や卒業後の小野崎さんには以後も毎回お付き合いいただき, 大変お世話になりました。また大会にむけてのカンパを以上の先生方に加えて, 私が担当させていただいたOBの先生方だけでも滝西修司先生(昭和39年卒, 三和医院), 小林英夫先生(昭和41年卒, 小林整形外科院長), 石渡堅一郎先生(昭和44年卒, 石渡内科医院), 神津照雄先生(昭和44年卒, 前千葉大光学医療診療部教授), 平野和哉先生(昭和46年卒, 平野胃腸科クリニック院長), 豊田敦先生(昭和47年卒, 前成東病院, 現とよだ整形外科医院), 武井泉先生(昭和49年卒, 平和病院名誉院長), 隆元英先生(昭和50年卒, 現済生会習志野病院副院長), 佐々木憲裕先生(昭和50年卒, 現聖隷佐倉病院副院長), 村山博和先生(昭和55年卒, 現千葉県循環器病センター診療部長), 小野木淳先生(昭和56年卒, 小野木医院院長), 荻野尚先生(昭和57年卒, 現国立がんセンター東病院粒子線医学開発部長), 本田明先生(昭和58年卒, 現北見工業大学保健管理センター教授)をはじめとした諸先生方には大変お世話になりました。お世話になりましたOB, OGの先生方全員にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。また私の記憶が足りずお名前を載せられなかった先生方には深くお詫び申し上げます。

小生の医学進学課程1年の昭和59年に新潟で開かれた東医体では萩原さん, 佐久間さんが100, 200m両方で2, 3位, 横田さんが400mで1位, 800mで2位, 1500mで村田さんが3位, 5000mで村田さんが2位, 船橋が5位, 3000m障害で近藤さんが2位, 4×100mリレーで溝尾, 萩原, 佐久間, 横田さんで1位と大量得点を挙げ, トラック優勝を飾りました。その年は私も箱根駅伝の予選も走らせていただき, 千葉大全体で1位が村田さん(67分台), 4位が船橋(73分56秒), 体調を崩された近藤さんが6位(74分台)と医学部陸上部は大活躍しました。その後も村田さん, 横田さん, 近藤さんは東医体で活躍され, 村田さんは, 1500mは最高位が2位(最終学年は逃げに逃げて, 惜しくもラストで刺され, 2位)でしたが, 5000, 3000m障害は優勝, 横田さんは400, 800mで優勝を続けられました。近藤

さんは, 調子が悪く途中まではどんなに疲れた形相で走っていても, 最終コーナーまでトップグループにいたらラストスパートで絶対に誰にも負けませんでした。精神力が異常に強かったのだと思います。6年生の関東医歯薬獣大会では, 大会前は練習不足もあり絶不調で優勝等狙える状態ではありませんでしたが, 1500m障害でラスト120mまでトップ集団にいて, 私はバックストレートで応援していて, この位置で近藤さんならラストで勝つと確信しましたが, 予想通り鮮やかなスパートで見事優勝されました。溝尾さんはしばらくブランクがありましたが, 6年生は絶好調で挑み, 東医体で4×100mリレーでアンカーとして, 3名抜きで優勝し一躍大ヒーローに。200mでも4位に入賞しました。実はあまりに絶好調なので, 東医体4×400mリレーにも投入させていただこうと思いましたが, 試験として東医体一週間前の千葉市の記録会で400mに出場してもらったところ300mまでは38秒台で走破しましたが, そこからの100mに18秒もかかり最終的に56秒もかかってしまいました。そのため400mはあきらめてもらい, 100, 200mに専念していただいたほうがよいと自他共に判断したことが本大会の成功につながったと今も考えております。

小生の後輩には昭和59年に1学年下の大滝雅之君(平成2年卒, 現天神前クリニック勤務)が入部してくれました。彼は, 陸上競技の初心者でありながら, 長距離をじっくり走り続けることができるという特殊な才能を持ったひとであり, スピードは私が見た全陸上選手の中では一番遅いが, スタミナは傑出したものをもっています。村田さんは800mからマラソン, 横田さんは400-800m, 近藤さんは1500-3000m障害, 私は800-3000m, 大滝君は5000m以上と別々でありながら, みんないっしょのメニューで仲良く練習しました。横田さん, 近藤さん卒業後は, 大滝君に加えて, 窪田剛実君(平成4年卒, 千葉大学消化器内科所属), 渡辺哲君(平成5年卒, 現千葉大学附属病院感染症助教)といっしょに長距離の練習をいたしました。特に大滝君とは練習でも毎回真剣勝負を行って, 今でも小生の一生の仲間と思っています。一度メンバー不足のため大滝君に4×400mリレーを走らせたところ, 止まって見えるような走りでも多くのランナーに抜かれたため, リレーメンバーには二度と呼ぶことはありませんでした。しかし彼は5年生のとき東医体の5000m決勝で炎天下のなか, 1000m地点で一氣に集団から逃げをうち, 2位以下に大差をつけました。惜しくも残り2周で新潟の吉村, 渡辺君に捕まりましたが, 見事

第5章 交友の広がり

銅メダルを獲得しました。私は盟友の活躍に刺激され、その後に行われた800m決勝でメダルは獲得できませんでしたが6位入賞することができました。私はその後、走ることもなく、体重も増えてしまいましたが、大滝君は現在でも走り続け数年前に246kmを走る世界スパルタスロン大会で優勝され、祝勝会を有志で開き、JR千葉駅の東天紅で行いました。2005年スー周杰48時間走でも405.638km走り優勝と現在でも大活躍されています。

昭和60年に県立千葉高校陸上部時代より後輩の関直人君（平成3年卒、現国立病院機構 千葉東病院）、米倉あゆみさん（同、現石原あゆみ先生、現国立病院機構 下志津病院小児科）、浜岡朋子さん（同、千葉大学呼吸器内科）、吉田耕君（同、現吉田耳鼻咽喉科医院院長）が入部してくれました。特に米倉さんは医学部陸上界の枠に留まらず、1986年に国立競技場で開かれた全日本インカレにて4分40秒94で7位に入賞、2年後やはり国立競技場で開かれた関東インカレ2部にて3000mで10分07秒07と、医学部男子に混じっても遜色無い走力を見せてくれま



写真3. 砲丸を投げる、関直人さん
（青ユニフォーム、ゼッケン295番）

した。関君は砲丸投げ（写真3）が専門で、写真を見ていただけるとおわかりいただけるように他の砲丸投げの選手と異なり、スマートな体型ながら安定して5、6位の低位入賞を続け、千葉大に多くの得点をもたらしてくれました。砲丸投げの選手としては異例に走力もあり、普通の400m走ではたいした記録はありませんでしたが、4×400mリレーの第1走だけは妙に速く、後述の第2走の西平君とのコンビで途中まで先頭を維持する等印象に残る活躍してくれました。人間面でも部になくはならない存在で、先輩、同級生、下級生、全てより慕われ、カラオケの18番はイルカさんのなごり雪でした。神奈川県や東京都内の陸上大会の後、酔って、総武線快速内でよくO先輩、渡辺哲君と大声を出していた

ので、窪田君と私は、下を向いて離れた席で他人のフリをしておりました。申しわけありませんでした。浜岡さんはスーパースターの米倉さんに記録面では隠れましたが、地道な練習が必要な800m、1500mで最後まで競技を続け、そのレーススタイルは、最初はゆっくりスタートし、一人ひとりを粘り強く抜いていくというもので、最高3位で多くの大会で入賞等の活躍をしてくれました。吉田耕君は槍投げが専門で、筋骨隆々でいつもにこにこした礼儀正しい好青年でたびたび入賞してくれました。

昭和61年入部組は千葉大医学部陸上部の黄金時代といわれ、前述の窪田君に加え、久保田博昭君（平成4年卒、現津田沼こどもクリニック院長）、熊野浩太郎君（同、成田赤十字病院リウマチ科）、山田恵子さん（同、千葉大学小児科所属）、小泉健一君（同、現小田原市立病院、呼吸器内科）、浅海直君（同、現板橋区役所前診療所）等たくさんの逸材が入部してくれました。窪田君は地道な努力で5000mに活躍したのに加え、非常に優しい性格で、部員を陰からまとめてくれました。久保田君は2年生のとき、東医体で4×100mリレーの第一走として金メダル、全日本医歯薬獣の4×400mリレーでは3走として銅メダルを取ってくれました。熊野君は医学界のハンマー投げで大変高名で、私とはものが違いましたが、2学年上に日本医大の井上松応君という1年から5年まで金メダルをとったスーパースターがいたので、いつも2位でした。熊野君に金メダルをとるためにどうしたらよいかと話したところ、“練習を倍にする”等の答えを予期しましたら、“3年寝たろう作戦”を考えているといわれました。詳細を聞いてみると井上君に勝つのではなく、彼が卒業するのをじっと待つといわれました。しかし待っている間に、さらに強力な新人が登場し井上君の6連覇を阻止してしまい、後の私の人生の考え方に大きな影響を与えてくれました。山田さんはリレーで銅メダルを獲得、小泉君は途中から入部してくれた全くの陸上素人でしたが、400mで突如ブレイク、4×400mリレーにて48秒台で走った天才でした。しかし予選では快走するも、決勝では棄権したりして、横田さんと同等か、それを上回る素質を持ちながら、大きなタイトルはとれませんでした。横田さんと小泉君が同時期に活躍したら、4×400mで千葉大が優勝するのも十分可能であり、とても残念でした。浅海君も途中から入部してくれ、専門は円盤投げでした。同級生より年配で、同級生からは浅海さんといわれて尊敬されていたようです。実際、陸上部の同級生より人格面で当時よりかなり成熟、完

成されていました。

昭和62年は、前述の渡辺哲君と西平隆一君（現神奈川県立循環器呼吸器病センター 呼吸器科）が入部してくれました。渡辺君は当時流行っていたバック・ツー・ザ・フューチャーのマイケル・ジェイ・フォックスに似ていて、バンドのボーカルをしていましたが（一度見たコンサートでは鶏のとさかのようなファッションでローリングストーンズのサティスファクションをカバーしていました）、陸上は初心者ながら入部してくれました。種目は地道な練習量を必要とする長距離を選択し、2年生時は関東医歯薬獣の1500m障害で3位に入賞、その後も6年までタイムを伸ばして活躍し、私は5000mの自己ベスト記録で抜かれてしまいました。西平君は関君の項目で書きましたが、中学より200, 400mを専門とした即戦力として数多くのリレーで大活躍。4×100mリレーでは第3走として見事にコーナーを走りきり、東医体の金メダル獲得に貢献。4×400mリレーでも1, 2, 4走とチーム事情によって見事な走りをしてくれ、千葉大医学部陸上部に多くのメダルをもたらしてくれました。不調で疲れると走行中に体が反り返り、手の振りが大きくなるのが特徴で、これができると残念ながらダメでした。さらに昭和63年には白石佳澄さん（千葉大小児科所属）も入部してくれ、4×100mリレーで銅メダルをとってくれました。以上が文責の船橋が在学中の先輩後輩

のエピソードです。写真4, 5はそれぞれ昭和62年, 63年の東医体終了後の陸上部の全体写真です。私が卒業後も、現在千葉大学産婦人科助教の木原真紀先生等が活躍されましたが、数年後に医学部陸上部が廃部になったと聞き、大変残念に思いました。しかし最近医学部生の有志が再度陸上部を結成してくれて部が復活、なかでも秋田県立秋田高校出身の遠田泰平さんが2005年にハーフマラソンで千葉大全学でも歴代2位の1時間10分04秒を出す等の活躍をし、顧問が栗山名誉教授の退官に伴い、横須賀教授が就任され、これからよりいっそうの復活が期待されます。

最後に2008年4月18日には栗山名誉教授、古山部長の退官を記念して、ホテルミラマーレで陸上部OB会を行い50名近くの先生方に集まいただきました。会の最後に神津照雄教授（前千葉大光学医療診療部教授）より、定期的に会を設けようとおっしゃっていただき、今回は神津教授の退官記念が大滝雅之先生のスパルタスロン優勝で、我々の“思い出”の居酒屋“五味鳥”で行おうとってお開きになりました。しかし大変残念ながら神津教授の急逝で、御通夜、告別式が医学部陸上部OBの悲しみの再会の場になってしまいました。また是非神津教授を偲ぶOB会を、横須賀教授と相談して近いうちに行いたいと思います。

（ふなばし のぶさだ）

写真4. 昭和62年
東医体終了後の陸上部の全体



写真5. 昭和63年
東医体終了後の陸上部の全体

ゐのはな音楽部

進藤 哲

ゐのはな音楽部の黎明期

ゐのはな音楽部とは

中谷晴昭教授（現医学研究院長・医学部長，薬理学）を顧問とする千葉大学亥鼻地区の音楽サークル，管弦楽団である。部員は医学部に限らず看護学部，薬学部，千葉県医療技術大学校，旧看護学校からの参加もあり，現在部員数60余名で亥鼻地区の文科系サークル最大の部員数をもつ団体となっている。恒例となっている附属病院でのボランティアでのコンサート，千葉県がんセンターでのふれあいコンサートなどを行うほか，ゐのはな祭への参加や，千葉市内のコンサートホールでの定期演奏会を開催している。

黎明期

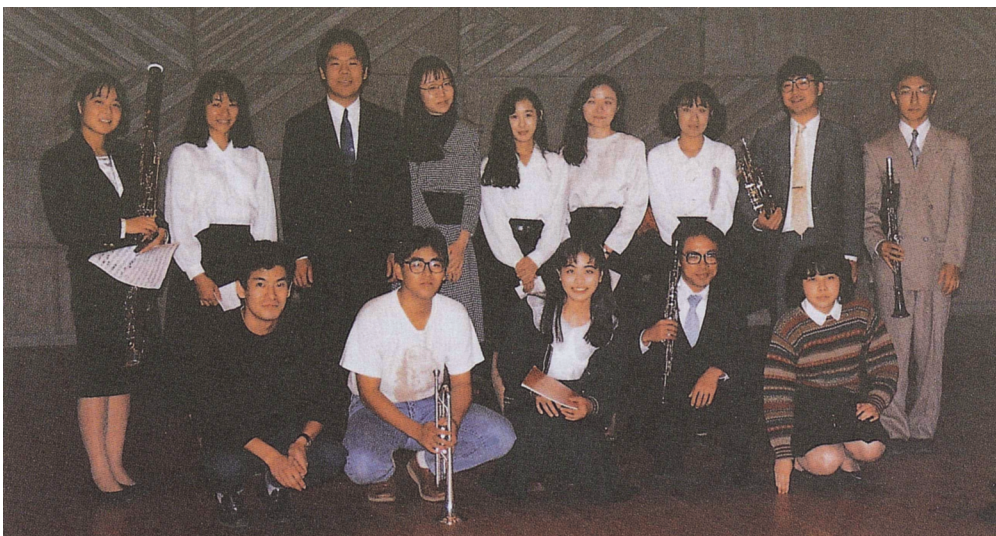
ゐのはな音楽部の原型は1980年代後半に入学した医学部生を中心に誕生した。当初は部活動として正式登録はしておらず，亥鼻祭の時期に記念講堂で演奏することを目的に，楽器経験者が集まって合奏やピアノソロなどの演奏を行っていた。管弦楽団を構成するほどの人数も楽器も揃っておらず，編成を問わないで室内楽を楽しむ活動であった。メンバーの中には西千葉地区の管弦楽団や合唱団に参加する者もあり，また運動部と兼部したり学外の音楽団体に参加している者も多く，部活動として登録後も，通年の部活動というよりは，演奏の機会があれば楽器

経験者が学内で集まって練習して発表する，という形であった。顧問は永野俊雄名誉教授（解剖学）で，中心的に活動していたのは早野真史（1985年医学進学課程入学，チェロ），塩見興（1987年入学，オーボエ），伊勢美樹子（同，ヴァイオリン），木村裕行（1991年入学，オーボエ），進藤哲（同，ホルン）らであった。

音楽部の原型となるグループによる亥鼻祭での最初の演奏は1988年頃であったものと思われる。それより前の亥鼻祭でも個人的な演奏活動はあったのかもしれないが，活動が引き継がれて部活動の登録に至ったという点で，この時期を黎明期と考えている。現在記録に残っているのは1991年から1993年の亥鼻祭のプログラムである。演奏曲目にはソロや女性合唱も含まれており，J. S. Bachのカンタータ「主よ，人の望みの喜びよ」（第147番）の合奏が全員で行われた。オリジナルとして最大の編成はMozartやBeethovenによるピアノと木管のための五重奏曲であった。田中宏一助手（第三解剖，当時）は自作のチェロでゲスト参加された。東京藝大卒業後に再入学した古田多真美（1989年入学）のピアノ演奏は聴衆と部員に感銘を与えた。

附属病院でのコンサート

その後，1994年より中谷教授に顧問をお願いし，未だに昭和時代の学生運動の匂いが微かに残ってい



1991年当時のゐのはな音楽部(亥鼻祭)

た現在のサークル会館2階の部室を確保し、特に弦楽器奏者の参加が少しずつ増え始めた。看護学部のほか旧看護学校、医療技術大学などからの参加もみられるようになった。またサクソなど管弦楽に通常は加わらない楽器の奏者も部員として迎えていた。新入部員のほとんどは楽器経験者であったが、大学入学後に楽器を替えたり、全く新しく音楽を始める部員も積極的に受け入れた。1995年頃には曲がりなりに管弦楽合奏が可能となり、1996年6月にサークル会館2階の集会室を会場として最初の自主演奏会を開催した。次いで同年10月25日（金）に「びょーいんDEコンサート」と題して附属病院での最初のボランティアでの演奏会を行った。医学系の学生がひとつとなり患者さんを支えていきたいという伝統は現在も引き継がれている。この時の部員は21名となっていたが、未だ編成上の問題があり、楽器紹介をはさみつつ、前半が弦楽アンサンブル、後半が管楽アンサンブルの演奏であり、管弦楽団としてまとまった演奏会は持ち越された。翌1997年の「びょーいんDEコンサート・2」では管楽・弦楽と分かれたアンサンブルののち、管弦楽合奏として映画「ティファニーで朝食を」より「ムーン・リバー」が演奏された。音楽部が演奏会で管弦楽として音を出したのは記録ではこれが最初である。同年には「びょーいんDEクリスマスコンサート」も行い、これが最初のクリスマスコンサートとなった。曲目はクリスマスにちなんだ曲目のほか、Leopold Mozart (Amadeusの父)の「おもちゃの交響曲」も演奏された。これが最初の交響曲演奏であると思われる。指揮は学生の木内英（1993年入学、ホルン）、松澤陽子（同1994年、フルート）が担当していた。また当時医学部助手であった天野雅彦氏（フルート）も留学から帰国後に音楽部の指導にあっていた。1998年のクリスマスコンサートでは西千葉

キャンパスの千葉大生、県立千葉高校の学生による合唱も加わりHandelの「ハレルヤ」などを演奏している。この頃には初夏とクリスマスの時期の年2回、附属病院で演奏会を行うことが恒例となっていた。2001年の春からは当時まだ東京藝術大学指揮科の学生であった富永桂子先生をトレーナー兼指揮者に迎え、本格的な管弦楽合奏を開始した。練習はもっぱらサークル会館2階で行っていた。

定期演奏会の開催と現在の活動

部員の増加と演奏経験の蓄積により本格的な交響曲の演奏が曲がりなりに可能となり、2003年に第1回の定期演奏会を開催した。その後は年1回のペースで定期演奏会を行っている。2010年9月11日には初めて千葉県文化会館大ホールでの8回目の定期演奏会を行っている。最近はサークル会館での練習が手狭となり、学外に練習会場を求めている。

現在の年間活動予定は、以下のようである。

- 3月～5月上旬……新入生歓迎
- 5月～ ……定期演奏会に向けた練習
- 5月中旬 ……5日間の合宿（岩井海岸）
- 9月中旬 ……定期演奏会
- 12月中旬 ……クリスマスコンサート
（医学部附属病院）
- 3月上旬 ……スプリングコンサート
（千葉県がんセンター）

また6月に行われる関東医科学生オーケストラフェスティバル、8月の全日本医科学生オーケストラフェスティバル、3月の北日本・西日本といったインターカレッジ・オーケストラにも積極的に参加している。特に2009年8月4～12日に行われた第29回全日本医科学生オーケストラフェスティバルでは千葉大学が主管となり（実行委員長 黒川友哉、



顧問の中谷教授と2009年執行部メンバー

第5章 交友の広がり

2004年入学、ホルン)、東京芸術劇場大ホールでの演奏会を成功させるとともに、ティンパニなど大型楽器の購入を行っている。

OB・OG会の設立

部員数が増加するに伴いOB・OGの数も増えて現在120余名となった。これに伴い、現役部員の活動を支援し卒業後のOB・OGの相互親睦を図ることを目的として千葉大学なのはな音楽部OB・OG会が2009年2月に設立された。毎年10月第一土曜日に定期的にOB会を開催することとしている。OB会(零次会)は元々現役部員がOB・OGと共に再び演奏を共にする機会を設けたことが始まりである。現在は多忙な研修期間でも現役と共に定期演奏会に出演するOB・OGもある。また現在はOBオーケストラの設立が検討されている。

今後のこと

サークル会館2階は練習場として次第に手狭となり、現在は記念講堂や千葉県文化会館などの学外施設を利用することが多くなり、それに伴う楽器運搬などが必要となっている。練習場の確保は学生オーケストラの悩みの1つである。また編成上演奏できる曲目が広がるに従って特殊楽器の手配も必要となる。今後は5弦のコントラバス、各種打楽器、コントラファゴット、バスクラリネットなどの特殊楽器が部の楽器として必要になるのか。

楽器演奏は個人の技量に迫る部分が多いが、幼少時からヴァイオリンのレッスンを受けているような経験者、また他の団体で管弦楽を経験したことがある者のほかに、全くの楽器初心者、高校時代まで

の楽器を変えて別の楽器で参加する者もある。様々なバックグラウンドを持ち学部も異なる学生が集まって1つの音楽を作っていくことの意義は課外活動として計り知れないほど大きく、部員の学生生活の大きな部分となり、また将来医療者として共に仕事をしていく上での大きな助けとなるだろう。一方で演奏会を開催するということは聴衆がいるということであり、多忙だからとか楽器初心者だからという理由で演奏がひどくても許されるという訳でもない。また部員数が増えるとパート毎に活動しなければならなくなる場面も増え、全体が見えにくくなるといった問題もある。まだ若いこの部活動が厳しく、また楽しく、学生時代の良い思い出となり、今後も発展していくことを願ってやまない。

主な演奏記録

1996年10月25日 医学部附属病院1階ロビー
「びょーいんDEコンサート」

- ・弦楽アンサンブル：パッヘルベル「カノン」、モーツァルト「ディベルティメント K. 138」、バッハ カンタータ「主よ、人の望みよ、喜びよ」
- ・管楽アンサンブル：「エンターティナー」、チャイコフスキー「アンダンテ・カンタービレ」、「ロンドンデリーの歌」、サウンド・オブ・ミュージック・メドレー

1997年(月日不明) 医学部附属病院1階ロビー
「びょーいんDEコンサート・2」

- ・管楽アンサンブル：ハイドン「ディベルティメント変ロ長調」より第一楽章、小学唱歌「どこかで春が」「夏は来ぬ」、イバール「3つの小品」より第一番、チャイコフスキー 組曲「くるみ割り人



附属病院1階ロビーでのクリスマスコンサート

形」より「あし笛の踊り」

- 弦楽アンサンブル：モーツァルト「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」より第一楽章，レスピーギ「リュートのための古風な部局とアリア」より「シチリアーナ」，小学唱歌「花の街」，バッハ「2つのヴァイオリンのための協奏曲」
- 管弦楽合奏：映画「ティファニーで朝食を」より「ムーン・リバー」

1997年12月 医学部附属病院1階ロビー

「びよーいんDEクリスマス コンサート」
「ジングルベル」，L. モーツァルト「おもちゃの交響曲」，F. ダンツィ「木管五重奏曲変ロ長調」より第一楽章，クリスマスジャズ組曲，アンダーソン「そりすべり」，「もろびとこぞりて」，「赤鼻のトナカイ」，「きよしこの夜」

1998年12月18日 医学部附属病院1階ロビー

「びよーいんDEクリスマスコンサート」
J. ホーナー 映画「タイタニック」より，コレリ「クリスマス協奏曲」，「グリーンスリーブス幻想曲」，「ホワイトクリスマス」，ヘンデル「ハレルヤ」

1999年6月11日 医学部附属病院1階ロビー

「びよーいんDEコンサート」

モーツァルト「交響曲第40番ト短調」より，チャイコフスキー「弦楽セレナーデ」より，パッヘルベル「カノン」，ボワモルティエ「協奏曲第3番」より，ハイドン「ディベルティメント」

1999年12月22日 医学部附属病院1階ロビー

「びよーいんDEクリスマスコンサート」
Mel Torme：The Christmas Song～トロンボーン二重奏，Rossini：弦楽ソナタ集第1番ト長調，J. S. Bach：主よ人の望みの喜びよ（フルートアンサンブル），Anderson：The Walzing Cat，「赤鼻のトナカイ」「諸人こぞりて」，Anderson：Sleigh Ride（そりすべり）

2000年5月26日 医学部附属病院1階ロビー

「びよーいんDEコンサート」
モーツァルト「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」，トロンボーン二重奏「浜辺の歌」，エルガー：フルート合奏「愛の挨拶」，アンダーソン「シンコペーテッドクロック」

2000年12月22日 医学部附属病院1階ロビー

「Christmas Concert 2000」
W. A. Mozart：Divertiment IIIより第一楽章，I. Berlin：White Christmas，W. A. Mozart：Ave Verum Corpus，J. S. Bach：Brandenburg協奏曲第



ふれあいコンサート
(千葉県がんセンター)

定期演奏会
(京葉銀行文化プラザ音楽ホール)



第5章 交友の広がり

5番より第一楽章、チャイコフスキー「くるみ割り人形」より「花のワルツ」、A. Reed: Two Bagatelles, J. S. Bach: 2つのヴァイオリンのための協奏曲ニ短調, Elger: 威風堂々第1番, 「赤鼻のトナカイ」

2002年6月14日 第2回ふれあいコンサート

千葉県がんセンター正面玄関ホール

指揮：富永桂子

アンダーソン「シンコペーテッド・クロック」、
「イン・ザ・ムード」、チャイコフスキー「弦楽セレナード」より第2楽章、チャイコフスキーバレエ組曲「くるみ割り人形」より「葦笛の踊り」、シュトラウス「春の声」

2002年12月20日 医学部附属病院1階ロビー

「びよーいんDEくりすますコンサート」

アンダーソン「そりすべり」、ドジャース&ハマ
ンスタイン「Sound of Music」、チャイコフスキー
「花のワルツ」、グリーク組曲「ペール・ギュン
ト」より「朝」、コレルリ「クリスマス協奏曲」
など

第1回定期演奏会

2004年11月3日

千葉大学亥鼻キャンパス記念講堂

- エルガー 威風堂々第1番
 - チャイコフスキー 「くるみ割り人形」より「花のワルツ」
 - モーツァルト 交響曲第40番
- 指揮：富永桂子

第2回定期演奏会

2004年11月3日

千葉大学亥鼻キャンパス記念講堂

- グリーク 「ペールギュント」第1組曲より「朝」
 - オスカー・ハマースタイン 「The Sound of Music」メドレー
 - ベートーベン 交響曲第8番
- 指揮：富永桂子

第3回定期演奏会

2005年10月29日

千葉市生涯学習センターホール

- ベートーベン 「エグモント」序曲
- シューベルト 交響曲第8番「未完成」

- ベートーベン 交響曲第4番
- 指揮：直井大輔

第4回定期演奏会

2006年9月9日

千葉市若葉文化ホール

- シューベルト 「ロザムンデ」序曲
 - ビゼー 「アルルの女」第1・2組曲より抜粋
 - ベートーベン 交響曲第6番「田園」
- 指揮：直井大輔

第5回定期演奏会

2007年9月8日

千葉市文化センターホール

- メンデルスゾーン 序曲「フィンガルの洞窟」
 - ドヴォルザーク 「スラブ舞曲」より抜粋 1, 3, 8, 10番
 - ドヴォルザーク 交響曲第8番
- 指揮：直井大輔

第6回定期演奏会

2008年9月13日

京葉銀行文化プラザ音楽ホール

- シベリウス 「フィンランディア」
 - ビゼー 「カルメン」第1・2組曲より抜粋
 - ブラームス 交響曲第2番
- 指揮：直井大輔

第7回定期演奏会

2009年9月12日

京葉銀行文化プラザ音楽ホール

- ウェーバー 歌劇「魔弾の射手」序曲
 - シベリウス 「カレリア」組曲
 - シューマン 交響曲第1番「春」
- 指揮：直井大輔

第8回定期演奏会

2010年9月11日

千葉県文化会館大ホール

- フンパーディング 「ヘンデルとグレーテル」前奏曲
 - シューベルト 交響曲第7番「未完成」
 - ドヴォルザーク 交響曲第9番「新世界」より
- 指揮：直井大輔

(しんどう さとし)

ゐのはな華道部

杉浦 寿彦

小原流いけばなの会

本サークルの顧問を務めていただいていた白澤浩教授から、原稿の依頼を頂いたのは本記念誌の締め切り間近でした。本学にある錚錚たるサークルに比べると、10年程度の歴史しかないためOB、OGが少なく、またすでに休部（廃部？）状態であり現役の部員も不在というなかで、たまたま筆者が大学に残っていたということで白羽の矢が立てられました。確かに歴代の部員の中では在籍年数は最長であり、部長もやらせてはいただきましたが、創設メンバーではなく、本来であればこのような文章を書く立場にはないとは思っていますが、とりあえずこのようなサークルが存在したということを記録に残すということで、ご容赦をいただければと思っています。

華道（いけばな）は仏前に花を供える「供花」から始まり、室町中期に池坊専慶によって「立花」として確立したとされています。江戸後期から明治初期にかけての隆盛期に、多くの達人・名人が現れ、彼らがそれぞれ流派を確立していったため、現在でも多くの流派が存在しています。その中で我々のサークルは小原雲心を祖とする「いけばな小原流」を学んでいました。

元々は、小原流の河田陽子先生を師範とする、職

員のサークルとして存在していたところに、平成6年、当時の5年生数人が入門して、学生サークルになったと聞いています（この辺の詳細は筆者はよく承知をしていません）。筆者が医学部に入学したのが平成8年でした。何かの部（少なくともゴルフ部ではなかったと記憶しています）の勧誘会の席で、筆者が中高と茶道部にいたという話をしたとき、「亥鼻に華道部はあるよ、似たようなものだろうから来てみない？」とお誘いを受けて、5月頃に見学に行ったと記憶しています。当時は同窓会館の2階の一番西側の10畳を教室として使っていました。学生が原則使用しない部屋であったため、東側にあった他の部屋に比べれば、障子が破れていたり、畳が腐っているということはなくずいぶんましでしたが、この当時でもすでにかなり傷みがすすんでいた印象があります。稽古日は毎週木曜日（月3回）で、職員、学生あわせて十数人がお稽古していました。学生は各運動部を引退した学3、学4がメンバーのほとんどで、女性陣ばかりでしたのでずいぶん華やかだった印象があります。

顧問は当初第二外科の落合武徳助教授（当時、現先端応用外科学名誉教授）にお願いしていましたが、平成11年より微生物学第一教室（現分子ウイルス学）の白澤浩教授に交代となりました。

平成10年までは同窓会館を教室として使っていま



1995年(平成7年)頃 いけばな同窓会館にて



1999年(平成11年)頃 附属病院内 華展にて

したが、冬はすきま風で極めて寒いという問題があったり、また老朽化が激しくなり、使用が困難かつ危険となったため、平成11年頃から大学病院内(職員食堂)に教室を移しています。

サークルの大きな行事として華展(生け花の作品を展示する)の開催があります。それまでも年に1回程度千葉市内で場所を探して行っていました。平成11年6月に附属病院内で「花とやすらぎ」というテーマで2日間の日程で開催しました。病院内の開催はサークルが立ち上がった頃からの念願で折衝は繰り返していましたが、種々の問題がありなかなか実現しませんでした。しかし当時病院長であった山浦晶教授(現脳神経外科名誉教授)に「患者さんへのアメニティーの向上になるから」と言うことで許可をいただき実現にこぎ着けました。「患者さんの動線を妨げないスペースで」という条件があり場

所を探すのにずいぶん苦労しましたが、外来ホール棟の2階に場所を見つけました。やや日立たない場所であったため、どれくらいの来訪者があるかという点が不安でしたが、アンケート(見てくれた方に気に入った作品と感想を書いていただきました)は2日間で500枚を超え、ほっとした記憶があります。その後も歴代の病院長のご厚意により年1回程度華展を実施しています。

ただ学生サークルとしてはこの頃から部員数が減り始めています。部長であった筆者の努力が足りなかった事が一番ではあるとは考えていますが、カリキュラムの変化や国試の難化、新臨床研修制度の開始で、特に高学年に余裕がなくなってしまったのも一つの要因とも思っています。職員サークルとしては継続していますが、結局筆者より下の学年の医学部学生の入部がなかったため、学生サークルとしては今のところ休部(廃部?)となっています。

このような機会があるとは当時は全く思わなかったため、将来のためのマニュアルは作っても過去の記録を残すということを全くせず、今となっては非常に後悔しているところです。そのため、この文章は筆者の記憶を頼りに書いていますので、誤りがあるかもしれませんがご容赦を頂ければと思います。

(すぎうら としひこ)

ゐのはな手話の会

遠藤 千鶴, 遠藤 佐知子

〈創立の経緯〉

ゐのはな手話の会は、1988年6月、顧問に公衆衛生学の安達元明教授を迎え、松林潤子氏を会長に小林久倫、徳永進、福間恵、渡邊博之の諸氏（当時旧学1年）を中心に初期メンバー12名で発足した。ゐのはな手話の会発足の経緯は以下の様であった。

当時の医学部教育カリキュラムは、医学進学課程（医進）と専門課程がほぼ完全に分かれており、医学部生は、最初の2年間は西千葉キャンパスで教養科目を学んでいた。2年時には総合科目という必修科目があり、所謂学際的なセミナー形式の科目が選択可能であった。そして医進生の選択出来る総合科目には手話セミナーと点字セミナーがあった。

いずれも、当時文学部ドイツ文学専攻の教授であった故小島純郎先生（2004.10.10ご逝去）が、教鞭をとられていた。小島先生は現在盲ろう者として初めて東京大学教授になったこと等で有名になられた福島智先生を若い頃から支援され、父のように慕われていらした。

この二つのセミナーは医学生の人気が高く受講は抽選であった。受講生は後にゐのはな手話の会を創立することとなる松林潤子、福間恵、渡辺博幸の諸氏（92年卒）であった。これらのセミナーは午後の最後のコマであった。その為授業終了後は研究室で、手作りの料理が振る舞われ当時の大学本学の手話サークルである「ウルトラマンの会」のメンバー、視聴覚障害やその他の身体障害の方々と共に、大変にぎやかで楽しい酒盛りになるのが常であった。

セミナー自体に試験はなかったが、容易に単位が取得できる訳ではなく、先述の「ウルトラマンの会」の上級生がセミナー受講生1人ずつにつき、夏休み中に特訓をし手話スピーチを練習し発表するという課題があった。また、「ウルトラマンの会」には、浜田洋通氏（当時旧学3年、90年卒）が在籍しており、今村光宏先生（現在静岡県盲ろう者友の会事務局）と共に、ゐのはな手話の会で手話だけではなく手話文化や障害など広く指導を仰いだ。

セミナーを終え、医学進学課程2年から亥鼻の専門課程に進学した際に、松林順子氏を中心に亥鼻地

区の文化系サークルとして手話の会を立ち上げようという機運が持ち上がった。そこから手話セミナー受講者であった福間、渡邊両氏と共に設立の準備が始まった。この際に名称は『ゐのはな手話の会』とし、会を表す手話も作って頂いた。5月までに事務的な設立準備を行い、会としての実際の活動が開始されたのは夏休みに入る前あたりであった。活動は亥鼻同窓会館の2階を借りて、毎週木曜日の夕方5時半から小1時間ほど行った。

設立当初は旧学1年の初期メンバーが、今村先生、浜田氏をはじめとするウルトラマンの会の先輩方に、手話の基礎をご指導頂いた。具体的な活動内容としては手作りのテキストをつくり、先輩のマネをして覚えるというものであった。その後には中途失聴の女性や、近所に住む聾啞の方々を講師としてお招きした。どの方もつらい人生経験からにじみ出る温かいユーモアをもっておられる大変魅力的な方々であった。医学生という同質・同世代集団で狭い関係を作りがちな学部生サークルとは当初から雰囲気異にした集まりを育むことが出来たのは、学外メンバーの方々のおかげと言えよう。

会の活動の中では、教科書で学ぶ手話ではなく、実際の手話者の方をお招きし、生活の中で使われる手話、手話者の生活に触れることに、一番腐心した。会のメンバー各々が、西千葉の「サイダーの会」、千葉市中央区の「いちょうの会」などの地域の手話のコミュニティーに参加して、つながりを増やしていった。会のルールは「来るもの拒まず、去る者追わず」であり、他の運動部や生活のためのバイトを掛け持ちしているメンバーも多く、つながりは緩やかであった。この伝統は今でも守られ会の雰囲気を柔らかなものとしている。

〈発展そして現在へ〉

こうして、諸先輩方によって創設されたゐのはな手話の会は、その伝統を大切にしながら後輩の手によって受け継がれ発展を続けている。ゐのはな手話の会の発展を語る上で欠くことができないのは、亥鼻祭で手話会が例年行っている「Black Box」の歩みについてであろう。「Black Box」では視覚障害者

第5章 交友の広がり

の江藤昌弘氏をお招きし、亥鼻に設けられたステージの上で熱唱して頂く。そこに、ゐのはな手話の会のメンバーが歌詞に手話をつけて発表をする。所謂「手話ソング」あるいは「歌手話」の発表の場となっている。江藤氏の歌声は大変素晴らしく、亥鼻祭に訪れた人々がステージの前で思わず足を止めてしまうほどだ。視覚障害というハンデを負った江藤氏の美しい歌声と、聴覚障害を抱えた人々へささやかにでもメッセージを届けたいと願う学生のパフォーマンスが一体となり、観客へ訴えかけるものがある。

そんな「Black Box」だが、はじめから亥鼻祭の場で発表されていたわけではない。亥鼻祭は7年ほど前に復活を遂げたが、それ以前のおよそ10年間は亥鼻キャンパス内での学生祭は行われていなかった。従って、亥鼻を活動の拠点としている文科系サークル・ゐのはな手話の会は、日ごろの成果を発表する場を大学内には持っていなかったのだ。

では、「Black Box」はいつ始まったのだろうか。実は「Black Box」は元々、江藤昌弘氏や江藤氏の友人の方々が中心となって、独自に行われていたチャリティーコンサートのことなのである。江藤氏とゐのはな手話の会メンバーとの出会いは、はっきりとした記録や記憶が残されておらず、明確にはわからなくなってしまっている。憶測で語ることを許して頂けるのであれば、おそらく諸先輩方が「サイダーの会」や「いちょうの会」などの地域サークルと積極的に交流を持つ中、「日本盲聾者の会」とも深い繋がりができ、その中から江藤氏との親和関係を築いていったのではないかと思われる。そうして、ゐのはな手話の会のメンバーは年に1、2回ほど横浜などで行われる「Black Box」に手話通訳として参加させて頂くようになった。

そして、亥鼻祭が復活する。

「亥鼻キャンパスでも、発表の場を設けたい」「江藤氏の素晴らしい活動を広めたい」という先輩方の熱意に江藤氏が快く応えてくれた。こうして、2003年11月亥鼻祭での「Black Box」が始動したのだった。以降、「Black Box」はゐのはな手話の会の本質を映し出すかのように、伝統を守りつつ確実に進化を続けている。2008年には、広瀬陽介氏（03年卒・東京女子医科大学付属八千代医療センター小児科勤務）の計らいによって、八千代医療センターの納涼祭で亥鼻祭と同様な「Black Box」を行うことができた。八千代医療センターでの発表は、大変好評で今年（2009年）の8月にも引き続きお招きして頂けた。今後も、ゐのはな手話の会の新たな伝統として

続いていくことを願っている。

以上でゐのはな手話の会の発展の一端を述べてきたが、現在の手話の会についても少し述べたい。

現在、ゐのはな手話の会にはおよそ80名近い在校生が在籍しており、そのうちの30名ほどが日々の活動に参加している。ゐのはな手話の会は毎週月曜日と木曜日の午後6時から同窓会館を拠点に、勉強会を行っている。勉強会のスタイルとしては、会の発足当時のまま、後輩が先輩の指導を受けながらお互いに切磋琢磨していく方法をとっている。

基本的には、3年生を中心として新しく入ってきた1年生に独自に作成したテキストを元に、手話の単語を一つ一つ教えていく。時々、ゐのはな手話の会発足当時の交流をもっている聾者・鍵富孝氏が会に参加して下さり、その豊富な知識を分けて下さったりもする。

ゐのはな手話の会は発足時からの雰囲気大切に、いつも暖かくアットホームな中でコミュニケーションの大切さを学んでいるのである。その暖かな雰囲気はゐのはな手話の会が誇るべき特徴の一つであり、守るべき伝統であろう。

ところで、ゐのはな手話の会の特徴はもう一つある。それは、イベントの豊富さだ。ゐのはな手話の会では、以下のような年中行事を行っている。

- 4月・5月 新入生歓迎イベント（BBQ、浅草めぐり、ボウリング、新歓コンパなど）
- 6月 ウルトラマンの会との合同交流会
- 7月 八千代医療センターでのBlack Box
- 8月・9月 手話会夏季補習会、夏合宿
- 11月 亥鼻祭でのBlack Box、幹部交代式、秋の温泉旅行
- 12月 クリスマスパーティ
- 1月・2月 追いコン、スキー旅行
- 各月に誕生会

ざっと挙げただけでも、これだけの行事がある。行事には多くのメンバーが参加し和気藹々と交流を深めている。この行事の豊富さは、手話会の持つ「人とのコミュニケーション力を養う場」としての性質が、大いに繁栄されている故だろう。今後は、さらに「ウルトラマンの会」や「サイダーの会」との交流を深める場を作ったり、手話の技術力の向上のため「手話技能検定」の受検なども活動の中に組み込んで行きたいと考えている。

〈むすび〉

医学部135年の歴史の中でゐのはな手話の会の歴史はまだ浅いが、月日を重ねる毎にその活動の規模は広がっている。「来るもの拒まず、去る者追わず」の伝統を守り、緩やかで柔らかい会の雰囲気の中で、多くの医学部生・看護学部生が学部・学年の分け隔てなく和気藹々と活動している。顧問は、安達元明教授のご退官（02年3月）後、環境労働衛生学の能川浩二教授（06年3月ご退官）、現在は分子生体制御学の木村定雄教授である。

活動を通して手話を学びつつ、学生はコミュニケーションの術やその大切さをも貪欲に学び取って

いる。その姿勢は将来、人を相手に医療を行う者達にとって大変重要なことであろう。もちろん手話の技術力を上げることもとても大切な課題だ。だが、ゐのはな手話の会ではそれ以上に人同士の関わりや交流を大切にしている。今後も更に活動を充実させ、会の発展のために尽力したい。

ゐのはな手話の会発足の経緯について執筆するにあたり、渡邊博幸先生（92年卒）、長谷川信也先生（92年卒）、池原甫先生（08年卒）、江藤昌弘氏、鍵富孝氏に多大なるお骨折りを頂いたことに対して、ここに改めて敬意と謝意を表したい。

（えんどう ちづる，えんどう さちこ）

亥鼻バンドサークル

新行内 出

まず千葉大学医学部創立135周年記念誌に文章を載せていただくことを大変光栄に思います。また、135年という千葉大学の歴史の長さに改めて驚くと同時に、自分がそのような歴史ある大学で勉強させていただいている事を誇りに思います。

我々亥鼻バンドサークルは亥鼻キャンパスにおいて、バンド演奏、すなわちポピュラーミュージックの演奏を目的として2008年に設立され、現在15人の部員が在籍しています。活動はそれぞれのバンド毎に自由に練習の曜日を指定し、医学部記念講堂をお借りして練習しています。また、発表の場として亥鼻祭での演奏や、不定期にライブハウスで演奏を行っています。

この部活は設立が2008年と、まだまだ歴史の浅い部活です。2007年、亥鼻祭をきっかけに、学年を超えてバンドを愛するメンバーが集まって手探りで活動を始め、翌年正式に部活として設立されました。私が入学した2007年当時、亥鼻にはバンド演奏をする団体が存在しませんでした。毎年、亥鼻祭のステージでバンド演奏をする人は何人かいたのですが、亥鼻祭直前に集まって練習するだけ、という状況でした。

私は中学・高校とバンド部に所属しバンドでベースを演奏しており、大学では疑いもなくバンドをやるだろうと思っていたのですが、いざ入学してみると、医学部生の多くは亥鼻の部活に入るというのに亥鼻にはバンド部がない。西千葉キャンパスにはバンドのサークルはいくつかありますが、当時の自分には医学部でただひとり西千葉のサークルに乗り込んでいく勇気がなかった。医学部はキャンパスも異なるし異質な存在なのではないか、うまく馴染めないのではないかと無用な心配をしていたのです。悲嘆に暮れた私は、西千葉のサークルに入るのはあきらめ、一時は音楽の道をあきらめたのです。

しかしバンドへの熱意はやまず、2007年の亥鼻祭のステージで演奏をさせていただいた際に知り合った仲間と、亥鼻にバンド部を作ろうと意気投合し、この亥鼻バンドサークルを立ち上げるに至った次第です。

さて、“バンド”と聞いて連想するのがロックを演奏するロックバンドですが、“バンド”とは他にもジャズバンドやブラスバンドも含む概念で、広い意味でのポピュラーミュージックを演奏する集団のことです。我々亥鼻バンドサークルはジャンルを問わず、それぞれが好きな音楽をやろうという理念もっています。

私のような若輩者がロックを語るのは大変僭越ですが、ロックの原型といわれるブルースは19世紀、アメリカの黒人奴隷の間で生まれたと言われていいます。そしてブルースが発展し、いわゆるロックンロールが生まれたのはたかだか60年前くらいで、エルヴィス・プレスリーが活躍した1950年代のことです。（この辺りの事情は私より諸先輩の方が何倍も詳しくご存じのことと思います。）そう考えると千葉大学医学部の135年という歴史の長さが思い知らされます。135年前、まだロックの口の字もない時代だったのです。1870年代、明治初期といえ文明開化によって西洋文化が入ってきて、クラシック音楽などが好まれた時代だったのでしょうか。

しかしながら、この短い歴史の中でロック、およびポピュラーミュージックは著しく進化してきました。様々なジャンルが生まれては消え、また新しい音楽が今も作られ、細かく分けていくと今ではそのジャンルを全て把握するのが非常に困難なほどに様々な音楽が生み出されています。そしてその中には必ずしもバンドを必要としない音楽の形態もあります。しかし、どんなに音楽が変わりどんなに新しい技術が生まれたとしてもポピュラーミュージックがある限り、バンドの形や使われる楽器が変わることがあっても、バンドが消えることはないと思っています。なぜなら、音楽の基本は楽器による演奏であり、実際にギターとベースの弦が、ドラムが、ボーカルの声が空気を震わせた音はどんな最先端のコンピューターが正確に再現した音よりも美しく、人を感動させるからです。バンド演奏には、人を感動させる他の何者にも真似できない力がある。私はそう信じています。

部活の設立にあたりまして顧問の木村定雄教授には大変お世話になりました。右も左もわからない



亥鼻バンドサークル “Live!” @ZX千葉



“The Millefeuille on the stage !”

我々に部活設立への道を示していただき、快く顧問を引き受けてくださいました。また、部活設立に情熱をもって一緒に活動し、苦楽を共にした多くの仲間感謝します。このような素晴らしい部活を作ることができたのは紛れもなく彼ら、彼女らのおかげです。

今の設立メンバーが卒業した後も、この部活が長く繁栄していくことを願っています。そしてたくさんの人に素晴らしい音楽を届け、たくさんの人に愛される部活になることが出来れば幸いです。

(しんぎょううち いずる)

ACLS 研究会

林 洋輔

顧問 救急集中治療医学講座教授
織田成人先生

千葉大学ACLS研究会は2006年度よりサークル認定を受け活動しています。救急集中治療医学講座をはじめ多くの方のご協力のもと現在は年に2回、4～6年生の学生が中心となり勉強会を運営しています。2009年5～8月現在では第22期が終了し、10月からは第23期が始動しようとしています。

サークル認定を受けたのは2006年度からですが、当研究会の母体となった勉強会は2000年に私達の先輩方が立ち上げられています。週刊医学界新聞第2405号（2000年）で第1期の太田さん（当時医学部6年生）は勉強会の立ち上げに際して『医師をめざす動機として、「誰かが目の前で倒れ、助けを必要としている時に適切な処置を行なうことができること」と考えている方は、私も含めかなり多いと思う。卒業し、研修医として医療現場に出ると、すぐさま心肺蘇生の手技が必要であることを、救急病院での実習や研修医との会話の中で何度となく実感した。そのため、大学教育での救急処置の講義・実習に加え、学生が進んでこのような勉強会を行なっていくことはとても有用だと考えられた。』と述べています。それから9年がたった今でも『医師として目の前で倒れた人の命を救えるようになりたい』という思いは研究会に参加する全ての学生に伝えられています。

私達の学んでいるACLSについて、日本ACLS協会ホームページでは『BLSはBasic Life Supportの略で、一次救命処置と訳されるのに対して、ACLSはAdvanced Cardiovascular Life Supportの略で、日本語では二次救命処置と翻訳されます。BLSは人工呼吸、心臓マッサージによる心肺蘇生法からはじまりましたが近年は除細動までもその範疇に入りました。ACLSは気管挿管、薬剤投与といった高度な心肺蘇生法を示しますが、心停止時のみならず重症不整脈、急性冠症候群、急性虚血性脳卒中の初期治療までを網羅したものへと進歩してきています。』と説明されています。千葉大学ではユニット講義やベッドサイドラーニングの中でこのような救命処置について学びます。しかし実際に自らが冷静に的確な治療を行えるかとなると、なかなか自信が持てません。私達の研究会ではこの知識をさらに深め、またスキルアップするために学生が学生に教えるという形を取りながら、トレーニングを積んでいます。

現在は指導側の学生10名と受講する学生10名の計20名で勉強会を行っています。受講した学生は次期の勉強会の際に指導側となり、新しく受講する学生を指導しています。また指導する学生はオリエンテーション、心停止、重症不整脈、急性冠症候群のいずれかを担当し、その回の講義を行っています。このような形を取ることで1度学んだ内容を再度復習するとともに、担当となった講義内容については



詳細な知識を身につけることができます。学生が指導する以上、勉強会のなかでは上手く質問に答えられない場面も多々見られますが、再度調べたり、医師に質問したりしながら次回の勉強会までに解決するようにしています。受け身の勉強ではなく、こうすることでより深く疾患や治療について理解しようと努力しています。

勉強会の内容は基本的には国際蘇生連絡協議会 (ILCOR) により作成された“2005 American Heart Association Guidelines for Cardiopulmonary Resuscitation and Emergency Cardiovascular Care”いわゆるガイドライン2005に基づいて行われています。しかし私達はベッドサイドラーニングなどを通して、実際の現場では命を救うため時にはガイドラインの枠を越えて必要な治療を行っていることを学んでいます。こうした経験をもとに生きた知識を得るため医師に質問し指導を受けながら独自のテキストを作成して勉強会に用いています。毎回の勉強会はこのテキストにもとづいた講義と、その回の講義内容に沿ったケースを設定し実際にシミュレーションを行う実習を行っています。私達は特に後者のシミュレーションを重視していますが、これは1分1秒を争う緊迫した状況の中で時々刻々と変化していく患者の容体に合わせて、よりの確な治療を冷静に判断できるようトレーニングするためです。確かにoff the job trainingであるため、実臨床で使える即戦力のレベルまで到達することはできないでしょうが、救命の現場での判断がいかに難しいかを勉強会のたびに痛感することは学生にとってとても貴重な体験になっています。

私は第20期の代表を務めさせて頂きましたが、同期に恵まれ充実した勉強会を行うことができました。学生同士のため分からないことが多くいろいろな意見を出し合いながら学べたことは、大学での普段の勉強の中ではなかなか味わえないものです。また特に手技に関しては当時4年生の私はほとんど経験がなく、試行錯誤の連続でした。バッグマスク換気や気管挿管などはとても難しく、かなり練習しましたが自信を持って行うにはまだまだ訓練が足りないと感じました。また胸骨圧迫のような基本的なことでも意外と知らないことも多く、本当に正しくできるようになるためには練習が必要です。こうしたACLS研究会でしか体験できない経験は将来必ず役に立つと感じています。

ACLSの知識は将来どの診療科へ進んだとしても役に立ちます。医師として働いていれば、例えば救急や集中治療でない道へ進んだとしても患者が急変する場面に遭遇するでしょう。どのような医師になりたいかは人によって違いさまざまですが、勤務中の病院内での急変や勤務外の日常の中で突然人が倒れた時に『医師として目の前で倒れた人の命を救えるようになりたい』という気持ちはみんなが持っているのではないのでしょうか。

最後になりましたが、救急を志望している方も、そうではないけれど、もしものために経験しておきたい方も、ACLS研究会は歓迎いたします。機会があればぜひ一緒に勉強しましょう。また千葉大学医学部OB、OGの先生方、今後ともより一層のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

(はやし ようすけ)

社会医学研究会

上木 隆人, 武石 恭一, 澤田 貴史, 西 真歩

1970年代初めまで

千葉大学の社会医学研究会（以下、社医研）は1946年3月に結成している。当時、すでに社会医学や社会衛生学が提唱されており、その考え方がふまえられ、全国大学に先立って社会医学研究会を設立した。

1947年4月に雑誌「社会医学」第1号を発刊し、その最初の「主張」では、以下のように述べている。「医学が……自然科学的な分野のみに停滞しているのでは不十分であって、更にその時代に人間を規定する社会的な種々の要素をも含んで対象としなくてはならない。……医療制度、それへの過程に於ける医学教育、更に一般市民の衛生啓蒙等々社会医学の包含する問題は広範である。」

以来、その時々医学の課題を社会的側面からとらえて活動を継続し、「社会医学」発行は13号（1973）までになった。その後社医研活動は休止に到るが、この間常にその時代の社会的側面を捉え、社会医学とは何か、社会医学の実践のあり方を考え、活動を行ってきた。1977年までの具体的な内容については、既に千葉大学医学部八十五年史、及び百周年記念誌に記載されている。

その後活動が休止されるまで、その中心的な内容は長野県下伊那郡阿南町和合（以下、和合地区という）におけるフィールドワークであったが、活動はそればかりではなかった。和合合宿が始まった1960年代においても、寒川町（現千葉市中央区寒川町）に於けるセツルメント活動、五井（現市原市五井）に於ける公害調査（亜硫酸ガス濃度の測定と気道症状調査を中心とした健康カレンダー）と大気汚染対策、成田農村地区活動と農夫症問題、また、これらフィールドワークとは別に医療保障の研究活動、全国医学生ゼミナールへの参加などに取り組んでいた。それぞれの活動には社会医学的な視点を持っていた。農夫症に現れる農民の健康と生活の実態、まだ公害として大気汚染による疾病が認定されない頃の製鉄所周辺地域に於ける健康被害とその実態把握などである。

社医研活動はこれら多くの成果を上げていたが、一方では多くの議論がなされていた。この頃に限ら

ず、それまでの「社会医学」の記録をひもといてみると、社医研活動論、社会医学論が出てくる。それだけ、社会医学とは何か、その方法とは何か、学生活動の限界などを考え続けてきた、社会医学の思想を追求してきた歴史と言える。

1960年代は社医研の歴史の中でも特に多岐に渡って活動を行っていた時代であろう。課題も多数、フィールドも複数持ってもいたが、“健康カレンダー方式”で住民の健康状態を年間を通じて把握し、住民との交流も図りつつ生活実態を掴み、健康との関連を把握してきた方法は客観的にも非常に画期的な事だったと思われる。寒川町と和合地区でこの方法が採られたが、フィールドの近い遠いに関わらず住民との情報交換が続けられていたのは、方法論としても、視点としても住民の生活を踏まえる事が重要と考えたからであった。このことはその後の活動にも大きな影響を与え、多岐に渡った活動は和合地区でのフィールドワークに絞られていく。

1972年から1970年代後半

この頃には4つの大きな活動があった。

第一は、6年間発行されていなかった研究会誌「社会医学」が13号として発行されたことである。60年代後半に揺れ動いた社会情勢、学内情勢の影響が消え去ってはいない1971年から計画が始まり1973年に発行に至った。

「69年を頂点とする大学闘争の中で、観念の嵐が吹き荒れた。正常化の中であって学生は、パトスを個々の内側へと潜行させている様に思われる。13年間続けられ又今年も行う和合活動を、今総括し発表することは、個々の内的営為の吐露となるであろう。」と序文で述べていることに、この13号の意味は言い尽くされているとあっていい。この総括から次にのべる和合での活動の新局面が導き出されてきた。

第二は、和合地区の中核病院である阿南病院での「病院フィールドワーク」の試みであった。病院の協力のもと院内各職種（ランドリー、給食まで含む）まで出向き体験・聞き取りなどを行った。これはその後、病院労組との話し合いなどへもつながっ

ていった。病院存続が勤務医問題だけにされている今日、病院全体を視野に入れるべきであることを提起した、まだ色あせない社医研ならではの活動であったと考えられる。

第三は、「伝承療法・配置薬の調査」であった。和合地区での訪問活動を続けるなか、住民それぞれが自己の健康を守る手立てとして伝承してきている療法を民間療法として切り捨てるのではなく、見直してみることを試みた。配置薬を身近な療法として検討したことは、今、ネット上やコンビニでの薬物販売が社会問題となっていることを先取していたともいえる。「まむし酒」の効用をいきいきと話す和合の人の姿も忘れられない。インフルエンザに対するNSAIDの害が言われる今日、人々が伝える養生法を見直すことも大切であろう。

和合地区での活動をはなれて、第4の活動があった。1974年あのはな祭にて、「現代の疫学～ひとつのケースとして千葉大チフス菌事件をめぐって～」と題してシンポジウムを行った。学びの場でおきた事件を、「疫学」という視点から見直した。検察側と弁護側、それぞれに参加した疫学者を招いてのシンポジウムであった。公害裁判で被害者救済に役立った疫学が刑事裁判ではいかなる役割を担ってしまうのか、浮き彫りにすることが出来た。

1980年代

1970年代終わり頃、活動の中心であった和合地区フィールドワークは、会員数の減少の中で1979年に中止することとなっていた。同時に、会の活動自体が休眠状態となり部会が成立しない状況となっていた。

しかし、1980年に入学した医学部の学生が翌年6人まとまって入部することとなった。医療の社会的な側面について大学教育で触れられる機会が少ないことに飽き足らず、自主的に勉強会を行ううちに社医研のことを知ったためである。それぞれの持っていた関心は、地域医療であったり医療被害や終末期医療など様々であった。しかし、共通していた思いは、「知識の教育ばかりで、医療を担う立場に立てるのだろうか」という疑問であった。部室で「社会医学」や活動の報告などを読みあさるうちに私たちの先輩たちも同じような悩みを持ちながら活動していたことを知り和合でのフィールドワークへの関心が高まっていった。低下していた社医研活動は次第に取り戻され、活動の中心はやはり長野県下伊那郡和合地区のフィールドワークが取り上げられた。翌

1981年早々にフィールドである和合地区の診療所医師であり千葉大学農山村医学研究施設講師である金子先生を訪問し、フィールドワークの再開をお願いした。2年間とはいえ一旦中断した活動の受け入れを再開することは容易なことではなかっただろう。しかし、金子先生は再開を歓迎してくださり、こうして社会医学研究会と和合フィールドワークが復活を遂げることになった。

中断前の活動に習い、和合の各世帯を血圧計と検尿を持って一軒一軒訪問する活動が行われた。最初は、住民の健康管理のお手伝いをしていると考えていた私たち学生が、実は立場が逆であることに気づくには時間がかからなかった。地域の住民たちから医療への様々な思いを聞くことは、私たちが将来医療従事者として働くための大きな糧となった。それがこれまでの社医研活動の一つの視点である、生活も踏まえて考えるという視点につながっていたと思う。和合の地域の高齢者たちは、私たちが歓迎、励まし、医療者としてどんな資質が必要なのかを私たちに伝えようとしていた。「昔膝の痛みで診てもらった医者に、年のせいだから仕方ない、いくつまで生きるの?といわれて悔しい思いをした。」と心ない医者の言葉をたしなめる老女。老々介護をする60代の女性は、岩波の「世界」を手に世界情勢を語り、食材を買いに行ったお店の女主人からは、「医者人は人を助けるために社会変革をせないかんよ」と優しく諭された。私たちがみる病気の後ろに、それぞれの人に尊い人生の歴史があり、人々の生活の重みを感じることなく医療は実践できないことを気付かされた。また、地域の住民こそが私たちに医療の在り方を教える一番の師であることを悟らされた。こうして和合でのフィールドワークの参加希望者は年々増加を続け、医学部・看護学部・看護学校の学生を合わせて念願の全戸訪問も実現するようになった。

和合のフィールドワークから学んだものは、地域の住民によりそい医療を行いつつ社会への働きかけを続ける金子先生から学んだものが多く、住民自身が医療の中心であるという視点をもつことの大事さを感じさせられた。

フィールドワーク以外では、社会で取り上げられる医療問題について学習会を始めていた。また、会員の関心は拡大を続け、身体障害者の自立ホームに支援者として通い始めるもの、海外への医療協力に関心を持つ者などさまざま、それらの問題が部会の話題に持ち込まれた。社医研の活動の活性化とともに医療問題に関心を持つ学生たちの輪が広がり、他の医療系サークルも次々に活動再開していった。

第5章 交友の広がり

更に、世界の医療を考える会のように社医研に集まった学生の一部が新しい医療系サークルを立ち上げるということもあった。こうした医療系サークルの復興は、当時学生自治会が取り組んでいた、新入生向けの医療や福祉の現場への体験学習も活性化することになったように思う。

和合地区フィールドワークを含むこうした社医研活動の根底にあったのは、医療者として卒業働く自分たちの責任の重さへの畏れと住民の立場に立った医療者になりたいという思いであり、そのための考え方や視点の形成であったと考えている。

1980年代終わりから活動休止（1994年頃）まで

1988年頃からは再び実働会員が減少し、一緒に活動してくれる仲間を増やすことが大きな課題であったので、「社会医学研究会」を紹介する方法を検討した。新入生からは活動内容がわかりやすく具体的であることが求められ、和合フィールドワークの活動を前面に出して紹介していた。また、卒業生が働いている現場の見学や、「社会医学」の話題を提供する勉強会などの新入生企画を行なった。政治的な活動がその言葉だけで過度に避けられる傾向もあり、「社会医学研究会」という名前から活動を誤解する学生もあったため、別の名前にすることについても話し合った。しかし、前出の雑誌「社会医学」第1号に掲げられた「社会医学」への思いを受け継ぎたいと考え、「社会医学研究会」として活動を継続した。

当時の活動は、会員の減少もあり和合フィールドワークが主体になっていた。フィールドワークは1981年の再開からの内容を引き継ぎ、全戸訪問による聞き取り調査を中心に行なった。調査のテーマは会員の関心を反映して、公衆衛生学的な問題から、和合の方々の生活や医療・保健に対する考えをより深く理解するためのテーマに比重が移っていた。再開から10年が経過した1990年代初め頃、会員の中で和合の方々の立場から私達の活動を検証すべきであるという反省が出された。それまでにも同様な議論は繰り返し行なわれ、フィールドワークによって学生が地域から学ぶものは多いが、地域に還元できる自分達の成果がどれだけあるのかと振り返らざるを

得ず、学生によるフィールドワークの限界を認識することとなった。しかし、私たちは和合地区というフィールドの中で、住民生活の中に於ける健康問題とその社会医学的背景を考え、そこから単に公衆衛生学的な成果だけではなく、人が地域社会の中で生計を立て、生活していく多様なあり方を理解することが、人の健康や疾病予防・治療を考えていく上で如何に大切かと言うことを学んだ。活動論にはまとまりが付けられなかったが、この学生活動論は社医研の発足当初から抱えてきた基本的課題であろう。この学びと悩みの中に根本的な活動論があるように思う。

和合地区は徐々に変化して人口の減少、高齢化が進んだ。農業、林業は高齢化、収入面で維持が難しくなっている状況は学び取ることが出来た。過疎、高齢化や第一次産業の問題について目前の課題と感じられたが、まず医療者となる自分達がどうとらえ、行動することが必要かを考えた。地域が変化しても地域住民にとっては長年生活してきた家、土地、地域はかけがえのないものであり、病気や障害を得ても、住民がそれぞれの生活を続けるための補助となるような医療活動を行なうことを目標とした。

一方、社医研会員は少なくとも、和合フィールドワークに関心を持ち和合での活動のみ参加するメンバーは増加していたので、積極的に勧誘してフィールドワークに協力を得ていた。彼らは和合の方々にも温かく迎えていただいた。彼らの「社会医学」や地域の医療・保健・福祉の問題に対する関心は、参加後広がったと思われる。しかし、運営面を担う会員は確実に減少して活動の維持が困難となった。医学部の会員が減って看護学部の会員の割合が多くなり看護の視点を生かした活動が展開された。

和合フィールドワークは1994年が最後となり、その後会としての活動も休止となった。第二次大戦後間もない時代に発足した社会医学研究会の「社会医学」の視点・考え方は今や医学・公衆衛生の社会的視点として位置づけられてきている部分もあるが、今も尚医学医療のあるべき姿を考える際には必要な考え方・視点としての役割は存続していると思う。

（うえき たかと、たけいし きょういち
さわだ たかし、にし まゆみ）

小 象 の 会

金塚 東

「小象の会」の活動 — 「社会医学研究会」から学んだこと —

はじめに

千葉大学医学部85年史を見ると、昭和21年に「社会医学研究会（社医研）」は誕生したと記されています。“最悪の状態にあった社会ならびに衛生環境をまざまざと見、体験した医学生の一部は、その改善策を憂慮し、併せて、医学、医療、医師のあり方、医学生の進み方を再検討すべき”と相集い、週1回の例会をもち討論したのを社医研の発祥としています。そして“思想にこだわらず、良心の命ずる所に従い、荒れ果てた社会に少しでも何かの役に立つならばという気持ちを結集し”立ち向かったとあります。

私が千葉大学へ入学した昭和42年当時、ベトナム戦争による悲惨な状況が毎日のように新聞、テレビで伝えられていました。米国やフランスを中心に、世界的な規模で青年による反戦と既成の社会体制に対する反発がありました。そんな状況が反映されて、日本でも大学紛争が巻き起こり、千葉大学も例外ではありませんでした。特に医学部では、インターン制度と青医連問題があり、全国的に医学部紛争が起りましたが、千葉大学医学部においては“二内科紛争”も絡み、多くの学生や若年医師が不安定な日々を送ることになりました。私も不安定な日々を送る医学進学課程の時期に、梶尾高根先生から勧められ社医研に入会しました。しかし、85年史に見られる学生の気概に乏しい私は社医研の活動を疎かにして、大学紛争そして、その後日々の学生生活へ埋没していきました。そのような私に、数少ない社医研の活動で記憶に残るのが、「長野県伊那郡阿南町における活動」です。

長野県伊那郡阿南町における活動の記憶

同地区は、山村へき地であり、過疎化の著しい地でした。調査活動の内容は当100周年記念誌に詳細が述べられ、“長野県伊那郡阿南町における和合地区を中心にした社医研活動の概要”として一覧表にまとめられています。1961年から活動が開始され、

保健・医療・社会保障の実態調査に始まり、食生活に関する問題の掘り下げ、更に老人問題、地域保健医療にまでその活動を進められたことが記録されています。私が参加した時期には、青年会との交流・学習、部落懇談会、診療所後援会との懇談、婦人会との話し合い、子ども会との交流等々を合宿して行うものでした。具体的な内容、成果については、大変恥ずかしい限りですが殆んど記憶にありません。診療所の先生と夜遅くまで、内容は覚えていませんが、車座になって話し合ったこと、そして子どもたちと山間の校庭で走ったり、ボールを蹴ったりして遊んだ記憶だけが残っています。

保健・医療・社会保障に関する問題、食生活の問題、老人の問題は、40年以上を経た今日において、また一山村へき地を超え国レベルにおいて極めて重要な課題であることは、現在ならば周知の事実です。住民と共に取り組み、実践した中から提起されたが故に、その内容が時代とともに変遷したとはいえ時代を超えた、また地域を越えた普遍的な問題を課題として捉えることができたと思えます。社医研で積極的に活動された諸先輩の先生方に脱帽する次第です。そして、私の中に、個々の活動についての記憶が失せても、“医療に関する諸問題を解決するには住民との対話の重要性、必要性”が脳髓の奥深くに記憶されることになりました。

糖尿病の診療を経験して

大学を卒業後、第二内科に入局し糖尿病を専攻、診療と臨床研究の日々を送ってきました。来院する患者の診療に従事し、糖尿病学の著しい進歩に興味を持ち、最新の診療と研究に心を砕いてきました。しかし、糖尿病患者は年々増加し、“糖尿病は国民病”とまで言われる憂慮すべき事態となってきました。更に血液透析の第1位の原因疾患が糖尿病腎症となり、虚血性心疾患の最大の危険因子が糖尿病であることも明らかにされました。糖尿病学の進歩のみでは、また病院内での診療のみでは糖尿病の発症、進展を、そして合併症を抑制できないことは明白でした。そんな思いでいたある日、医局の後輩、篠宮医師（千葉大学50年卒業）から、小児の肥満・

第5章 交友の広がり

糖尿病患者が増大していること、何らかの方策を講じないと将来大変な社会問題になるだろうとの警告を聞かされました。

学生時代に体験した社医研での活動で脳髓の奥深くに記憶された意識、“医療に関する諸問題を解決するには住民との対話の重要性、必要性”が蘇えたのか？篠宮医師をはじめ後輩医師達と共に、知り合いになった市民の方々にも呼びかけて「NPO法人生活習慣病防止に取り組む市民と医療者の会（愛称 小象の会）」を設立しました。

NPO法人 生活習慣病防止に取り組む市民と医療者の会（愛称 小象の会）

2005年6月に同会を設立し、同年9月に千葉県よりNPO法人として認証されました。以下は、“小象の会”が発行する会報誌の創刊号に、私が寄稿した“小象の会 発足にあたって”と題した文章の一部です。

生活習慣病を抑制するために“生活スタイル”を改善する必要があります。しかし、医療者のみでこれを実現することは不可能です。例えば、小児期の食事や身体の問題は将来の糖尿病の発病に大きく係わるでしょう。子どもの本来あるべき生活スタイルとは、3度の食事をし、学校で勉強し、戸外で遊びあるいは部活動で汗を流し、夜は疲れて早く寝ることです。現代社会の諸々が子供からこれらを奪っているのです。小児肥満は“現代社会の生活スタイル”を如実に示した社会現象です。成人も同様に本来あるべき生活スタイルの多くが奪われているのではないのでしょうか。医療が、学校が、地域社会が、企業が、マスコミが、行政が、即ち社会全体が力を合わせなければ解決できない難問題です。しかしこの問題を解決しない限り肥満と糖尿病は増加し続けます。「小象の会」の愛称は、子供が本来あるべき生活スタイルを取り戻し、健康に成長することを願ってつけられました。

現在、会員数は262名で、千葉県内医療施設と企業を含めた21団体と241名の個人会員が参加しています。個人会員のうち、医療者138名で、医師が78名です。医師の多くが、千葉大学出身で、多くの先輩諸先生方そして後輩医師が参加して活動をしています。“小象の会”の活動について、簡単に紹介します。私たちが発足以来、活動の基本としてきた姿勢です。

1. 市民と医療者が相互に交流し、関連団体と連携する。
2. 実績を生かしながら、常に新しい活動を新しいやり方で進める。
3. 他の類似団体では出来ない活動をする（本会の特長を發揮し、それを積極的に発信する）。

即ち、市民と医療者が、生活習慣病を抑制するために交流し、模索しながら、私たちでなければ出来ないことを実践していくことです。

この基本姿勢のもとに進めてきた活動内容は次の通りです。

1. 調査及び情報の収集・提供事業として、会報誌の発行、ホームページによる健康に関連した情報の提供、そして高校生生活習慣病健診の実施です。
2. 講演会・セミナー・イベントの企画及び開催事業として、“小象の会フォーラム”の開催、児童・生徒への講話、ロッテ球団との連携による啓発活動、出前講演の実施です。
3. 関連団体との連携・協力事業を推進します。

これらの内から主な活動について紹介します。

“小象の会フォーラム”の開催：2006年春に第1回フォーラムを“フードファディズム”をテーマとして開催して以来、毎年春と秋に開催してきました。医療者が一方的にテーマや演者を決定するのではなく、市民が希望するテーマと医療者が必要と思える意見を出し合い、テーマを決め実施してきました。“スローフード”、“心の健康”、“咬合・咀嚼と健康”等々をテーマに第7回まで開催してきました。今後も、生活習慣病を抑制するために必要な内容をテーマとして開催していきます。

児童・生徒への講話：“現代社会の諸々が子供からこれらを奪っているのです。小児肥満は“現代社会の生活スタイル”を如実に示した社会現象です。”と記しましたが、児童・生徒たちに“あなた達はすばらしい身体・脳を持って生まれてきた！（心臓は1回に80mlの血液を送り出し、1日で8トンになります。全身の血管をつなぐと10万km、地球を2回半する距離です。大脳細胞は140億個 1秒に1個づつ数えると1日で8万個 1年で3千万個 全部数えるのに444年かかります。等々を語る）”を伝え“すばらしい身体・脳を大事にしよう！！！”とのメッセージを送ります。篠宮医師を中心に医師達が頑張っています。

ロッテ球団との連携による啓発活動：千葉ロッテマリーンズの試合には多くの観客が観戦します。児

童・生徒たちとそのお父さんやお母さん，若者グループに健康メッセージを伝えることの重要性を球団側もよく理解してくれました。2007年秋から，バックスクリーンに“小象からのメッセージ”を試合開始前と試合の合間に映します。“肥満や糖尿病が増えてるよ！いろいろな病気の原因になるから気をつけよう。朝飯食べて，スナック控えめにしよう。外で元気に遊ぼう。早寝早起きしよう”と伝えます。また，球場前に張られたテントで，血圧，体重・血糖を測定し，呼吸機能や筋力検査を実施しています。高血圧や糖尿病の若者が散見されます。“喫煙しているので心配だから呼吸機能検査を受けたい”若い女性がいるのに愕然とします。父親向け，お母さん向け，若者向け等のパンフレットを配って，健康の大切さ，生活習慣の大切さを喚起しています。

高校生の生活習慣病健診：厚生労働省の班研究として企画され，その実施に小象の会は，篠宮医師と栗林医師（千葉大学55年卒業）達を中心に積極的に参加しました。健診実人数が1306名，その内千葉県で728名と半数以上でした。“1. 高校生の生活習慣病に関するデータを評価する。2. 生活習慣病の診断基準を作成する。3. 生活習慣病一次予防のための提言をまとめる。”を目的に実施されました。約45%の高校生で，肥満，高血圧，異常脂肪血症，高血糖のいずれかを持っていることが判明し，驚くべき結果でした。動脈硬化症は10代から発症することが知られていますが，今後ますます増加することが予測され，対策が急務に思えます。また，これらの防止に運動（運動部での活動）と食事（朝食の摂取）が重要であることも判明しました。

これらの他に，多くの健康フェア，例えば“ふなばし子育て応援メッセ”“船橋健康祭り”“わくわく健康づくりプロジェクト”，“ヤクルト健康教室”等に参加し健康キャンペーンや出前講演を実施してきました。また，他の団体，特に「日本糖尿病協会千葉県支部」の活動，“青葉の森ウォークラリー”や“千葉県民の糖尿病教室”を積極的に支援しています。（財）千葉市保健医療事業団が進める「新世紀ちば健康プラン推進協議会」に参加し，行政との関わりも大事にしています。

「社医研」から「小象の会」へ

「社医研」は，約半世紀前に，“最悪の状態にあった社会ならびに衛生環境をまざまざと見，体験し

た”医学生の一部が集い，そして，“良心の命ずる所に従い，荒れ果てた社会”に立ち向かった。その実践は，“住民の要求の実現やそのための住民運動に，学生としていかに住民と連帯し協力し得るか”を念頭に進められました。若くして立ち上がった先輩たちの気概と活動に，そしてその後を立派に継いだ後輩の方々に敬服するばかりです。吉田亮先生，渡辺武先生や佐久間光史先生を始め多くの「社医研」で活躍された先生方がご自身の医学，医療活動の中で「社医研」の精神，実績をさらに発展させられました。また，後輩の方々が行政で，研究施設で同様に奮闘されています。

私も，医学，医療の進歩と社会への貢献は病院内の診療や研究施設内での研究だけで達成されるものでないこと，「社医研」の精神が必要であることを遅ればせながら知りました。臨床医として，また医科学者として Evidence-based Medicine を基本に思考し，診療することが大切です。と同時に，市民の声を聞きながら，社会の問題に正面から取り組むことの大切さを思い起こしました。「小象の会」の活動は，「社医研」が歩んできた道程，“住民とともに取り組む実践”を現代社会に置き換えていることです。脳髓の奥深くに記憶した“医療に関する諸問題を解決するには市民との対話の重要性，必要性”を強く意識に甦らせさせたものです。

おわりに

「記念誌出版委員会」と佐久間光史先生から，135周年記念誌の原稿を依頼された際，先生にお断りのお手紙をいたしました。私は，学生時代に「社医研」の活動に積極的に関わりませんでした。また，卒業後，後輩の面倒をみて，その後の「社医研」の発展に何ら貢献することはありませんでした。その様な私に執筆の資格は無いものと思ったからです。今でもその気持ちに変わりはありません。しかし，「小象の会」の活動，脳髓の奥深くに記憶した「社医研」の精神を具現した活動の紹介でよろしければお受けいたしますと返答しました。先生の是非にどのお言葉に背中を押され執筆した次第です。「社医研」の精神は全ての医師にとって必要であり，多くの医療の問題を解決する道に繋がると確信します。私も「社医研」の精神を持って日々の診療とともに「小象の会」の活動を更に進めていきたいと思えます。

（かなつか あづま）

樹 徳 会

仲野 公一

はじめに

千葉大学医学部樹徳会は、もともと仏教による人間形成を目指す学生および学内外の有志の集まりであった。昭和29年に公衆衛生学の柳沢利喜雄教授を会長として、静坐会、公開講演会等の活動を再開し、少なくとも3回目の樹徳会の復活がなされた。昭和33年に学生サークルとして正式に発足したが、学生サークルとしての樹徳会の歴史を顧みると、極めて盛んに活動をしている時期と、学生がほとんどいなくなり、OBが中心になり会を切り盛りし難局を乗り切った時期が繰り返されている。熱心な学生のもとたくさんの会員が集まり活発な活動を展開する時期もあるが、その後会員がわずかになると熱心なOBが卒業後も会の運営に携わり、数年に1人現れる熱心な学生にバトンをつないで、会としての命脈がかるうじて保たれてきた。千葉大学創立135周年にあたり、これまでの樹徳会の歴史を留め直すこととする。過去の記念誌に残されている100周年までの流れの概略を辿り、特に千葉大学創立100周年以後についてまとめることとする。昭和33年以前は、会の責任者は医学部の教官であり、会長と呼称されていた。それ以降は、学生が会長となり、教官が顧問となって現在に至っている。

創立100周年までの流れ

明治年間に仏教の教えを医療現場に生かすための勉強会として発足したとされる樹徳会は、学生および学内外の有志の集まりがもともとの母体であり、千葉大学内でも極めて長い歴史を持つ会である。大正15年に樹徳会の再興が諮られた記録があり、それ以前に会として存在していたことがうかがわれる。時代ごとに影響を受けた仏教の流派は異なるが、浄土真宗や禅宗の宗教家らによる指導を受け、人間味豊かな医師としての人間形成を目指してきた。会の主体は医学部の教官であったり、医学部の学生であったりし、通常の学生サークルとは異なる面を持っていた。昭和7年には、柳沢利喜雄（昭和5年卒）らの働きにより、禅との結びつきが強まった。第二次大戦前後は、衛生学の谷川久治教授が会長と

なり、何とか燈を守り続けた。昭和28年に千葉大学に戻った柳沢利喜雄教授が、翌年会長を引き継いだ。当時は曹洞宗の師家を招いて修禅会（坐禅を中心に据えた合宿）を開催し、年に2～3回の公開講演会を催していた。この頃、学内外から一般参加者が多数集まった。運営には樹徳会の先輩方が集まり、大いに会を盛り上げた。昭和33年に榎本勝之（昭和34年卒）らの努力によって、学生自治会のサークルとして承認を受けた。

医療に携わる者として、人生とは畢竟何なのか、生きているとはどういうことなのか、死んだらどうなるのか、などの根源的な問題について、自分自身の納得の行く解決を求めるために、仏教ならびに東洋的文化に問題解決の端緒を探った。しかし、表面的に他から教わることや書物で知ることでは根本的な解決を得られることはなく、禅による心底からの納得が第一義と解されるようになった。当時から禅による修行を最優先として、茶道、俳句、料理等を主な活動にしている。すべての行事は、学内はもちろん、一般市民にも門戸を開いて、多数の人々が訪れている。昭和36年には、千葉大学西千葉キャンパスに、人文学部倫理学講座の白田貴郎教授を顧問とする千葉大学禅の会が誕生した。医学部生を中心とした樹徳会とその他の学部生による禅の会が、お互いの会に参加しあい、盛んに活動していた。昭和46年に農村医学教室の内田昭夫教授が顧問を引き継いだ。

昭和50年代の活動

顧問は内田昭夫教授、会長は和田二郎（昭和53年卒）、近藤福雄（昭和54年卒）、粒良幸正（昭和57年卒）、木村直弘（昭和61年卒）と引き継がれた。

昭和46年12月に内田昭夫教授が、妻ふき氏とともに四街道の自宅を開放し、学生と寝食を共にする坐禅塾「総北五葉塾」を開設した。最初の入塾者は大友一夫（昭和46年卒）であり、その後も和田二郎、近藤福雄ら多数の樹徳会会員が入塾し、学生寮としての役割も担った。週に1日だけ宿泊する外泊塾生の制度もあり、医学部生だけではなく、看護学部生やその他の学部生も参加し、極めて強い結びつきの

中、活発な活動を続けた。内田教授が老人施設に入られた後、この施設は御好意で、「四街道坐禅塾」として一般に公開され、研修所として現在も存続している。

木更津市で眼科・東洋医学研究所を開院していた小倉重成（昭和17年卒）は、千葉大学附属病院での東洋医学公開講座を長年担当し、また、年に1回木更津の地で3泊4日の坐禅会を開催し、学生やOBの指導に当たった。医院および自宅を開放し会場とする一方で、持論の玄米と豆類による食事療法を取り入れた治療法の実践は、現代医療では対応できない難病の治療に効果があった。東洋医学の教えを最後に受けたのが現呼吸器内科巽浩一郎教授（昭和54年卒）である。平成22年に退官された東洋医学講座寺澤捷年教授（昭和45年卒）は、小倉重成の甥であり、昭和40年代前半の樹徳会中興の祖と言われた人物であった。

この頃から極めて学生サークルらしい運営が行われるようになった。昼休みの公開静坐会、月1回の同窓会館で実施された土日一泊静坐会、年に数回の修禅会、坐禅会、観話会、茶会等が行われ、多くの人が東洋的文化に触れ、仏教の機縁に触れる機会を持った。

毎年4月に開催される学生自治会主催の医学部サークル紹介で、木村直弘が登壇して行う勧誘演説「君は最高にうまいラーメンを食ったことがあるか」は、新入生の度肝を抜く名演説で、樹徳会の名を知らしめるには十分な内容であった。11月に開催される亥鼻祭では、例年サークル会館の部室でお茶会「喫茶去」を開催した。

昭和60年以後の10年間

樹徳会の顧問は平成5年からは、歯科口腔外科の佐藤研一教授、平成8年は精神科の佐藤甫夫教授、平成9年から耳鼻咽喉科の仲野公一講師と引き継がれた。

会長は仲野公一（昭和63年卒）、坂下美彦（平成3年卒）、今井直樹（平成3年卒）と引き継がれた。

主な活動は、週1回の部会、週5回の早朝静坐会、6月の新人歓迎静坐会、8月の他大学と共催で実施した夏季学生修禅会、夏合宿、亥鼻祭でのお茶会・静坐会、12月のOB会、3月の追い出し静坐会等であった。毎朝7時からの早朝静坐会では、部室・階段の清掃の後、打ち水をして皆で45分間の坐禅をした。この会には、医学部売店の今井さんも参

加され、その他の一般参加者も時折見られた。静坐の後にはお茶会、朝粥会が開催され、その後授業に向かう熱心な学生が多数参加した。週に1回の部会では、17:30からの坐禅、読書会、食事会をサークル会館の部室で開催した。ときどきOBと共に居酒屋へ繰り出し、人生如何に生きべきかについて、とことん議論しあった。千葉大学人文学部名誉教授白田貴郎先生の著書「東洋的無」の読書会は半年間にわたり継続され、その終了記念に著者の白田先生にお出で頂き、昭和62年2月に同窓会館で盛大な読書会を開催した。その折に先生から示された「立身行道」のお言葉は、医師としてしっかりと身を立てた上で、禅の修行を通して一生人間形成に努めるよう策励され、皆の座右の銘となった。夏季休暇中には、千葉大学樹徳会、禅の会だけではなく、同様の学生サークルである中央大学五葉会、早稲田大学清風会と共催で夏季学生修禅会を開催した。医学部生の多い千葉大、法学部生が中心の中央大、教育関係の学生が多い早稲田大と多様なメンバーが集い、禅の修行を通してお互いを理解しあい、医学部内では経験できない多様な文化にも接する機会が持てた。卒業後には、それらのOBはそれぞれ医師、法曹関係者、教育者として世に出ていき、その後のつながりは極めて密で、仕事上の問題にも大いに力を貸してもらえ、学生時代の御縁に感謝すること大である。その他、北海道大学絶学会、熊本大学五葉会、岐阜教育大学禅の会、名古屋大学にも禅の会が新たに出来て、夏季学生修禅会に参加するサークルが全国から集まるようになった。学部は異なるが、全国に禅を生活の基盤に据え、勉学に仕事に打ち込んでいる仲間が多数いることは本当に心強いことである。

看護学部の女性会員を主に、「有楽流」茶道の稽古も熱心に行われた。禅の会のOB佐藤米子（教育学部昭和44年卒、有楽流師範佐藤妙水）による武家流の作法「有楽流」の茶道が伝授され、牧田淑美（看護学部昭和58年卒）、曾我恵子（看護学部昭和63年卒）等が、熱心に稽古に参加した。有楽流は、織田信長の実弟織田有楽斎が始めた流派で、簡潔・合理性をモットーとする茶道であり、忙しい日常臨床の中にも一服の抹茶を頂く心の余裕と、その直後に臨床に没頭する切り替えの速さを身につけるには最適な流派と思われる。

禅の会に在籍する文学部の学生を中心として、俳句会も開催された。同窓会館で開催された平成2年12月の徹宵静坐会後の俳句会で、原田淳（法経学部平成5年卒）作「水滴の窓越しに見る オリオン座」

第5章 交友の広がり

は名句として永く会員の間評判であった。

各地のOBを訪ねての合宿静坐会も数回開催された。平成2年には、禅の会のOB小林孝年（工学部昭和49年卒）の計らいで、熱海海岸の名刹「長谷観音」で2泊3日の合宿を開催した。また、平成3年および4年には栃木の仲野公一の実家で合宿を開催した。平成3年の俳句会の第一席が仲野公一の「この街に 法燈ともさん 一炷香」であった。

昭和61年11月のOB会一泊静坐会は、柳沢利喜雄名誉教授、現在の法医学教室の岩瀬博太郎教授の御尊父岩瀬秀一（昭和35年卒）、東京女子医大内科教授林直諒（昭和38年卒）、富山医科薬科大和漢診療部教授の寺澤捷年、千葉県リハビリセンター精神科部長太田東吾（昭和43年卒）等が参加し、盛会であった。会の終了に当たり、樹徳会の末永い活動を皆で誓い合った。

平成7年以降

平成15年から耳鼻咽喉科の岡本美孝教授が顧問を引き継がれ、現在に至っている。会長は花岡大資（平成15年卒）、土合昌巳（平成23年卒）と引き継がれた。主だった医学部、看護学部の学生が卒業し、学内外の参加者も退職、高齢化で参加できなくなり、会の活動はかなり限られたものとなってきた。

平成7年のオウム真理教の事件以後、学生やその父兄から宗教的な雰囲気のあるサークルは敬遠されるようになってしまった。会員の中に、たまたま在

学中に体調を崩し、卒業が遅れてしまった者がいたが、そのことが誤解を招き、樹徳会に所属していたから卒業が遅れたとの悪評が流布された。実情は全く逆で、劣等感で学業を断念した者を何とか支えて復学させ、卒業まで伴に歩んできたのである。学生有志の意見を尊重し、平成22年6月に樹徳会は休会届を提出し、現在医学部学生による活動はされていない。平成23年からは、学生自治会の理解のもと、OBによる静座会をサークル会館2階の樹徳会の部室で時折実施している。今回の創立135周年事業の一環として進んでいる新同窓会館建設の募金では、OBを中心に樹徳会に御縁のあった方たちから多額の寄付をお寄せいただいている。

千葉大学医学部内に存在する樹徳会の精神は途切れることなく、仮に学生サークルとしての命脈が一旦絶たれたとしても、過去においてそうであったように、医学部内にある学内外の有志による勉強会として、今後も活動を続けていくことには間違いのない。そして、必ずや医師としての人間形成の実践を禅に求める学生が出現するときに、再度学生サークルとしての復活を遂げることを確信している。それまでの間、顧問の耳鼻咽喉科岡本美孝教授、樹徳会OB会会長柳沢健一郎（元厚生省局長）、副会長近藤福雄（帝京大学病理学教授）、幹事仲野公一（耳鼻咽喉科なかのクリニック院長）を中心としたメンバーで樹徳会の燈を護持していきたい。

（なかの こういち）

世界の医療を考える会

青木 勉, 菊地 泰基

世界の医療を考える会の創設期について

私たちが、世界の医療を考える会を創設したのは、1985年でした。母体は、社会医学研究会の複数のメンバーと、その友人たちです。社会医学研究会では、主として長野県阿南町和合をフィールドとして地域医療について研究していましたが、「国際医療協力を目指して医学部に入った」「マザーテレサに憧れて看護学校に入った」と世界に視野を広げている仲間が集まりました。当時は全国的に見てもまだ、国際医療協力を標榜する部活は珍しく、クラブ活動になるとは思っていませんでしたが、千葉大学内は医学部、看護学部、看護学校、そして学外では日赤看護大学からも次々に関心を持つ学生が集まり、定期的に勉強会が始まりました。『Where There Is No Doctor』というプライマリヘルスケアの本を皆で翻訳して、徹夜で印刷製本したり、その本に記載されていた簡易トイレをサークル会館の横に作ったりと、精力的にそして和気あいあいと活動を続けました。

次第に、学生として海外で国際協力をしてみたいという機運が高まり、千葉大学の先輩で、当時フィリピンで医療協力をされていた星野邦夫先生に連絡をしたところ、快く受け入れて下さり、1987年夏、同級生4人とともに初めてフィリピンを訪れました。現地の小児科医やライオンズクラブの方々から歓迎を受け、巡回診療に同行させて頂き、フィリピンの医学部生とも交流を持ちながら、星野先生がなさっている国際医療協力を見聞することが出来、本当に多くのことを学ぶことが出来ました。また、あまりの富の偏在ぶりに愕然として、自分たちの目指す医療の公平性をどのように達成するべきなのかという強い疑問を持ちました。翌年から星野先生のご支援と千葉大学医学部細菌学教室、寄生虫学教室、公衆衛生学教室の先生方のご指導により、公衆衛生の実習をかねて、小児下痢症の研究をフィリピンの州立病院を中心に行いました。フィリピンの農村を部員皆で回って、集めた子どもの下痢の検体を、千葉大学附属病院から持って行った培地で培養し、原因菌の特定を行いました。公衆衛生の発表会には、フィリピンから帰国していた星野先生が参加して下

さり講評までいただき、大変感激しました。そして、この活動はプロジェクトとなり、その後も後輩達に引き継がれました。

私は、当時から精神科に興味をもっていましたが、下痢はフィリピンの死因の第6位で、私たちの日本の6位は自殺であったことが、非常に驚きでした。医療にアクセスすることが経済的な問題で出来ず、下痢で幼い命を落としてしまう国と、心理的な問題で自らの命を自らの手で絶たざるをえない国、異なる国の共通する病理を肌で感じ、悩んだ経験が現在の診療の原点ではないかと思います。千葉県の北東部に位置する総合病院精神科で、救急や外来にお見えになる多くの患者様と触れるとき、私たちが抱える「貧しさ」をどのように克服していくべきなのかを直面させられ、「世界の医療を考える会」創設期の自分との邂逅を経験しています。また、診療の傍ら、NPO活動を通じて、カンボジアでデイホスピタルや診療等の国際精神保健協力を行っています。が、「世界の医療を考える会」での経験と知識が、大変役に立っています。当時ご指導いただいた多くの先輩方や先生方、そして共に活動した仲間たちに、この場をお借りして御礼申し上げます。そして、「世界の医療を考える会」の益々のご発展とご活躍を祈念して、筆を置きたいと思います。

(あおき つとむ)

世界の医療を考える会の今

私が青木先生の創設なさった世界の医療を考える会に入部したのは、今から4年前の1年生の時でした。入学式の部活紹介で、「安く留学できます！」というのを聞いて、海外に行ってみたいと思っていた私は、友達を誘って説明会に行ったのを覚えています。説明会は説明会というほどではなく、綺麗とは言えない部室で、国際医学生連盟 日本（以下IFMSA）を通して安く留学できるということだけの説明でした。8万+渡航費で留学に行けると聞き、海外で生活してみたかった私は、迷わず入部しました。その頃、世界医療での活動といえば、主だったものは留学だけで、後は、個々の活動に任されて

第5章 交友の広がり

いました。それは世界医療がサークルであり、IFMSAの内部で活躍しているものや、別の団体に所属しているもの、他大学と交流して色々なことをやっているもの、一方で何もしていないものなど様々な人間で構成されていることも一つの要因だと思います。

現在の世界医療では、他の部と兼部しているものが多いこともあり、代表を2年生で務めます。私も2年生のときに世界医療の代表を務めました。代表といっても仕事と言えば、4月の部活紹介でのサークルの説明、新歓コンパと追い出しコンパのセッティングをするくらいでしたが、前の代表から何も引き継がれなかった私は、意外と大変だったのを覚えています。特に1年生のうちは何も活動をしていなかったもので、活動内容も全くわからずに臨んだ部活紹介では、スライドが使えないというアクシデントもあり、散々だったことは今でも忘れられません。こうして始まった代表の年でしたが、この年は世界医療としての活動も少し増えた年でもありました。まず、現在6年生の先輩により、初めて千葉大単独で行われたぬいぐるみ病院。ぬいぐるみ病院とは、幼稚園児を対象としたもので、園児の病院嫌いの克服と医学生が簡単な言葉で園児に診察するスキルを身に付けることを目的とした活動であり、世界規模で行われているものです。先輩が千葉大学附属幼稚園に掛け合ったり、志願者を募ったりと多大なる努力の結果、実現しました。次に外国人無料健康相談会への参加。これは元々主催している団体があり、お手伝いという形で希望者を募って参加していましたが、数年前から参加者が減り、もう千葉大学からの参加者がごくわずかとなってしまいました。それを再び、大々的に宣伝し、世界医療からたくさんの人間が再び参加するようになったのもこの年からでした。このように世界医療は以前よりもみんなと活動

する機会が増えたことは喜ばしいことであり、代表としての私にとっても、とても嬉しいことでした。

この年、もう一つ世界医療の転機となったことがありました。前年まで顧問を務めてくださっていた神経生物学前教授の山下先生が他大に行かれることになり、後任の先生を探さなくてはならなくなったのです。当時、顧問をなさっていない先生にお願いするのがいいと思い、神経情報統合生理学教授の清水先生のところをお願いしに伺ったところ、清水先生は気さくな方で、快く引き受けてくださり、胸をなでおろしたのを覚えています。快く引き受けてくださり本当にありがとうございました。

私はといえば、この年前述した世界医療を通した留学プログラムでオーストリアに1ヶ月間留学しました。本当なら、英語圏に行くというのが普通だと思える方が多いかと思いますが、IFMSAでの留学は、英語が堪能でなくては英語圏には行けないのです。ですから、英語が母国語ではない地域に留学しました。1ヶ月間、日本人どころか、東洋人が一人もいない中に一人で飛び込み、つたない英語でコミュニケーションをとり、研究室で実験を行っていました。また、週末は仲間と、また時には一人で旅行に行き、色々なものを見ました。本当にサバイバルで日本人がいかに英語を話せないかをものすごく実感しましたが、いい経験が出来て、本当に有意義な1ヶ月でした。

現在、世界医療があるのは、青木先生が創設してくださり、それを引き継いで現在まで続けてきて下さった先輩の方々のお陰です。また、清水先生をはじめとして、顧問を引き受けて下さった先生方のお蔭でもあります。多くの方の努力により、このサークルが存続し、私とその部員になれたことに感謝しています。本当にありがとうございました。

(きくち やすき)

東洋医学研究会

並木 隆雄

初めに

一般的な大学での文化系同好会は、趣味的な同好会の集まりであることが多いと思われる。しかし、当研究会はその様な趣味を超えた動機での創会の経緯があり、成り立ちから少し異質な研究会である。たぶん、千葉大学の同窓生の方々は、驚く方も多いかも知れないが、実は日本において東洋医学というものが大学アカデミズムと出会った最初の歴史が、千葉大学の東洋医学研究会の歴史と重なるのである。つまり、日本で最初に大学において正式な手続きを経て創会された東洋医学関連の同好会である。そういう意味から千葉大学医学部135周年記念誌に東洋医学研究会のことを書かせていただけるのは、大変名誉なことであり、長い歴史があつてのことであると理解している。

歴史（当研究会出身者は一部敬称略）

わが研究会の歴史は、戦前の昭和14年（1939年）にさかのぼる。平成21年に創会70周年を迎えた。千葉大学東洋医学研究会30年史・50年史・60年史が発刊されており、その中に詳しく載っているのですが、詳細はそれらの発刊物に任せるが、抜粋をお書きする。それらの内容の大まかな流れは、末尾の表にのせたので参照いただきたい。

昭和14年5月に学生で同級だった藤平健（昭和15年卒）と長浜善夫（昭和15年卒）が東洋医学に関心を持ち、意気投合して発足に奔走。会長（顧問教官）は眼科教室の伊東彌恵治教授になっていただき、千葉医科大学内に東洋医学研究会（われわれは約して東医研と言っている）が発足した。学生のサークル活動とはいえ、まだ医学会では東洋医学に理解の少なかった時代であったため、顧問教官がすんなり決まらず巡り巡って、伊東教授にお願いしたという（写真1中央：伊東教授）。しかし、そ

れが幸いして、東洋医学全体（漢方医学以外のインド医学など）に関心がおありの伊東先生にお願いできたことである。その後、戦争の時代という暗い時代に入ったため、研究会自体も自然休止状態となった。しかしその様な中、伊東先生は古医書をどんどん買いこみ蔵書を増やされたという（のちに眼科教室に東洋医学研究室という部屋を作られ保存された）。～現在それらの蔵書は千葉大附属図書館亥鼻分館にその他の資料と一緒に保存されている。

終戦後は、昭和21年3月頃から東洋医学の講義を再開された。その講義は、現在にも続く千葉大学東洋医学研究会『自由講座』（昭和22年～現在）に連なっている。『自由講座』は名前の通り、学生が選択で自由に聴講できる講座ということで、教授会の承認の元、学内で課外授業の形態をとって行われた。講師陣は主に藤平先生と小倉重成先生（昭和17年卒）を中心に、和田正系先生（大正11年卒）、伊藤清夫先生（昭和13年卒）も加わっていただいたと記録されている（写真2）。また、『自由講座』が始まる前に、眼科の東洋医学研究室で漢方外来を「臨床講義」という名で同時に始めた（写真3）。実際の外来があつたおかげで実際の漢方診療に触れることができた学生も多かったと思われる。その頃の大きな出来事に、昭和24年に「東洋医学研究所設立趣意書」の文部省への提出がある。この趣意書は千葉



写真1. 顧問の眼科伊東教授を囲んで(昭和24年当時の東医研関係者)

第5章 交友の広がり

大学医学部の教授会で承認を得て伊東弥恵治教授が提案したものであった。残念ながら結果にはこの提案は採択されなかった。しかし、現在も研究会同窓会などの大きな集まりでは、鍋谷欣市（昭和27年卒）がよくこの趣意書の説明をされている。まさに伊東教授の東洋医学に対する熱気は語り続がっていると個人的に考えている。

昭和44年ころから、『自由講座』が一般医療関係者・一般人も卒後教育・市民講座という趣旨も含ん

で聴講できる公開講座形式となり（写真4）、現在も千葉大学附属病院3階の第2講堂で木曜日に開催が続いている。一方、30年以上続いた漢方外来は昭和54年9月末で閉じることとなった。というのは昭和54年4月に附属病院が現在の建物に移動するのの際して、受付方法やカルテの保管システムが変更となったためであった。期しくも同じ年の4月に富山医科薬科大学附属病院和漢診療室が開設され、当研究会出身の寺澤捷年（昭和45年卒）、土佐寛順（昭和50年卒）が着任された。その後、続々と、当研究会関係者を中心に富山医科薬科大学和漢診療部に千葉大学から医師が赴任した（今田屋章（昭和46年卒）、三瀧忠道（昭和53年卒）、伊藤隆（昭和56年卒）ほか）。

こうして、一つの時代が終わり東医研『自由講座』の運営が新たな段階になった。これ以降、千葉大学自体は中堅の先生方が不在となったため、『自由講座』は、藤平・小倉両先生と松下嘉一（昭和36年卒）などの東医研出身の開業・勤務医と若手医師（並木隆雄（昭和60年卒）、勝野達郎・佐藤良一（平成2年卒）、渡辺哲（平成5年卒）など）、や東医研出身以外で手弁当でご協力いただいた先生方（秋葉哲生先生、池田和広先生、石毛忠雄先生、板倉米子先生、鎌田慶市郎先生、小林三剛先生、鈴木重紀先生、田畑隆一郎先生、千葉東弥先生、中村謙介先生、細川喜代治先生、村上えい子先生、盛克己先生、山下泰徳先生：あいうえお順）のご協力で支えられることとなった。また、平成15年からは会長の田邊教授のおかげで千葉大学医学部附属病院卒後・生涯医学臨床研修部および薬学部山崎真巳助教授により千葉大学大学院薬学研究院との共催の形になった。平成17年には千葉大学に和漢診療学講座が開設されたのを期に、その後同講座関係者が講師に加わり現在に至るのである（平成22年度は、これまで出てきた先生以外に喜多敏明先生、笠原裕司先生、地野充時先生、池上文雄先生が加わっている）。

この間の東洋医学研究関連の大きなイベントは下記である。

昭和54年に40周年を迎えた。記念式典を翌年開催。
平成元年に50周年を迎えた。記念式典を開催。
平成11年に60周年を迎えた。記念式典を開催。
平成21年に70周年を迎えた。記念式典を開催。

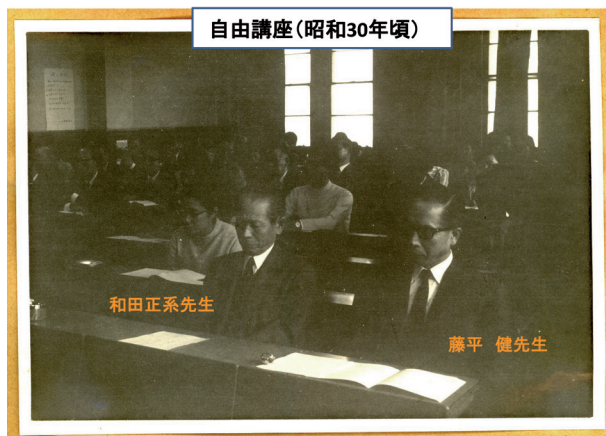


写真2

漢方外来



写真3

自由講座公開講座（昭和44年）

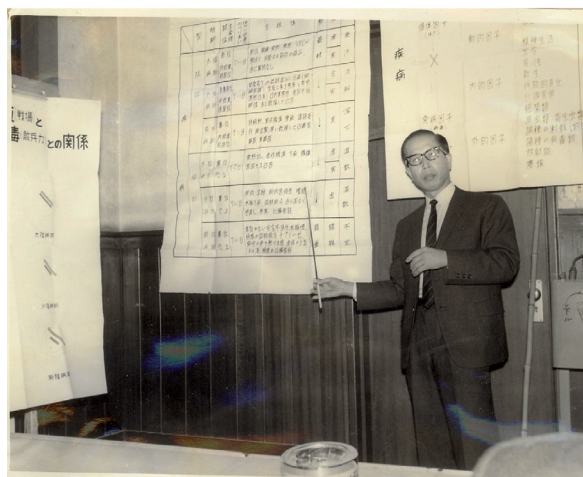


写真4

歴代会長

70年以上の歴史のなかで、顧問をしていただいた先生方をご紹介します。

伊東彌恵治先生

(眼科学教授 昭和14年～昭和26年)

鈴木 宜民先生

(眼科学教授 昭和26年～昭和50年)

熊谷 朗先生

(第二内科教授 昭和50年～昭和57年)

奥井 勝二先生

(第一外科教授 昭和57年～平成3年)

大藤 正雄先生

(第一内科教授 平成3年～平成7年)

(当研究会出身)

今野 昭義先生

(耳鼻咽喉科学教授 平成7年～平成14年)

田邊 政裕先生

(医学教育研究室・総合医療教育研修センター教授 平成14年～現在)

所属学生と活動

学生は、初期は医学生が中心であったが、途中から薬学部生、附属病院看護学校生、看護学部生などが加わった。昭和53年ころから、薬学部では鳥居塚和生(薬学部52年卒)により西千葉キャンパスでも独立した活動を始めた(薬学部東洋医学研究会)。その後の薬学生は、薬学部東医研と東医研(亥鼻)の両方に所属する人も多かった。また平成に年号が変わったころから西千葉でもさらに積極的に勧誘を行われ、文学部、教育学部、法経学部、理学部、工学部、園芸学部と多彩な人材も出入りするなど、華やかな時代に入った。学生の人数は多い時は卒業生ベース(卒業年限が所学部ごと違うため)でたとえ

図1. 部員数(卒年1940～70年度)

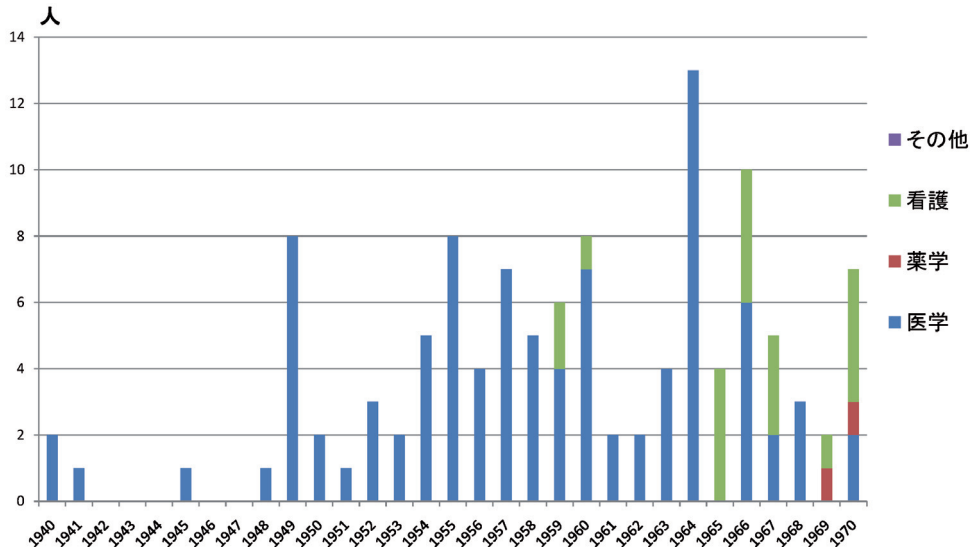
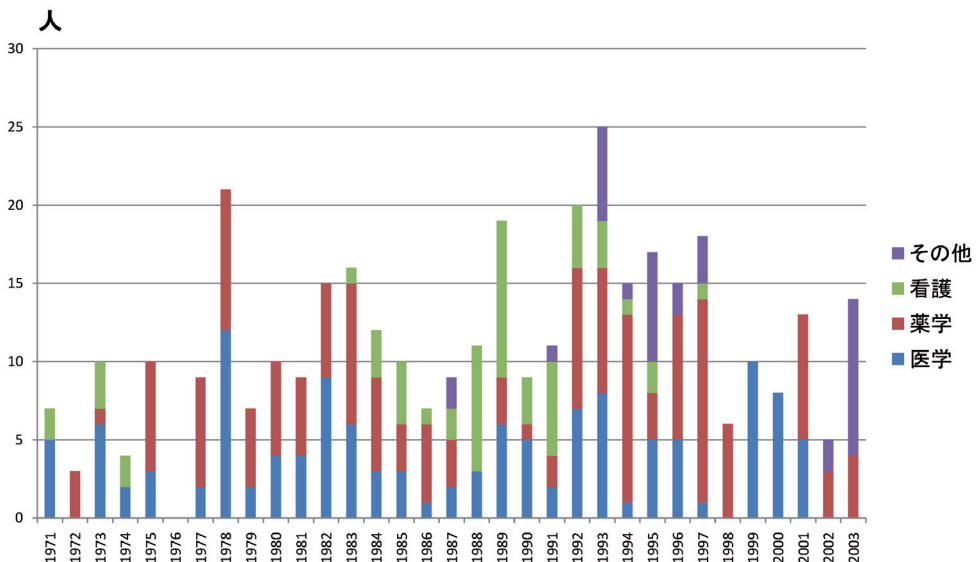


図2. 部員数(卒年1971～2003年度)



第5章 交友の広がり

ば、昭和53年度は20名、平成元年度19名、平成5年度25名など多数の部員を抱えた時期もあった。しかし逆に少ない人数が続く年もあった(図1・2)。「人数的には隆盛の時期もあり、また存続を危ぶまれた時期もあった。隆盛を誇った時期は部長がそれをまとめてゆく求心力を発揮するのに骨をおり、また少人数のときには自由講座の存続に必死の思いで努力された(五十年史より)」。図でもわかるように1940(昭和45)年ころまでは、医学部中心だったが、それ以降多彩になったのがわかる。

活 動

70年の長い歴史のある研究会であるので、その時代時代で、活動状況もさまざまであったと思われる。現在の部室は、昭和57年ころから、サークル会館(旧精神科病棟)の2階にあり、そこで部会などの活動拠点としている。それ以前は、現在の病院のバス停向かいの駐車場にあった建物内にあった。木造の建物のなかにあり、ベニヤ板で仕切られ、一部雨漏りがするような場所であった。

活動内容は、時代ごとに全く異なりまとめるのは困難である。とはいえ、基本は、学生どうして勉強会(部会)を開き、それに加えて木曜日の『自由講座』で藤平先生を中心とした先輩の講義を受けるという形であろう。たとえば、筆者が所属していたころ(昭和54年4月~60年3月)の活動は、部会が週1回(月曜日)と木曜日の自由講座(16時30分~18時30分)であった。そのほか、部員が多い時は臨時に他の曜日に集まりたとえば、鍼灸の勉強会が開かれた(鍼灸班)。部会では、在校の先輩が作成してくれた初級テキストを用いて東洋医学全般の講義をうけた。さらに少し慣れると1年生が自分たちで担当を決めて教え合ったりもした。1学期も過ぎて夏休みには、数日の合宿を行った。その際、手作りの中級の教科書を分担で作成、予習を兼ねた。とはいえ、東洋医学は自習が難しく、そうは簡単には勉強できない。実践が重要である。部室には頻用の漢方エキス剤を分包し保存していた(薬局から廃棄予定の分包機をもらってきて、分包は自分たちで行っていた)。そうして分包した漢方薬を実費で買って、自分や家族の主に感冒などのときに用いて、腕を磨いた。

さて、秋は、ゐのはな祭と西千葉での大学祭があり、それに向けての準備と開催(9~11月)。そして、1年の締めくくりは、卒業生の追い出しコンパ。さらに4月の新入生勧誘のための準備(新入生

のための初級テキスト作成や勧誘ビラ作り)で1年はあっという間に過ぎて行った。

このようなめまぐるしい活動の中、サークル活動の魅力の一つは、大学の先輩後輩との出会いや、他学部の人々との交流である。たぶん今も昔もこのことは変わらないと思う。

最後に、最近の活動について現役部員にお願いして書いていただくこととした。

現在の活動

(2010年担当:医学部2年 山内陽介)

現在の千葉大学東洋医学研究会の活動は、1)毎週水曜日18:00~19:30に部室にて学生による東洋医学勉強会、2)隔週木曜日18:00~19:30に大学病院3階第2講堂にて千葉大学東洋医学自由講座、3)他大学との交流、4)実際の診療見学、鍼灸師・神経内科非常勤の村上えい子先生による鍼灸実習、といった活動を行っております。

- 1) 東洋医学勉強会は学生が主体の初学者向けの勉強会で、2010年度より開始いたしました。講師役は学生が務め、毎回パワーポイントスライドで16枚程度の勉強資料を作成し、先生方には恥ずかしくて聞けないような基礎の基礎から勉強を始めています。本勉強会資料はホームページ上で公開し、他大学の初学者に対してもアクセスを可能にして、全国の医療系の学生にとっても漢方医学がより身近なものになるよう努力しております。目標としてはプライマリケアの現場で漢方診療ができるようになることを目指していますが、なかなか到達するのが難しい目標ですので、最低でも漢方医学の全体がなんとなく自分なりに理解できるレベルまでは到達したいと考えています。現在は一人の学生が主に講師を担当していますが、会が進めるにつれて他の学生にもデレゲーションを行い、部員全体で調査能力、資料作成能力、発表能力の向上を目指していきたいと考えています。
- 2) 千葉大学東洋医学自由講座は、始まってから2010年で64年目になる非常に歴史のある講座です。日本の東洋医学の第一線で活躍されている先生方がお忙しいところ講義をして下さっています。2010年度の前期は東洋医学の入門講座を講義して頂いており、後期には東洋医学の重要古典である傷寒論を読み進める形の講義をして頂いております。講座に参加資格は設けておらず、医師、薬剤師、学生および一般の方まで幅広く参加していただいております。毎回40~50名ほど参加いた

だいており、講堂が手狭になるほど大盛況の講座になっております。

3) 他大学との交流として、全国各地で各々の大学の東洋医学研究会が合同でセミナーなどのイベントを行っております。2010年度の日本東洋医学会でも、学生によるワークショップ「学生、若手医療人のための東洋医学—研究会活動の全国展開について考えてみよう—」が開催され北海道から九州までの全国の東洋医学研究会が集まって交流をしました。関東地区では年に一回「はるかん」という名前の1泊2日の合宿セミナーが企画されており、東海地区では「東百会（とうひゃくかい）」、九州地区では「九鼎会（くていかい）」という名前で大学を超えたイベントが企画されています。千葉大学東洋医学研究会としては「はるかん」という関東圏のイベントに参加しており、年に1回、1泊2日で学生による学生のためのセ

ミナーを企画しています。毎年80人以上の学生が参加しており、学生同士で勉強し刺激を与え合うことのできる貴重なイベントとなっております。

4) 実際の診療見学、鍼灸師の先生による鍼灸実習として、座学を超えた体験をすることで、勉強した内容を実際に現場で生かすことのできるよう努力しております。

現在の千葉大学の学生たちは、非常に多くの人々に支えられながら（特に千葉大学東洋医学研究会の活動にお力添え頂いている先生方には本当に頭が下がります……）、東洋医学の勉強をさせていただいております。学ばせていただいたことを自分たちの糧にすることは勿論、全国の他大学の学生とも共有し、インターネット上でも学習に有用な情報を公開することで、最終的に、より多くの患者さんが東洋医学の恩恵を受けられるよう努力していきたいと思っております。

千葉大学東洋医学研究会の流れ

昭和14年	千葉医科大学 東洋医学研究会 発足 会長 眼科教室 伊東弥恵治教授 藤平健先生と長浜善夫先生が発足に奔走	昭和54年	富山医科薬科大学附属病院和漢診療室開設（4月）
昭和15年	藤平健先生が卒業 軍医として出征 東洋医学研究会 自然休会状態 ～太平洋戦争中は伊東教授が東洋医学の古書を蒐集し、現在附属図書館亥鼻分館の古医書コレクションとなっている～	昭和55年	診療開始（10月）寺澤捷年・土佐寛順先生着任
昭和20年	千葉医科大学 東洋医学研究会 の再建 東洋医学講義が始まる（のちに自由講座となる）	平成2年	附属病院和漢診療部教授に寺澤捷年先生就任
昭和22年	東洋医学研究会 「自由講座」開設	平成5年	富山医科薬科大学医学部和漢診療学講座開講
昭和24年	『東洋医学研究所設置趣意書』（教授会承認）を文部省に提出	平成元年	第一内科（大藤正雄教授）松下嘉一先生漢方外来診療開始
昭和25年	自由講座開始時間前に漢方外来が始まる	平成2年	東洋医学研究会 50周年記念史編纂
昭和44年	公開講座開設・のちに自由講座と1本化 東洋医学研究会 30周年記念史編纂	平成9年	藤平健先生 死去
昭和48年	第1回千葉東洋医学シンポジウム開催	平成11年	東洋医学研究会 60周年記念史編纂
昭和54年	新病院（現附属病院）移転、漢方外来中	平成16年	柏の葉診療所開設
		平成17年	和漢診療学講座開設（4月）寺澤捷年教授就任 附属病院で診療開始（10月）
		平成21年	東洋医学研究会 70周年記念会

（なみき たかお）

亥鼻祭実行委員会

吉村 健佑, 池内 博紀

『10年ぶり「亥鼻祭」復活の経緯』

亥鼻キャンパスには、1993年から10年間、大学祭がありませんでした。私はこの亥鼻祭の復活を目指し、2003年度亥鼻祭実行委員長として活動しました。もう6年も前のことになりますが、その目的と経緯を述べさせていただきます。

1. なぜ「大学祭」か？

私は東京の大学を中退して、千葉大「再入学組」でした。2000年の入学当時、大学には活気がありませんでした。確かにサークル・部活動は驚くほど盛んです。しかし、学生の授業に対する期待感は薄く、学生が将来の展望を語り合うこともない。学生は大学への不平不満ばかりを言いあっていました。折しも国立大学の独立行政法人化が決定し、「個性と魅力ある新しい大学作り」が叫ばれていた頃です。

このままでは千葉大学がつまらない三流大学になる、と思いました。確かに千葉大学の入試の難度は高い。しかし、大学の本当の価値とは、魅力ある「場」です。そこの学生・教官がいかに目を輝かせて学び、教えているか。自分の理想に向けて燃えているか、にその真価があると考えました。魅力ある場を求めて、面白い人材、優秀な人材が集まる。そんな大学に千葉大がなれたらいいのではないか。入学試験の難化はその結果であり、前提ではありません。

では、学生から行える「魅力ある千葉大作り」とは何だろうか？そんなことを考えている頃、学生自治会長もしている先輩と八ヶ岳に登山に行くことになりました。山小屋で車座になり語り合っていると、「じゃあ、大学祭でもやるか」との話になりました。実は2000年に組織された医学部学生自治会の事業計画に「亥鼻祭の復活」という項目があるそうなのです。その昔、亥鼻には文化祭としての「亥鼻祭」と「体育祭」が存在し、地域を巻き込んでのイベントになっていたことも始めて知りました。しかも亥鼻祭の歴史は古く、千葉医科大学の時代より行われていた伝統行事でもあったのです。そして、西千葉キャンパスには「千葉大祭」、松戸キャンパスには「戸定祭」があるのに、亥鼻だけお祭りがな

いのです。

これはいい案だと思いました。一年中、「大学のために何かやろう!!」では学生達も疲れてしまう。学生には部活もバイトも勉強も飲み会もあります。そこでせめて1年に1度「亥鼻祭」の間は、千葉大について、将来について、医学と医療について、学生が主体的に語ろう。そんな思いで、亥鼻祭の復活を掲げました。当時私が医学部3年生、2002年11月のことです。

2. 意外に高い「ポテンシャル」

亥鼻キャンパスには医学部の他に看護学部もあり、その学生を合わせても約920名の小さな規模です。早速A4で6ページほどの「亥鼻祭企画書」なるものを作成し、知り合いを頼りに掲示・配布し、第1回亥鼻祭実行委員会を開催しました。12人ほどの参加でした。そのメンバーを中心に、亥鼻祭実行委員会本部を作り、さらに、「企画」「広報」「施設」「財務」を「局」として設立し、その局長も本部に加え、中心となるメンバーは医学部・看護学部の学生約10人でした。

10人、やる気のある人間が集まれば、とたんに仕事は捗りました。学部長・事務長・同窓会長などへの連絡、委員の募集、とんとん拍子に進みました。亥鼻には優秀で熱い、面白い学生達が沢山いたので

す。そして、卒業生からの反応が秀逸でした。賛同してくれる方より寄付を募り、0円だった予算がすぐに100万円を超え、その後もどんどん集まりました。実行委員は2003年4月には新入生を迎え、100人を超えました。最高に忙しく、最高に楽しい日々でした。祭のテーマはストレートに“今の「千葉大」でいいんですか？”としました。学内の一部からは「大学に対し挑戦的だ」と批判もされましたが、議論を生み、話題性を確保する意味でいい題が付きしました。

3. 地域の支援

10年前に消滅した亥鼻祭を学生は誰一人知りませんが、地域の方々は当時の亥鼻祭を知っていました。広報活動のために地域の商店や町内会長さ

んに挨拶回りをしていると、たびたび励ましの言葉を頂きました。学生と地域、とても距離が開いていたのです。「病院は病気になったら行くところ。だから同じ敷地の大学もあまり行きたくない」「死体があるのでしょ？不気味だよ」という方もいました。千葉大学でありながら、いかに「千葉」という地域と離れていたかを実感し、問題意識がわきます。学生としては身軽に、気軽に地域に入っていきます。学生自ら行動することの可能性を感じました。スーツを着て、名刺とパンフレットを手に、地域のさまざまな医院・商店・医師会などを仲間と一緒に駆け回りました。地域との関わりを取り戻したことも亥鼻祭が契機となったと思います。

4. 花開いた祭の日

構想から1年後、2003年11月2日3日に、「亥鼻祭」は開催されました。同日に開催されている西千葉「千葉大祭」の会場とは無料シャトルバスを往復させました。作家の柳田邦男氏、本学卒業生である緩和ケア医の山崎章郎先生等をお招きしてのシンポジウムでは医学部記念講堂が聴衆で一杯になりました。広報局の働きかけで、大手新聞5社の千葉欄に亥鼻祭の記事が掲載されました。千葉大生はもちろん、医学部志望の受験生、お年寄りから、親子連れ、職員の家族、さまざまな客層が来場してくれました。各部活が売る模擬店では売り切れ続出です。結局、2日間で5000人を超える方がいらっしやいました。実行委員は学部・学年・部活を超えて協力し、ともに汗を流しました。みんな「一から作る」亥鼻祭を楽しみました。委員長である私はまさに感無量で、最終日に思わず涙しました。この経験から本当に多くを学びました。人の上に立つ難しさ、楽しさ。意思決定、情報共有の方法。後輩を育てる難しさ、喜び。会議が進むこと、飲み会で生まれること。大学時代に得た私の財産です。

目標を達成するためには、多くの仲間、協力者を得る必要があります。結局は「人」でした。一緒に汗を流した仲間とは今でも言葉にできない想い・満足感を共有できていると思います。千葉大に来て、本当に良かったと思っています。

5. 亥鼻祭卒業生として

その後の亥鼻祭の発展については後輩の記事に譲ります。ただ、ここで伝えたいことは亥鼻祭が復活したのは「千葉大医学部の伝統」あつての事だということです。多くの卒業生からの寄付という形で届けられたエールがどれほど学生を励ましたことか。

「若い連中がやりたいなら大いにやりなさい。我々は応援するよ、お祭りはいいからね！」と当時の渡辺武同窓会長から頂いた応援の言葉は忘れられません。今後は卒業生の一人として、志ある学生の活動を応援してゆこうと思っています。同窓会員の皆様も亥鼻祭への支援を今後ともよろしくお願いします。

(よしむら けんすけ)

『7年目を迎えて』

2003年に亥鼻祭が復活して8年が経ちました。今、千葉大学医学部看護学部が地域に発信する場としての亥鼻祭は大きな岐路を迎えています。現役学生を代表して亥鼻祭の現状と未来について述べさせていただきます。

1. 「大学祭」が存在すること

2006年の春、私は一年間の浪人生活を経て千葉大学に入学しました。そして多くの他の同級生と同じように部活に入り、また部活の先輩に誘われるままに亥鼻祭に関わることになりました。それから5年、亥鼻祭は非常に大きな団体になりました。新たに入学してくる後輩の多くが亥鼻祭に興味を持ち、参加してくれることは元委員長として非常に嬉しいことです。

しかし、ここ数年で「大学祭」への関わり方は大きく変化しました。私を含め、現在の学生は亥鼻祭の初年度を知りません。「大学に大学祭があるのは当たり前」ということ、これは亥鼻祭が千葉大学にまた根付いたことを意味します。しかし、同時に、新たに何かを生み出そうとするエネルギーが不足していることをも意味しています。亥鼻祭が存在することに慣れてしまい、既存の企画を例年通り実行することに終始し、「新たな自分を発信する場」としての亥鼻祭を模索することがなくなってしまったように思います。

千葉大学にしっかりと根付きながらも毎年進化を続ける大学祭になることが、今後の亥鼻祭の課題になると思います。

2. 日本一価値のある大学祭

昨年、寄付を頂いた挨拶として同窓会総会にお伺いさせていただきました。その際、「亥鼻祭というのは昔、千葉市の一大イベントだった。」というお言葉を頂きました。私たちにとってそれは非常に心強いお言葉であり、また「地域に根ざした大学祭を

第5章 交友の広がり

創ろう」という方向性が正しいと確信させるものでした。年々大きくなってきたとはいえ、亥鼻祭は来場者3000人の小さな大学祭です。数では都内の大学にはまず及びません。それではこれから亥鼻祭は何を目指していけばよいか？そんな話し合いの中から生まれたのが「日本一価値のある大学祭を目指そう」という言葉です。幸い、亥鼻祭にはその土壌があります。医療系キャンパスという特殊な環境、協力的な地域の方々、そして学生自身の高いポテンシャル……これらを最大限活用することによって、亥鼻祭は他に類を見ない、学生にとっても来場者にとっても非常に価値の高い大学祭になると考えています。そして、それが達成されたときに亥鼻祭は千葉大学の新たな伝統となると思います。

3. 最後に

2010年11月6日、7日、第8回亥鼻祭が行われました。

今回も天候に恵まれ、約3,000人の方にご来場いただきました。

これから先、亥鼻祭は時代に沿った変化をしていくことと思います。その中で、先輩方から受けついで「学生の持つパワー」を後輩に引きつぐことが、自分達の役目だと思っています。

最後になりましたが、同窓会の先生方には毎年多くのご声援、応援を頂きまして誠にありがとうございます。委員長就任中は特に多くの方に支えて頂いているのを切に感じました。今後とも亥鼻祭へのご支援のほどをよろしくお願い致します。

(いけうち ひろき)

学生自治会

新津 富央

千葉大学医学部学生自治会復活の経緯

はじめに

「復活の経緯」というからには、以前には存在していたものが一度終焉を迎え、その後復活したことになると思います。

まずは、千葉大学医学部85年史および百周年記念誌を参考とし、学生自治会の沿革をまとめてみたいと思います。より詳細につきましては、各記念誌をご参照いただくと幸いです。

千葉大学医学部学生自治会の沿革

大正14年5月8日、千葉医科大学創立記念日の記念式典と共に大学学友会の発会式が挙行されました。この学友会は、学生の親交と心身の鍛錬のために、文化部と運動部で構成されていました。翌年以降、新生の歓迎会を開催し、昭和4年頃より5月の創立記念日前後に学友会の総会、文化祭、運動会を開催していました。昭和7年には10月と11月の交に体育週間が設けられ運動会などが開催されました。これが後の大学祭の起源になりました。

大東亜戦争が迫る社会情勢の中、自由主義、放任主義による学友会は昭和16年3月に発展的解消となり、5月8日の大学記念日に報国団が結成されました。10月と11月の交には約一週間の大学報国祭が開催されました。この時には、運動会や文化的行事と共に大学公開が行われ、現行の大学祭に近い形で開催された最初の大学祭となりました。

戦後、昭和21年2月に千葉医科大学学生会が発足し、報国団は解消されました。昭和24年に千葉大学が成立し、千葉医科大学は医学部として改組されました。昭和28年10月に従来の学生会に代わり、千葉大学医学部学生自治会が発足しました。昭和29年から大学祭は千葉大学全学機構にて開催されることになりました。なお、学園紛争の時代については百周年記念誌をご参照いただくと幸いです。

学生自治会と購買委員会

購買委員会については正確な資料が残されておらず、同窓会の諸先輩から集めた情報を参考にまとめました。よって本章につきましては、不正確な内容が含まれている可能性があることを、あらかじめお断りしておきます。

終戦後の混迷と困窮の中にあり、学業に必要な資材を確保するため、学生は所謂ヤミ市で物資を確保することがあったようです。時期は不明ですが、学生自治会では独自に売店を運営する購買委員会を設置しました。それは、学生自治会の中の一委員会として、連綿と続いていました。学生から集められた出資金により独自に販売員を雇用して、同窓会館で学生と教職員に文具、教材、食品などを安価に提供していました。また、解剖学実習に使用する道具や洋書などを共同購入することも担当していました。

売店は、一時期は大学病院に設置されていたようですが、昭和62年頃には閉鎖されたようです。また、医学部本館1階にも設置されていたようです。しかし、顧客のニーズが多様化し多角的な経営が求められる時代となり、学生による売店の運営体制では時代に合わないものとなってしまいました。当時、「おばちゃん」と学生から親しまれていた販売員の女性達には退職金が支払われ、平成8年頃に発展的解消を遂げたとのことでした。

学生自治会の活動であった大学祭は、平成5年の開催を最後に開催されなくなりました。その後、学生自治会は購買委員会による売店の運営という形でのみ存続していました。しかし、売店の閉鎖と共に、学生自治会は事実上消滅しました。

千葉大学医学部学生自治会復活

私は平成9年に入学し、所属した水泳部の先輩から、学生自治会活動の名残であった解剖学実習用具の共同購入係を引き継ぎました。そして、かつての学生自治会と大学祭の存在について知り、学生生活に資する活動を模索していくようになりました。

まず取り組んだのはサークル会館の問題でした。現在のサークル会館は、昭和2年に精神神経科病棟

第5章 交友の広がり

として建設された、当時としてはモダンな由緒ある建物でした。昭和53年に現在の大学病院が建設された後から、学生サークル会館として使用されていました。私が学生として利用するようになった平成9年頃には、約20年の間に蓄積された古い教科書や資料、故障した備品などが廊下まであふれかえる状態でした。また、トイレや水回りも使用に耐える状態になく、切れかけた照明が点滅を繰り返し、天井の一部に崩落する箇所があるなど、防災上も危険な状態にありました。まさにゴミ屋敷と化しており、その不気味な有り様は夏の夜におばけ屋敷として利用するに相応しいものでした。それまで各部活が大学に対し、個別に修繕の要請をしていましたが、細かな修繕では焼け石に水でした。

またサークル会館以外にも、講義室や同窓会館など学生が利用する施設の老朽化が進んでおり、学生生活の環境は決して良いとはいえませんでした。それは「亥鼻キャンパス」という心地よい響きからは想像もつかない状況でした。

平成13年3月、私はこのような状況を改善すべく、学生自治会を復活させ学生の意見をまとめて大学側に要請することを、各部活の代表者に呼び掛けました。提案は好意的に受け入れられ、同期の篠崎勇介氏や土居厚夫氏が学生自治会発足に向けて積極的に協力してくれることになりました。私と篠崎氏は会則の作成や全学生の承認を得る準備を進めました。そして、全学年の教室を回り、学生自治会の発足趣旨を説明し、承認を得ることができました。

平成13年5月1日、私と篠崎氏を発起人代表とし、千葉大学医学部学生自治会が正式に発足しました。本会は、その目的を「学生の親睦を深め、また将来の入学生も視野に入れて、学生生活の向上をはかること」としました。本部は千葉大学亥鼻地区サークル会館に置きました。当初の活動資金には、購買委員会時代の運営資金の残金を充てることになりました。

発足に際して、当時の福田康一郎医学部長からご祝辞を賜りました。折しも平成16年4月に国立大学法人化を控え、全学をあげて千葉大学の存続をかけた改革が押し進められる最中でした。医学部は平成13年4月に大学院大学化を果たし、医学教育体制の改善、学生生活の環境整備、学生と教官の意思疎通の向上などの必要性が高まる中で、学生自治会の発足は教授会にも好意的に受け入れられました。

5月9日には第1回代表者会議が開催され、役員の選出や委員会の設置、顧問の選出などを決議しました。

役員

会長	新津 富央 (平15卒)
副会長	篠崎 勇介 (平15卒)
	土居 厚夫 (平15卒)
	唐沢 千裕 (平17卒)
書記	石橋 亮一 (平19卒)
	牧田 美香 (平15卒)
会計	宮原 雅人 (平17卒)
	佐藤 文紀 (平16卒)
監事	手塚 真紀 (平15卒)
学年代表	各学年2名ずつ

設置された委員会

サークル会館整備委員会、体育館整備委員会、新入生歓迎委員会、試験日程調整委員会、カリキュラム委員会、環境整備委員会、図書委員会

顧問は、湯浅茂樹教授(旧第二解剖)、大沼直躬教授(小児外科)、瀧口正樹教授(第一生化学)、伊豫雅臣教授(精神神経科)に就任していただきました。

6月11日には、福田医学部長、大沼厚生留学生部会長、湯浅学務委員長、事務担当者らと学生自治会役員らとの会議が開催され、学生側からの要請が伝えられ、その実現性について議論されました。この議論により、老朽化した設備や授業カリキュラムな



搬出された粗大ゴミ サークル会館屋上から撮影

どの現状把握や、緊急性、重要性の認識において、学生と教官の間には相違があることが浮き彫りとなり、改めて相互の意思疎通の重要性が共有されました。

この会議に先立ち、6月9、10日には学生によるサークル会館と体育館の一斉清掃が行われ、写真のように大量の粗大ゴミが搬出されました。その処理には百万円を超える費用を要したとのことでした。この時のサークル会館の環境整備を皮切りに、学生生活の環境整備が進みました。また、新入生の歓迎を各部活が協力して行うなど、部活同士の連携も強化されていきました。正課に関しても、大学が推進する医学教育カリキュラムの改善について議論され、学生の意見が一層反映されていくようになりました。(なお、サークル会館は平成19年に大規模な改修が実施されました。)

亥鼻祭復活へ

平成13年11月、大学創立記念日の休暇中に、私は仲間と栃木県那須岳へ登山に出かけました。三斗小屋温泉に泊まり、仲間と酒を酌み交わしながら、大学の話から猥雑な話まで熱く語り合ったことは良い思い出となっています。その場には、後の学生自治会長となる寺谷俊康氏(平16卒)、松本晴樹氏(平18卒)、亥鼻祭実行委員長となる吉村健佑氏(平19卒)がいました。

12月に寺谷氏が自治会長となり、組織の改編が行われ、亥鼻祭実行委員会が設置されました。

平成14年3月には医学部長らとの会議が開催されました。そこでは、亥鼻キャンパス内の慢性的な駐車場不足解消のため、テニスコートやグラウンドを駐車場にする計画が議論され、学生側は大学設置基準などを参考に、課外活動施設の重要性やその存続を主張しました。一方で、男子硬式テニス部が廃部にされるといふ悲しい事件もあり、学生の課外活動における責任や倫理が問われることになりました。

亥鼻祭復活へ向けた布石としては、秋には橋田知明氏を実行委員長とした亥鼻音楽祭が開催され、体育館でバンド演奏などが行われました。

また、同じ亥鼻キャンパスで過ごす看護学生らとの協力体制を整える必要があり、看護学生に看護学部でも学生自治会を発足するように呼びかけました。その結果、平成14年11月に当時の看護学生の岩永睦美氏(平17看護学部卒)を会長として、千葉大学看護学部学生会が発足しました。このように亥鼻キャンパス全体に亥鼻祭復活へ向けた機運が次第に

高まっていきました。

12月には鳩貝健氏(平17卒)が自治会長となりました。また、吉村氏が亥鼻祭実行委員長となり、平成15年11月に亥鼻祭が10年ぶりに開催されることとなりました。その詳細は別稿に譲ります。

その後も、平成15年から松本氏、平成17年から柴田涼平氏(平20卒)、平成18年から栗本遼太氏(平21卒)、平成19年から越塚慶一氏、平成20年から水地智基氏が学生自治会長となり、亥鼻キャンパスの学生のために尽力してくれました。

おわりに

平成16年からの臨床研修必修化に伴い、卒業生が自由に研修先を選択できるようになり、全国の大学病院では研修医が減少する事態が起きました。それは本学も例外ではなく、卒業生の大学病院離れが深刻でした。そのことを受け、当時の顧問を担当していただいた大沼教授は、学生自治会との会議の際、学生から「現状の千葉大の学生への対応では将来千葉大に帰ってきたくならないのではないか」と指摘されたことをご回顧されています(千葉医学雑誌82:245, 2006)。そして、「愛校心を育てること」と「学生を大切にす環境整備」の重要性をご指摘されています。

本論で述べたように、千葉大学医学部学生自治会は、当時の学生達が自主的に考えて、行動したことにより、復活させることができました。決して誰かの指示で復活させたものではありません。将来の学生達のためにも、環境整備はもとより、今後も学生の自主性が大切にされていくことを願っています。

また、学生自治会の復活により明らかになったことは、学生と教官(大学の事務も含む)との意思疎通の大切さでした。今後も学生自治会が、相互の意思疎通を良好に保ち、千葉大学における学生生活の向上に資する役割を果たしてくれることを期待しています。

最後に、学生自治会の復活に協力し、医学部を、亥鼻キャンパスを、そして千葉大学を盛りたてようと努力してくれた仲間達や、多くの貴重なご助言をいただいた諸先輩に、心から感謝を申し上げます。また、若輩者の私に対して、本記念誌に寄稿することを勧めていただいた白澤浩教授にも、心から感謝を申し上げます。

(にいつ とみひさ)

